700-3
1200501582011

700
3

元道門沙

求を定眞に中の然自
貌全の家師天人るむ

蓮沼文範著

蓮沼文範著

沙門道元

大東出版社

700-3

序

深い森林の木の間を洩れて聞えて來る渓流の響きのやうに、野づらをなで林を亘り新緑の木蔭を流れて行く微風のやうに、故知らぬ懐しさを道元禪師の人格に味はつて來た自分であつた。其のせゝらぎや風の來し方は自分は知らない。唯其の響に其のやわらかさに無限の親しみを感じて來たのであつた。自分が自然と云ふものに眼醒めて其の大いなる胸を披きたい願ひに燃えてから最早や十幾年かの年月が經ち去つた。けれども其の間に自分が感じ得たことは、自然の心を最も深く知り得たものは日本人であつたと云ふことであつた。

西行や芭蕉や宗祇やさうした人々の直接に觸れ得た自然の心も尊い。しかし道元や親鸞や日蓮や、かうした人々の直かに其の魂に生かし得た自然は更に深い廣い涯知らぬ底ひなきものであつた。其處から匂ひ來る微風の如き甘き香と、永遠に心地よく訪れる渓流の如き清淨なる響とは、正に自然の心魂の吐息であり博き愛の囁きでなくてはならぬ。

道元は其の生涯を貫く打坐の生活を通じて強く自然と人生との博きつながりを實證して

呉れた一人の聖者であつた。ともすればこの二つのものゝ分裂に或は對立に人の世の慘らしき運命を覺らめがちである人生に、明朗なる光を投げかけて呉れてゐる。だが坐禪と云ふ不可解を感ぜられるものが何となく人の世と云ふものと禪家とを隔りのあるものとしてゐたやうであつて、其處に道元のこの光あれの至大なる愛と世の生活との調和が常に碍へられてゐたのではなかつたか。けれどもこの垣は撤き放たれた。道元への人々の思慕と其の博き強き人格とは、深き敬愛の一點に於て固く結ばれるやうになつた。

其の人格の重厚なる一面は秋霜烈日の威嚴となつて人々に襟を正さしむると云ふよりも寧ろ寒さを覺えしむるものさへあるが、又其の和煦なる一面は、春風駘蕩として如何なるものも其の博大なる胸に抱かずには措かない和かさを與へて呉れる。寒巖枯木の禪がもつ嚴しき一面と、其の兀々たる一面を破つて岩の狹間を流れゆく春水の軟かさの一面とを併せ有するものは道元禪師であつた。禪師に於てはこの二面が其の一人格に溶融することによつて、我々のよき父であり同時によき母である人天の師家の姿を見ることが出來る。

今こゝにこの懷しき禪師を描いたことは、幾年もの間自分の胸懷に徘徊したこの一人格に對する止みがたき思慕を其のまゝにこゝに素描したに過ぎないけれども、この敬慕の一端を紙上に移すことによつて何か自分の責務の一つを果し得たかのやうな心安さを感ぜしめる。自然の探究に生涯を曝らしたい自分にとつて、この人格を兎に角この程度に描き得たことは自分にとつては何よりの歡びでなくてはならぬ。大方の清鑒を俟つ。

河内生駒西麓の山莊にて

愛染塔生

目次

眞實を求むる者……一
法に生きる者（一）……四七
法に生きる者（二）……九一
法を生かす者……一四一
生活を法の深きに掘下げる……一六二
打坐の行者……二三二

沙門道元

蓮沼文範著

一

默照の聖者道元を顧みる時、其處に故知らぬ懷しさ慕はしさと盡くることを知らない不思議なる生命の蠱惑とを感せしめる。人環を絶した幽谷を鬱林に徊しながら流れ行く谿流のやうに、森嚴崇高なる響を立てゝ永遠に淀むことがない。其の淸冽な姿、其の淸淨な響、其の姿と聲が、彼れが云ふ永遠の而今に今もなほ強く人間の世界に呼かけてゐるのである。この不思議なる存在こそ、人間の世界に於て最も至醇なる欲求としての眞實への願求が齎した崇高至純なるものであつた。

洵に道元は眞實を求めてやまない一人の創造的天才であり無碍の行者であつた。鎌倉時代と云ふ時代的背景が、一方に於て彼れのこの性格を培つたと云ふことも事實であつた。舊佛教の墮落が、舊勢力の崩壞と共に、愈々其の斷末魔に直面してゐた。生命を失つた伽藍と出家が其の醜い生ける屍を累々として白日のもとに曝してゐたのであつた。彼れに先行した法然は早く山を下つて選擇本願の念佛の一行に其の生命を見出して居り、其の弟子親鸞はつゐに顯淨土眞實教行證文類を著して其の深き眞實希求の眞情を吐露してゐる。彼れに後れた日蓮は、法華經壽量品底に題目の眞實を摑んで山を去つて行つた。

山！　卽ち比叡山は舊勢力と舊佛教の牙城であつた。次第に色褪せては行くものゝ、久しく蓄積せられた力はやはり世の信用と國民の輿望とを繫いでゐた。とは云ふものゝ、眞實なる道の求道者達はすべて山を下つて行つたのであつた。道元もやはり一人の求道者としてこの鎌倉の正治二年に、京都の名門として門閥一頭地を拔く久我通親の子として生れたのであつた。彼れが若し一人の眞實なる求道者であるならばやはり山に登り山を下らざるを得なかつた一つの運命を持つてゐたのであつた。眞實を希求するものは常に運命的に悲

慘であつた。

二歲にして父に別れ、八歲にして母を失ふ。人世の苦楚は幼にして父母を喪ふ程、深刻なものはない。法然も親鸞もやはり片親か兩親を先立てたことを契機として山に登り出家得道の生活に入つたのであつた。一人の孤兒としての道元には、兄の通具が父母に代つて愛撫を惜しまなかつたし、伯父の九條師家が彼れの顯才に眼をつけて彼れを養子として其の將來を保證して呉れる、と云ふ幸福はあつたにしても、彼れの小さい胸を深く刳ぐつた人世の無常と云ふ一課題は、人の世の如何なる幸福も、彼れには果敢ない一つの空虛な事實としか思はしめなかつた。死の前には生のすべての事實は、總べて花の如く萎んでしまふ。

彼れの幼い心に確乎として、刻まれた無常の悲哀は、彼れの母を高雄寺に葬つた時の香煙の縷々として昇る瞬間であつたと云ふ。深い慈愛、佛にも均しい愛撫を垂れて惜しまなかつた母が、一朝にして不可思議なる煙としてこの世を立去つて行く。人世の事はかくの如く果敢なく、かくの如く無常である。其れは唯一縷の香煙にしか過ぎないと云ふ涯知ら

ぬ大きい悲しみが、純眞な穢れを知らぬ幼童の彼れの心を一時に暗くしたのであつた。

建暦二年、彼れは十三歳を數へてゐた。愈〻元服して世に立つべき時が近づいた。母の死よりの五ケ年間は、道元にとつては、心の苦闘の時代であつた。世に立つべきか、世を棄つべきかゞ、常に彼れを苛んだであらう。既に佛典に興味を覺え涯なき世界への思慕を味つた彼れには、最早や世上の何物にも誘惑を感じなかつたし、希望も持てなかつた。唯一途に出家することが彼れの心の方向であつた。其處に云ひ知れぬ淋しいけれども、娯しい道が展けてゐるのであつた。

木幡山の山荘は城南の風光に惠まれてゐた。道元にとつては一人の貴族の子として、この美しい風景を擅にしてゐればよかつた。時は恰かも春であつた。霞みゆく平野の彼方には淀川の廣い流れに沿うて亘椋の池が白く光つてゐた。嫋々として渡つて來る春風には、一面に野を覆うた野草の花の香が染みこんでゐた。けれどもこの春も彼れには一層惱しいものであつた。眞實なる世界の風光を求める道元には、人としての享樂は却つて耐えがたいものであつた。

或夜彼れはこの人世の春に叛いて伯父の良觀法眼を比叡の麓に訪うことになつた。突然の來訪にこの天台の學匠である伯父も驚いたに違ひはない。けれども其の眞摯なる出家の志願は彼れの面貌に溢れてゐた。無分別なる少年の氣紛れではなかつた。五ケ年の心の惱みを解く道は、出家より外にはなかつた。母の希望もやはり其處にあつた。早く夫に別れた悲しい母の死顏が、いつも彼れの出家を勵ましてゐたのでもあつた。飜し難い彼れの志願を知つた伯父は、彼れに對する貴族的地位の將來に望みを絶つて到頭彼れの志望を容れて山に入ることを默許することになつた。

二

山！　それは道元の憧憬の的であつた。十三歳の少年の彼れには一途に山への道が望まれてゐた。たとひ山上の生活に愛想をつかして下山を急ぐ眞摯な人々があるにしても、彼れ道元には其の意味が解からなかつた。唯比叡山上の結界は美しい現世の救ひの園としか彼れには感ぜられなかつた。山への志願が許された時、少年道元は飛立つ歡喜に總身の血

を湧かすのであつた。

比叡山三塔の一つ、横河の首楞嚴院の般若谷千光房が彼れに選ばれた。比叡山、四明ケ嶽の雄大な半圓の孤が青空高く聳え、着物の裾のやうに深く凹んだ谷々。其の谷の一つが般若谷であつた。この谷の千光房が彼れの爲めに選ばれたことは一つの不思議であつた。横河の首楞嚴院が首楞嚴三昧を名とすることが、三昧の生活を將來の基礎とする彼れに何かの暗示であるかのように、般若谷の名も彼れの般若の眞智を讃仰する將來の生活に何等かの默契を示してゐはせなかつたか。更に彼れが山を下つて迄其の眞の師として崇拜措かなかつたのは千光禪師榮西であることゝ、千光房の房名が餘りにもぴつたり符合することは、偶然とのみ云ひ得ないのではなからうか。

恐らく山上に於ける道元の生活が、其の受くる學解が彼れの心に何等の富を與へ得ないのみか、彼れをして遂に山を下らしむるまで悲觀せしむるものであつたに反して、山上の自然が首楞嚴三昧の深き湛然の心を示し、永遠に若き谿流が般若の眞智を彼れの內心に囁きつゝ、何日しか彼れをして強く雄偉なる打坐の行者に導きつゝあつたのでもあらうか。

恐らく彼れも其れは知らなかつたであらう。

其の翌年天台座主公圓僧正によつて剃髮し、戒檀院にて菩薩戒を受け一人の比丘となつた。

「然しより山家の止觀を學し、南天の祕教をならふ。十八歲より內に一切經を披閱すること一遍……」（傳光錄）

この傳光錄の記事によつて山上に於ける道元の生活が窺はれる。比叡天台宗が傳統とする天台學（山家の止觀）と台密（南天の祕教＝天台宗の密教）を修めることが誰にも課せられたと同時に、道元にも課せられることは當然であつた。其れは最早や一つの古典であり、蒼白な生命の萎えたものであつたけれども、山の生活を思慕する彼れには懷しい然も一つの魅力をもつものであつたらう。世上に於ては殆んど夢想だもせなかつた世外の消息が、不思議な神祕な光を以つて彼れに迫つて來ることを感じたには違ひはなかつた。

止觀、遮那（台密）の二つの道は、而し果して何日までも彼れの心を魅了することが出來たであらうか。學問によつて智識によつて幾百年かの老巧を經た此等の二道は、結局堆

高く積まれた解釋の累積であり、派に派を分かつた瑣末な枝葉の存在にしか過ぎなかつた。智識によつて巧らまれる處に生命は失はれ、形式に染むことによつて、眞實は喪失する。道元の求むる眞實なる道はつひに閉されてしまつた。

十八歳より内に一切經を披閲すること一遍と云ふ傳光錄の文字は、單なる表現ではない。血の滲むやうな彼れの苦惱が、かゝる傳統的なる學解を捨てゝ新しく一切佛教の廣大なる視野に彼れの眼を轉廻せしめたのであつた。其處には十八歳のうら若き青年道元を、千仞の谷底に、いや那落の底に轉落せしむるやうな悲痛なる嘆息の幾年かゞあつたことを忘れてはならない。法然も親鸞も其の苦しい胸を披いて一切經に其の救ひを求めなければならぬ憂悶を嘗めたのであつた。道元も其の例に洩れはせなかつた。眞實を求めるものゝ悲しき現實よ。

一切經の披閲は法然、親鸞には念佛の一行を打開せしむることによつて彼等を救ひ得た。今や道元にも其の何等かの道が開かれねばならなかつた。しかも彼れに與へられた回答は意外な難問であつた。

「顯密二教共に談ず、本來本法性、天然自性身と、若し如の如くならば、則ち三世諸佛甚に依て更に發心して菩提を求むるや」（建撕記）

これは何と云ふ根本的なる矛盾であらうか。法然や親鸞やは、一切の學解、一切の修行は到底及び難き身なればと、一人の凡夫に還つて念佛の本願の一行に絶對他力の歸趨を見出し得たけれども、道元にはこの難しき一問が前途を阻むことになつた。凡らくこの二者の相違は年齡の然らしめたものであつたことは間違ひなからう。法然には四十餘の年輩がかされ、親鸞は三十に垂んとしてゐたのであつたが、道元は年齒僅かに十八歳、純眞無垢な青年であつた。其の一徹な、其の素朴な、眞直な心は、當然この難關に出會するのが、寧ろ自然であつたと云つていゝ。

三

反動によつて後へのめりさうな頑强なる一關であつた。この動かし難き、越えがたき矛盾。この矛盾を征服しやうとする情熱が、この時こそ、眞實を求めてやまない道元に至烈

な白熱的な欲求として燃えさかつたには違ひはない。と同時に、この矛盾を無限の調和の世界に迄止揚することによつて彼れの打坐の宗教が誕生し、道元の生命は永遠に輝かしき存在を示すことになつてゆくのである。彼れの一生は、この時から一貫して、この矛盾征服の旅となつて進められて行くのであつた。

「後に三井の公胤僧正、同く又外叔なり。時の明匠、世にならびなし。因て宗の大事をたづぬ。公胤僧正示曰、吾宗の至極いま汝が疑處なり。傳教、慈覺より累代口訣し來るところなり。この疑をしてはらさしむべきにあらず。遙かに聞く、西天達磨大師、東土に來て、まさに佛印を傳持せしむと。その宗風いま天下にしく。名けて禪宗といふ。もしこの事を決擇せんとおもはゞ、汝建仁寺榮西僧正の室に入て、その故實をたづね、はるかに道を異朝に訪ふべしと。……」（傳光錄）

（註。道元の公胤との面接は十八歲ではない、も少し早くあつたと云ふ說がある。種々の點から見て其れが眞に近い。この傳光錄の年次の記事が疑問視せられるのは其故である。）

彼れの血緣にして天台の學匠である公胤僧正は、何故にかくの如き腑甲斐のない返答をしたのであらうか。山門、寺門と並び稱せられる其の寺門の大德が、天台の明匠として一山に重きをなしながら、何と云ふ情ない卽答であらう。一心三觀の月を宿し、一念三千の理法の實踐が、明らかに彼れに於ては、この矛盾を解決してゐるではなからうか。この矛盾が、この一人の青年が抱いた矛盾が、勿論、其れは根本的なものではあるが、其れが傳教、慈覺二大師以來の惱みであつたと云ふのである。而もこの矛盾は到底極め難いと云ふ。天台の理法はやはり根本的には、この當時に於ても一つの槪念として其當事者に於てさへ其れ以上には出でられなかつたのではなからうか。止觀の事法が更に强烈なるものを求めて居たのではなからうか。其處には當然もつと實踐的であり實際的である禪宗が求められなければならぬのは當然であつた。

公胤僧正も、この一近親の青年僧が尋ねる迄もなく早く自己の救ひとして達磨の禪を敬仰してゐたことは、彼れの次の言辭によつても明らかであつた。其れと共に天台の日も已に西に傾いたことが明かに物語られてゐる。餘りにも淋しい事實であつた。しかし僧正の其の地位にも拘らず、其の本心を披瀝して、この一青年を導く高潔なる態度は洵に芳しい。

其の親切は少からず道元の心を動かしたに違ひはない。

達磨の道を傳へるものは、我國にしては建仁寺の榮西であつた。先づ榮西に師事して更に大宋に渡つて其の本源を極めよと云ふ。其處に明らかに青年僧道元の行くべき道が指示せられてゐる。進むべき道の方向が氣持よく指されてゐたのであつた。

僧正の指旨によつて、道元が榮西に面接したかせなかつたか其處にも一つの疑問が投げられてゐる。榮西の法嗣である明全に師事したことは確かであるが、先師榮西に就ては極めて漠然としてゐるのである。けれどもたとひ榮西に師事したにせよ、せないにせよ、彼れに對する崇敬は道元の殘したものによく示されてゐる。

「故僧正建仁寺におはせし時、獨りの貧人來りて云く、我が家貧ふして絕煙數日におよぶ。夫婦子息三人餓死しなんとす。……救ひ給へと云ふ。其の時、房中に都て衣食財物無し。……時に藥師の像を造らんとて光の料に打のべたる銅少分ありき。……彼の貧客にあたへて云く、是を以て食物にかへて餓をふさぐべしと。……時に門弟子等難じて云く……佛物己用の罪如何ん。……我れは此の罪に依て惡趣に墮すべくとも、只衆生の飢えを救ふべしと云ひ、

と云ひ、

「……今の建仁寺の寺ら屋敷、川原に近し。後代に水難ありぬべしと。僧正の云く、我れ寺の後代の亡失、是れを思ふべからず。西天の祇園精舍もいしずゑばかりとどまれり、然あれども寺院建立の功德失すべからず。亦當時一年半年の行道其の功德莫大なるべしと。……さる心中にも亦此の如きの道理存ぜられたる心のたけ、寔に是れを思ふべし。」

（隨聞記、二）

此等の記事によつても、道元がいかに榮西に私淑していたかゞ窺はれる、其の美しき心のたけをいかに敬仰していたかゞ示されてゐる。

榮西は洵に我國に於ける禪の先達であつた。比叡山にあつて葉上房として台密の一流を開創する位の碩學ではあつたけれども、山上に於ける苦學力行の末、其處に流れる學解の中に禪の思想の流れを強く感じて其の眞諦を把握すべく、再度入宋して佛印を得て歸朝し、早く博多に禪門の寺院を建立してゐるのであつた。其の聖福寺こそ、彼れが我が國に殘し

た最初の禪の足跡であつた。不幸、この新宗風は比叡の傳統的なる力に雌伏せられ、榮西は一人の流浪僧として京に或は鎌倉に、其の居所は常に穩かではなかつた。けれども彼れのこの新しい創造的なる人格は、其の不幸なりし生涯に比して多くの感化を後來に殘し得たのであつた。其の遺鉢を嗣ぐものは其の法嗣明全であり、其の大いなる感化を蒙つて、其の將來の方向を誤らなかつたのは道元であつた。

四

「因て十八歳の秋、建保五年丁丑八月二十五日に、建仁寺明全和尚の會に投じて、僧儀をそなふ。彼の建仁寺僧正の時は、もろ〳〵の唱導、はじめて參ぜしには、三年をへて後に衣をかへしむ。然るに師のいりしには、九月に衣をかへしめ、すなはち十一月に僧伽梨衣をさづけて、以て器なりとす。かの明全和尚は顯密心の三宗をつたへて、ひとり榮西の嫡嗣たり。西和尚、建仁寺の記を錄するに曰、法藏はたゞ明全のみに囑す。榮西が法をとぶらはんとおもふともがらは、すべからく全師をとぶらうべし。師其室に參じ、

重て菩薩戒をうけ、衣鉢等をつたへ、かねて谷流の祕法、一百三十四尊の行法、護摩等をうけ、ならびに律藏をならひ、また止觀を學す。はじめて臨濟の宗風をきゝて、おほよそ顯密心三宗の正脉みなもて傳受し、ひとり明全の嫡嗣たり……」（傳光錄）

山を遁れ三井寺に趨り轉々として眞實希求の旅に瘥せた道元には、つゐに建仁寺の明全が待ちもうけてゐた。求むるものには與へられる。彼れの眞實への願ひは、其の故に明全と云ふ一人の得難き人格を彼れに遭逢せしめたのであつた。先師榮西は法嗣明全に對して最も深き信賴を捧げてゐた。法藏は唯明全にのみに囑すと云つてゐる。又榮西が法をとぶらはんとおもふともがらは、すべからく全師をとぶろうべしとも云つてゐる。

明全が先師榮西より授けられたものは、やがて明全が道元に授けたものに違ひはなかつた。卽ち菩薩戒、台密谷流の祕法、護摩、戒律、止觀、臨濟禪であつた。其故に明全は顯密心三宗の正脉を傳へるものであつた。これは洵に複雜極まるものであつて、榮西並に明全の指導原理が那邊にあるかを疑はしめるものがある。けれども叡山の壓迫に對して榮西が興禪護國論を書いて禪は決して新宗風でないことを述べてゐる點よりすれば、其の指導

原理は禪であつて然も此等の雜多なものを介入せしめ得るに何等の矛盾も感ぜない程度のものであつたと考へられる。眞なる禪への過渡期であつたことを示してゐるのであらう。

この事が何日かは明全をして更に入宋求法せしむることになり、道元も亦た入宋の遊學の旅に出でなければならなかつた一つの大いなる原因であつたであらう。純粹なるものへの願ひ、眞實無雜なるものへの祈願は、人間の必然の要求であらねばならん。

「予發心求法よりこのかた、わが朝の遍方に知識をとぶらひき。ちなみに建仁寺の全公をみる。あひしたがふ霜華すみやかに九廻をへたり。いさゝか臨濟の家風をきく、全公は祖師西和尚の上足として、ひとり無上の佛法を正傳せり。あへて余輩のならぶべきにあらず」（眼藏、辨道話）

恐らく榮西の心には臨濟の家風が強く宿つても居り、其法嗣明全にも其れが明らかに傳へられてゐたであらう、が然し時代は其れの純粹なる姿の露出に猶ほ幾年かの距りを要求してゐたのであつた。道元は明全の室に參じて霜華九廻と云ふ。——この九年は傳光錄の七年と矛盾するが——少くとも七年乃至九年の久しき師事に於て、道元の受けた感化は、

密儀でもなく、戒律でもなく、護摩でもなく、止觀でもなく、唯强く臨濟的なる家風であつた。新しい、少くとも彼れには耳新しい心に强く響く禪の宗風であつた。其の端的にして實踐的なる禪の精神であつた。故に彼れはこの禪風を通じて師明全、先師榮西を敬慕措かなかつたのであつた。「全公は祖師西和尚の上足として、ひとり無上の佛法を正傳せり」と讃仰し、又「あへて余輩のならぶべきにあらず」と强き思慕の情を後に寄せてゐるのである。

公胤僧正の指示に從つて建仁寺に投じたことは無駄ではなかつた。彼れの求めあぐんだ眞實への願ひ、卽ち彼れが直面した矛盾の解釋が、多少解けほぐれてゆきさうであつたとひそれがきつぱりと彼れの胸に明確な一線を引かなかつたとしても、其のほごしゆくべき端緒、ほごしゆくべき方向が、何れにあるかを彼れに明らかに示して呉れさうであつた。其處に「いさゝか臨濟の家風をきく」と云ふ言葉が現はれて來る。この事は彼れにとつては勿怪の幸福であつた。山上に山下に暗中摸索の淋しい生活を送つた道元には、天から與へられた惠みであつたと云つていゝ。彼れが師明全と入宋の旅に出るやうになつたこ

とも、この端緒を把つた强味と、其れをほごす希望に燃えて居たことによつてゞあることは否み難い。

五

明全和尚は彼れのかねての希望を滿すために愈々大宋に遊學渡航することになつた。貞應二年の春であつた。和尚は最早や四十の齡を重ねてゐた。其の好學の熱と希望の並々ならぬことが窺はれる。

「……先師全和尚、入宋せんとせし時、本師叡山の明融阿闍梨重病起り、病床にしづみ既に死せんとす。其の時かの師云く、我既に老病起り死去せんこと近きにあり、今度暫く入宋をとゞまりたまひて、我が老病を扶けて、冥路を弔ひて、然して死去の後、其の本意をとげらるべしと。時に先師弟子法類等を集めて議評して云く。我れ幼少の時雙親の家を出て後より、此の師の養育を蒙ていま成長せり。……亦佛法の道理を知て今入宋求法の志しを起すまでも、偏に此の師の恩に非ずと云ことなし。……餘命存しがたし、再

會期すべきにあらず、故にあながちに是を留めたまふ。師の命もそむき難し。今ま身命を顧みず入宋求法するも、菩薩の大悲利生の爲なり。師の命を背て宋土に行ん道理有りや否や。各の思はるゝ處をのべらるべしと。……先師の云く、おの〳〵の評議、いづれもみな留まるべき道理ばかりなり。我れが所存は然あらず。今度留りたりとも、決定、死ぬべき人ならば其に依て命を保つべきにもあらず。……只一旦、命に隨て師の心を慰むるばかりなり。是れ卽ち出離得道の爲には一切無用なり。錯て我が求法の志しをさえしめられば、罪業の因緣とも成ぬべし。然あるに若し入宋求法の志しをとげて、一分の悟りをも開きたらば、一人有漏の迷情に背くとも、多人得道の因緣と成りぬべし。此の功德もしすぐれば、すなはちこれ師の恩をも報じつべし。設ひ亦渡海の間に死して本意をとげずとも、求法の志しを以て死せば生々の願つきるべからず。……一人の爲にうしなひやすき時を空く過さんこと、佛意に合なふべからず。故に今度の入宋一向に思切り畢りぬと云て、終に入宋せられき。先師にとりて眞實の道心と存ぜしこと、是らの道理なり。」（隨聞記、五）

明全和尚の入宋求法にはこのやうな悲劇さへあつた。師の明融阿闍梨が重病の床に就いてゐる。愛弟子との離別を限りなく惜しむのであるが、其の惜別の情に溺れることは、彼れの一生の志願を虚しくすることになる。人間の情を振棄てゝ菩薩道の眞に生きようとする明全の趣意はこゝに強く示されてゐる。一時の情を棄てゝ永遠の情に生きようとする銳い求眞の誠が露呈せられてゐる。

道元にとつても明全の入宋求法の決心がついたことは勿怪の幸福であつた。彼れが常に胸に祕めてゐた入宋遊學の希望が其處に達成せられることになつたのである。然も唯一人の旅ではない。知らぬ他國へ行く淋しさを、たとひ彼れの希望であつても旅は淋しい。其の淋しさを考へる必要は無くなつた。彼れが親愛措かない師明全と同道の旅である。親子づれの旅である。時は春、千里の春風が、この惠まれたる旅行者を見送るのである。

「二月二十二日に東山を出でゝ西海筑前博多の津に赴き、三月下旬に商船に乘りて纜を解けり。大宋の嘉定十六年四月の初に明州の界に着せり、舶中にありながら先づ諸山を巡視して風俗を窺へり。五月の中、師猶船にあり。育王山の典座來り相見し問答して歸る事ありき。秋七月、初めて天童山に上て掛搭し給へり。」（建撕記）

貞應二年の二月二十二日に建仁寺を出發して支那の商船に乘るために九州に下つて行く。同勢は六人であつた。其間約一ケ月の日子が費されて三月の下旬には博多の津を解纜したのであつた。季節風に從つて九月に來り三四月に去つて行く商船は、かくして多くの人と文化を運びつゝあつた。法を求めるために不惜身命の人々がかくして、この恐ろしき東支那海の風浪を凌いで往來したのであつた。明全も道元も其の例に洩れなかつた。透徹るやうに碧い海を、大海に經驗のない二人は、いかに怖れ、いかに其の神祕に打たれたか。

六

宋は嘉定十六年、其の四月初旬には船は無事に明州に到着した。眼新しい宋の大陸の風物が二人の眼を捕へたに違ひはない。山、磯、家、人、樹のたゝずまゐ、空の樣子までにも大陸の雰圍氣が漂うてゐた。新宋の文藝復興の深みのある清新な文化はやゝさだすぎてはゐたけれども至る處に其の文化の美しさが眺められた。船に宿泊しながら諸山を巡遊す

る心安さを三ケ月も味はつて、七月初旬つゐに上陸して太白山天童景德禪寺に掛錫することになつた。宋五山の一と云はるゝ禪刹で雲水は雲の如く蝟集して居り、一百八十州を吹捲くる禪風の偉大さがさすがの二人の眼にも驚かれた。臨濟揚岐派の長老無際了派が堂頭として其の偉風を示してゐた。この寧波の天童寺には嘗て先師榮西が掛搭したこともあつたので、明全、道元の二人もやはり其れを選んだのであらう。

大望を抱いて遙々海東の孤島から大海を渡つて來た道元には、天童山への掛錫は何よりの歡びであつた筈である。けれども其の耆宿無際に接して直參する彼れには、彼れの印可があるにせよ彼れには滿足のゆくものではなかつた。彼れは最早や臨濟以上のものを求めてゐたのであつた。無際の會下の二年間は寧ろ道元にとつては失望の時代であつたと云つていゝ。この失望を滿たすために彼れは天童山を去つて諸方に徧參すと云ふ苦汁を嘗めなければならなかつたのであつたが、これも大して彼れの期待に添ふものではなかつた。僅かに徑山萬壽寺の淅翁如琰、台州小翠巖の盤山思卓がやゝ彼れの意に近いものがあつたと云ふ。

けれども其れも彼れの意を根本より充足せしむるには當らなかつた。道の道元にも嘆息が洩らされた。大宋三界迄の物好きな遊學が悔まれた。

「かくの如く諸師と問答往來して、大我慢を生じて日本大宋にわれにおよぶ者なしとおもひ、歸朝せんとせし時に、老璡と云ふものあり。すゝめて曰。太宋國中ひとり道眼を具するは淨老なり。汝まみえば必ず得處あらん。」（傳光錄）

道元の太宋に人なしと失望の胸を抱いて天童に明全を訪ひ歸朝の挨拶を述べんとしたことは、果して大我慢であつたかどうか。彼れの求めたより以上の者への念願が、彼れに齎らされなかつた失望に他ならん。けれども、それもやはり一つの我慢であつたかも知れない。更に勇を鼓して徧參三昧に入らうとせなかつた短慮が、歸朝せんと云ふ我慢を起したと云つてもいゝ。然し兎に角この我慢は老璡と云ふ一人の無名の士のために救はれた。洵に危機一髪であつた。

やがて懷しき天童山には無際に代つて長翁如淨が堂主として臨むことになつた。願うてもない幸福であつた。天童山は如淨の下に其の宗風は全く整へられてゐた。道元は如淨に

參して問答往來し直ちに其の會下に服することになつた。

「某甲幼年より菩提心を發。本國にして道を諸師にとぶらひて、いさゝか因果の所由をしるといへども、いまだ佛法の實歸をしらず。名相の懷標にとゞこふる。後ちに千光禪師の室に入りて、初めて臨濟の宗風をきく。今全法師にしたがひて大宋にいり、和尙の法席に投ずることをえたり。これ宿福の慶幸なり。和尙大悲、外國遠方の小人、願は時候に不拘、威儀不威儀を擇らばず、頻々に方丈に上り、法要を拜問せんとおもふ。大慈大悲聽許したまへ」（傳光錄）

彼れが如淨和尙に奉つた狀はかくの如きものであつた。其處には彼れの眞實希求の熱が籠つて居り、法要の參究が强く願はれてゐる。此れに對して如淨は示して曰く。

「元子いまより後ちは著衣衩衣をいはず、晝夜參問すべし。われ父子の無禮を怨するが如し。」（傳光錄）

何と云ふ親切なる言葉であらうか。かくして初めて道元は如淨に深く親炙し得ることが出來るわけであつた。

「然しより晝夜堂奥に參じ、親く眞訣を受く。ある時、師を侍者に請せらるゝに、師辭して曰。われは外國の人なり。かたじけなく大國大刹の侍司たらんこと、すこぶる叢林の疑難あらんか。たゞ晝夜に參ぜんとおもふのみなり。時に和尙いはく、實に汝がいふところ、もつとも謙卑なり。そのいひなきにあらず。因て只問答往來して、提訓をうくるのみなり。」（傳光錄）

道元には眞を求める以外には何等の野心もなかつた。侍者の榮譽も彼れには願はしいものではなかつた。直ちにこれを拜辭することを忘れなかつたのである。唯孜々として道を求め、兀々として打坐の生活を究める一法しか要はなかつた。彼れは唯だ嬉しかつた。この師を得たことによつて、彼れの拒まれた道が又開けて行く愉快があつた。天童の過去の二年の生活が不愉快であつたのに反して、これは何と云ふ歡喜の生活だ。日々夜々の參究が次第に彼れの魂を明るくして行つた。彼れの胸は緊張に緊張を加へて唯冴えに冴えてゆくのみであつた。師の如淨の名にあやかるやうに澄明に澄明を加へ、明徹に明徹を重ねてゆくのみであつた。何物かゞ其處に閃めけば彼れは其の瞬間に垢を越える用意が整へられ

て居たのであつた。

七

道元が其の生涯に於て天童の古佛として崇敬措かなかつた長翁如淨とはいかなる人であつたか。道元の言葉を傳へる正法眼藏九十餘卷の中には所々に其の德が讃へられてゐる。其の言辭が常に引用せられてゐる。道元をして打坐の一行につきのめした偉大なる師匠は彼れ以上に大いなる識見と老雅なる鍛鍊を經て來た、いかにも古佛であつたに違ひはなかつた。正法眼藏行持の卷は、佛々祖々の行持を詳記したものであるが、其の中に如淨の事を述べてゐる。

「先師天童和尙は、越上の人事なり。十九歲にして教學をすてて參學するに、七旬におよんでなほ不退なり。嘉定の皇帝より、紫衣師號をたまはるといへども、つひにうけず、修表辭謝す。十方の雲納、ともに崇重す。遠近の有識、ともに隨喜するなり。皇帝大悅して御茶をたまふ。しれるものは奇代の事と讃歎す。まことにこれ眞實の行持なり。……しかあれば師號を恩賜すとも、上表辭謝する、古來の勝躅なり。晩學の參究なるべし。まのあたり先師をみる、これ人にあふなり。先師は十九歲より、離鄕尋師、辨道功夫すること、六十五載にいたりて、なほ不退不轉なり。帝者に親近せず、帝者にみゆず、丞相と親厚ならず、官員と親厚ならず、紫衣師號を表辭するのみにあらず、一生まだらなる袈裟を搭せず、よのつねに上堂入室、みなくろき袈裟裰子をもちゐる。衲子を敎訓するにいはく、參禪學道は、第一有道心、これ學道のはじめなり。いま二百年來祖師道すたれたり。かなしむべし。いはんや一句を道得せる皮袋すくなし。某甲そのかみ徑山に掛錫するに、光佛照そのときの粥飯頭なりき。佛法禪道かならずしも他人の言句をもとむべからず。たゞ各自理會。かくのごとくいひて、僧堂裏都不管なりき。雲水兄弟也都不管なり。祇管與官客相見追尋するのみなり。……又いはく參禪者、身心脫落也。不用燒香、禮拜、念佛、修懺、看經、祇管打坐、始得。まことにいま大宋國の諸方に、參禪に名字をかけ、祖宗の遠孫と稱する皮袋たゞ一二百のみにあらず。稻麻竹葦なりとも、打坐を打坐に勸誘するともがら、……たゞ四海五湖のあひだ、先師天童のみなり。……

先師よのつねに普說す。われ十九載よりこのかた、あまねく諸方の叢林をふるに、爲人師なし。十九載よりこのかた、一日一夜も不レ礙二蒲團一の日夜あらず。某甲未住院よりこのかた、鄉人とものがたりせず、光陰をしきによりてなり。掛錫の所在にあり、菴裏寮舍、すべていりてみることなし。いはんや遊山翫水に功夫をつひやさんや。雲堂公界の坐禪のほか、あるひは閣上、あるひは屛處をもとめて、獨子ゆきて、穩便のところに坐禪す。つねに袖裏に蒲團をたづさへて、あるひは巖下にも坐禪す。つねにおもひき、金剛座を坐破せんと。これもとむる所期なり……」（眼藏行持）

この行持の卷に述ぶる所によつて、如淨の面目の躍如たるものがある。たゞ禪の眞骨頂に住して、打坐の一行に終始する處、しかも金剛座を坐破せんことを所期とする事は、洵に如淨にして始めてこの打坐の行者を見ることが出來るのであつて、道元の生涯が、其の負う所實に莫大なるを思はしめる。道元はこの人によつて打出せられたる一快漢であると云つていゝ。

この人によつて、祖師西來の意が復興せられ、達磨禪の面目が恢復せられ得たのであつて、二百年來すたれたる祖師道が、再び其の常道にかへつたのであつた。かくして如淨こそ佛祖嫡傳の法孫たり得たのである。

「……今祖席に相傳して專らする處ろは坐禪なり。此の行、能く衆機を兼ね上中下根ひとしく修し得べき法なり。我れ大宋天童先師の會下にして此道理を聞て後ち、晝夜に定坐して極熱極寒には發病しつべしとて、諸僧しばらく放下しき。我れ其の時自ら思はく、設ひ發病して死すべくとも、猶只是れを修すべし。病ひ無ふして修せず、此の身をいたはり用ひてなんの用ぞ。病ひして死せば本意なり。大宋國の善知識の會下にて修し死に死してよき僧にさばくられたらんは、先づ勝緣なり。日本にて死せば、是れほどの人に如法佛家の儀式にて沙汰すべからず。修行していまだ契悟せざらん先に死せば、結緣として生を佛家に受くべし。修行せずして身を久く持ても詮無きなり。なんの用ぞ。況や身を全ふし病ひ起らじと思はんほどに、知らず亦海にも入り橫死にもあはん時は、後悔かん。此の如く案じつゞけて、思ひ切て晝夜端坐せしに、一切に病ひ發らず。今各も一向に思ひきりて修して見よ。十人は十人ながら得道すべきなり。先師天童の勸めかくの

如し」（隨聞記、一）

道元をしてかくの如く打坐の一行を取得せしめたる、打坐のために不惜身命の一大勇猛心を振起せしめたるものは、やはり天童如淨の偉大なる人格的感化であつた。何ものをも求めず、何ものをも考へず、唯だ專ら打坐するのである。祇管打坐である。この祇管打坐が、打坐の當體に於て道元を日々夜々に長養せしめたのであつた。心に求めるのではない。身に求めるのでもない。唯だ打坐の一行である。其れは其の一行に於て、求めざるに與へられ、所期せざるに求め得たのであつた。この雄偉深刻なる如淨の全人的感化こそ、道元が求めてやまない眞實への追求を、かの深く彼れの心を拒む矛盾を解決せしむる唯一の鍵であつたのである。

八

「然るに一日後夜の坐禪に、淨和尙入堂。大衆のねむりをいましむるに曰。參禪ハ心身脫落也。不レ要二燒香禮拜念佛修懺看經一。祇管打坐始得と。時に師きひて忽然として大悟す。今の因緣なり。晝夜に辨道して、時しばらくもすてず。ゆゑに脇席にいたらず。淨和尙よのつね、示曰。汝古佛の操行あり、必ず祖道を弘通すべし。われ汝ぢをえたるは、釋尊の迦葉をえたるがごとし。因て寶慶元年乙酉、日本嘉祿元年、たちまちに五十一世の祖位に列す。卽ち淨和尙囑して曰、早く本國にかえり、祖道を弘通すべし。深山に隱居して、聖胎を長養すべしと。」（傳光祿）

ついに來るべき時が來た。求めあぐんだものが授けられた。難透の一關が開かれた。其れは偶然の出來事であつた。曉天の坐禪に際して眠れる雲衲を眼醒ます師如淨の一語であつた。參禪は身心脫落である。佛道は祇管打坐に他ならん。身心脫落、脫落身心。我れの生れながらにして、一時も放下し得なかつた個我が一時に脫落消滅して大宇宙の大我が其れに代つて坐を占むることになつた。眞實を求めた心に眞實が與へられた。本來本法性、天然自性身なるに、甚に依て更に三世諸佛は發心して菩提を求むるかの疑著は突然ほぐされてしまつた。强く押してゐたものが一時に外れた心地であつた。如淨は直ちに印可を與へてゐる。道元は幾度かの印可を拒否してゐる。其處に啓かれた箇中の消息は、第五十一

祖として法を嫡傳するに充分であつた

「予かさねて大宋國におもむき、知識を兩浙にとぶらひ、家風を五門にきく、つひに大白峯の淨禪師に參じて、一生參學の大事こゝにをはりぬ」（眼藏、辨道話）

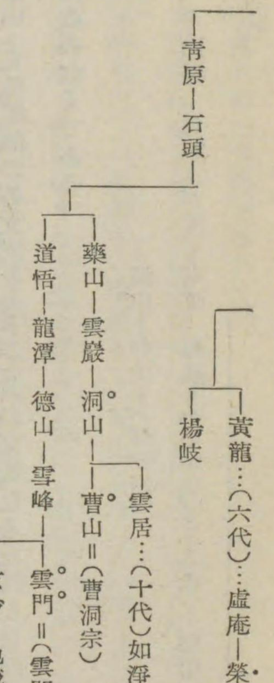
一生參學の大事こゝにをはりぬと道元はこの歡びを終生忘れ得なかつた。こゝに如淨禪師によつて參學の大事を究め得たのであるが、家風を五門にきく、と云ふ如く、道元は其の模索に於てあらゆる禪の流派を編參してゐたのであつた。しかも唯如淨によつてのみ大事が了畢したと云ふことは、彼れの眞實求むるものが如淨によつてのみ與へられ得たので、五門の禪風は彼れの意を充たすことが出來なかつた。彼れはこゝに如淨の人格を通じて打坐の宗風の眞なる傳統、卽ち佛教の正傳を悉具することが出來たと云つていゝ。

「いはく大師釋尊、靈山會上にして、法を迦葉につけ、祖々正傳して、菩提達磨尊者にいたる。尊者みづから神丹國におもむき、法を慧可大師につけき。これ東地の佛法傳來のはじめなり。かくのごとく單傳して、おのづから六祖大鑑禪師にいたるごとき、眞實の佛法まさに東漢に流演して、節目にかゝはらぬむねあらはれき。ときに六祖に二世の神足ありき。南嶽の懷讓と、靑原の行思となり。ともに佛印を傳持して、おなじく人天の導師なり。その二派の流通するに、よく五門ひらけたり。いはゆる法眼宗、潙仰宗、曹洞宗、雲門宗、臨濟宗なり。見在大宋には、臨濟宗のみ天下にあまねし。五家ことなれども、たゞ一佛心印なり。大宋國も後漢よりこのかた、敎籍あとをたれて、一天にしけりといへども、雌雄いまださだめざりき。祖師西來ののち直に葛藤の根源をきり、純一の佛法ひろまれり、わがくにもまたしかあらんことをこひねがふべし。」（眼藏、辨道話）

この文面によれば道元は五門の家風も均しく佛法の心印を傳へるものとして尊敬を吝むものではない。けれども彼れの正しき道は自ら彼れの批判によつて曹洞の宗風にあることは云ふ迄もない。正法眼藏の各文面を通じて其の巨細なる批評を自然に看取すべきである。

五家の傳統は次の如くである。

六祖（慧能）
- 南嶽—馬祖—百丈
  - 潙山＝（仰山＝（潙仰宗）
  - 黃檗—臨濟＝（臨濟宗）…（五代）…慈明—



達磨單傳の宗風は、明らかに如淨に面授することによつて道元に傳へられた。道元は如淨の印可によつて、

「宗門の正傳にいはく、この單傳正直の佛法は、最上のなかに最上なり、參見知識のはじめより、さらに燒香、禮拜、念佛、修懺、看經をもちゐず、ただし打坐して身心脫落することをえよ。もし人一時なりといふとも、三業に佛印を標し、三昧に端坐するとき、遍法界みな佛印となり、盡虛空ことごとくさとりとなる。」(眼藏、辨道話)

身心脫落の正法のみ一切の矛盾撞著を解くことを得る。打坐の一行のみ一切を佛印化することが出來る。眞實はこゝにのみあり、修證は打坐にのみ存する。眞實の行者道元には、眞實修證の道は打坐であることを徹見することによつて一生參學の大事がこゝに了畢したわけである。

心安い二年間が其後この天童の淨刹に送られた。道元はも早や求むる何者もなくなつた。唯だ打坐の生活に辨道の誠をいたすのみであつた。宋の寶慶三年我國にしては安貞元年愈々歸國に決した。其の理由は、

「それよりのち大宋紹定のはじめ、本鄉にかへりし。すなはち弘法救生をおもひとせり。なほ重擔をかたにおけるがごとし。しかあるに弘通のこゝろを放下せん、激揚のときをまつゆゑに、しばらく雲遊萍寄して、まさに先哲の風をきこえんとす。ただしおのづから名利にかゝはらず、道念をさきとせん、眞實の參學あらんか、いたづらに邪師にまどはされて、みだりに正解をおほひ、むなしく自狂にゑふて、ひさしく迷鄉にしづまん。なにゝよりてか般若の正種を長じ、得道の時をえん。……これをあはれむゆゑに、まのあたり大宋國にして禪林の風規を見聞し、知識の言旨を稟持せしを、しるしあつめて、參學閑道の人にのこして、佛家の正法をしらしめんとす。これ眞訣ならんかも」(眼藏、

辨道話）

（註。こゝでは紹定のはじめと年號が示してあるが、道元が歸朝に際して出發した時は寶慶三年（安貞三年）であつたが肥後川尻に到着したのは我が安貞二年正月で、宋にては紹定元年に當る）

彼れの意志は我が親愛なる同胞に對する弘法救生にあつた。この單傳の正法を傳へ打坐の一行を弘めるにあつた。口にも說き筆にも物し身を以て導く。全身心を一丸として弘法救生の誠を輸すにあつた。共の故になほ重擔を肩におけるが如しと云つてゐるのである。共れにも拘はらず印可と同時に歸國せず、二年間の打坐を行じてゐたことは、辨道功夫の修證の眞を滿喫することによつて愉悅してゐたのではない。恐らく同胞への弘法救生の心の準備を整へてゐたであらうと見るのが正しい。

九

如淨禪師のもとを去ることは、私情として堪えがたいものがあつたであらうし、又先師もこの明敏なる愛弟子を失うことは惜しかつたには違ひはない。けれども大法弘通のためには私情は挾む餘裕がない。別れを惜しんだ師如淨は別れの品々の贐別を道元に形見とした。芙蓉楷祖の法衣、自贊の頂像（肖像）洞山禪師の寶慶三昧一卷、五位顯訣一卷が共れであつた。この品々の贐別に添へて言葉の贐別を忘れなかつた。國に歸つて化を布く時、廣く人天を利することを念として、都市に住まず、權者に近づかず、深山幽谷を棲家として一箇半箇を接得し我が宗風を斷絕せしむることがあつてはならぬと云ふ。

一箇半箇の眞實なる接得が、廣く人天を利することになる。多くを欲してはならん、高きを欲してはならん、共のためには都市を避けて山林幽谷に跡をたつことであつた。眞に道を求むるものに植ゑられたる佛種は强く地に根を下した樹木に均しい。やがてそれは鬱蒼と天下を覆ひ洽く人天をして共の下に雨露を凌がしむるであらう。

安貞元年、宋にての五年間の生活を終つた道元は、この形見の言葉と品々を頂戴して隨喜しながら、共翌日天童を發つて歸國の途についた。歸途の航海ははげしい時化であつたが、共翌年我安貞二年の正月肥後の川尻に到着することが出來た。直ちに京に歸へつて建

仁寺に住むことになつた。

二十四歳にして宋に遊學し、二十六歳先師の印可を得、二十八歳の今、こゝに再び建仁寺の住侶に還へつたのであつた。慌しい五ケ年間であつたが、この五ケ年間には建仁寺の風紀も甚だしく頽廃してゐた。その頽廃の中に三ケ年の生活をやむなくした道元には、種々なる意味に其の時代と佛教とそして自分の責任を感ずるのであつた。先師榮西が又明全が、我國の禪の足場として建立した建仁の道場が、かくも其の風規を紊してゐることを見て、感慨に堪え得ぬものがあつた。

「……學道の人は最も貧なるべし。……貧しふして道を思ふは先賢古聖の仰ぐ所、諸佛諸祖の喜ぶ所ろなり。近來佛法の衰微しゆくこと眼前にあり。予始て建仁寺に入りし時見しと、後七八年過て見しと、次第にかはりゆくことは、寺の寮々に塗籠をおき、各々器物を持し美服を好み財物を貯へ、放逸の言語を好み、問訊禮拜等の衰微することを以て思ふに、餘所も推察せらるゝなり。佛法者は衣盂の外に財寶等を一切持べからず。なにを置かんが爲に塗籠をしつらふべきぞ。人にかくすほどの物をばもつべからざるなり。」(隨聞記、三)

「……雜談……吾が國も近ごろ建仁寺の僧正存生の時は、一向あからさまにも此の如きの言語出來らず。滅後にも存世の時の門弟子等少々殘りとゞまりたりし時は、一切に云はざりき。近ごろ此の七八年より以來、今ま出の若き人たち時々談ずるなり。存外の次第なり」(隨聞記、一)

名聞利養の心が佛教の心を歪めつくして平安末鎌倉のあの墮落を來たしたことは餘りにも明らかな事實であつた。比叡の轉落も、早く大師の心を遠ざかつた出家の自墮落な生活が結んだ結果に他ならなかつた。世を擧げて迷亂癡呆の巷にあえぐのは、指導精神の嚴正なる足場を失つたからであつた。世を指導すると豪語する圓頂色衣の徒は世に充滿し、世上を濶歩するけれども、佛の形骸をさへ守り得ぬ無用の存在であつた。寧ろ世を損ひ世道を誤る不逞の輩である。知るは上人知らぬは佛の姪風滔々たるに至つては亦何をか云はん。

榮西は毅然として世流に逆行した。其の記念すべき救ひの道場こそ建仁の叢林であつたではないか。清貧の道をつゝましくすることが祖道であり、坐禪の他に世事を交へぬのが、

叢林の掟である。それが僅かにして失はるゝことは、生命の喪失を意味せないであらうか。衣食は天にあり、唯一途に打坐の生活をいそしむことが出家の要道である。指導者は指導者の意味を失ひ、雲衲は雲衲の道を忘れてゐる。

「先師天童淨和尚住持のとき、僧堂にて衆僧坐禪の時、眠りを誡しむるに、履を以て打ち謗言呵嘖せしかども、衆僧皆打たるゝを喜び讃歎しき。有時亦上堂の次でに云く、我れ既に老後、今は衆を辭し菴に住して老を扶けて居るべけれども、衆の知識として各の迷を破り道を授けんがために住持人たり。是に依て或は呵嘖の詞ばを出し、竹篦打擲等のことを行ず。是頗る怖れあり。然あれども、佛に代て化儀を揚る式なり。諸兄弟慈悲を以て是を許し給へと言ば、衆僧皆流涕しき。」（隨聞記、一）

かくの如く嚴正にして麗はしき師弟の情誼は果して行はれ得ないのであらうか。それは餘りにも距離の隔たりがあり過す。道元の心には時々悲憤をさへ覺えたに違ひない。

十

建仁寺はいつまでも道元の居るべき所ではなかつた。既に蝕まれたものは、如何とも仕方がない。新らしく根本より建直す必要があつた。普勸坐禪儀の一篇が歸朝早々こゝで物せられてゐたのであつたが、それは勿論新歸朝者の彼れが、其の精魂を文字に鐫つたものではあるが、其れを勸める主體である彼れが、其の道を純粹にするためにも、自己の辨道功夫のためにも、こゝに居ることはすべてに不便であつた。恐らく寛喜二年であつたらうか、深草の極樂寺のほとりの廢院である安養院に移ることになつた。辨道話が多分この時代に、坐禪儀を敷衍する意味で物せられたであらう。この和文の一書が、いかに彼れを訪う求道の人々の心を衝いたかは云ふ迄もない。

やがて天福元年には極樂寺の一庵に觀音導利院の名を與へて住んだ。懷奘が彼れに投じて形影相添うやうになつたのもこの時からであつた。彼れを慕ふ道俗が次第に增して行くにつれ、彼れの名聲が漸く喧傳せらるゝにつれて、深草の地は餘りに都に近かすぎた。舊佛教の彼れに對する監視は自然と强められざるを得なかつたし、强いて事を好む彼れでないから、彼れの念願であつた純粹禪の保育のためにも、成るべく都を遠ざかることが得策

であつた。

嘉禎二年十月十五日開堂の運びとなつた宇治の興聖寶林寺は、觀音導利院を、こゝに移して規模を擴大したものであつた。宇治はさすがに京に遠く山水秀麗の一地區であつた。山と川とのこの秀域が、敢て山水を愛するわけではなかつたが、彼れに選ばれたことは、自然と人生との深き相關に徹する彼れの禪風に何等かの默契があつたであらう。

開堂に當つての彼れの上堂の法語は、

「山僧叢林を歷ること多からず、只だ是れ等閒に天童先師に見えて、當下に眼橫鼻直なることを認得して、人に瞞ぜられず、便乃ち空手にして鄉に還る。所以に一毫も佛法なく、任運に旦く時を延ぶ。朝に日は東より出で、夜に月は西に沈む。雲收まつて山骨露はれ、雨過ぎて四山低る。畢竟如何。良久して云く、三年には一閏に逢ふ、雞は五更に向つて啼く。久立下座。」（永平廣錄）

待悟禪を去つて默照の禪風を擧揚する彼れの面目の躍如たるものがある。この叢林に於ける彼れの生活は僅かに十一ケ年であつたけれども、彼れを訪ふ道俗は絡繹として門前市をなして居たことは云ふ迄もない。彼れによつて授戒せられたものが二千有餘と云はれてゐる。其の盛んなることは想像以上であつた。彼れのこの事業を助け彼れの使徒として彼れの道を傳統弘通する多くの人材は、重にこの時代に養はれてゐたのであつた。

「嘉禎二年臘月除夜、始て懷奘を興聖寺の首座に請ず。卽ち小參の次で、初て秉拂を首座に請ふ。是れ興聖寺最初の首座なり。小參の趣きは、宗門の佛法傳來の事を擧揚するなり。初祖西來して、少林に居して機をまち、時を期して面壁して坐せしに、某の歲の窮臘に神光來參しき。初祖最上乘の器なりと知て、接得して、衣法共に相承傳來して、兒孫天下に流布し、正法今日に弘通す。當寺始て首座を請し、今日初て秉拂を行なはしむ。衆の少きを憂ふること莫れ、身の初心なるを顧みることなかれ。汾陽は僅に六七人、藥山は十衆に滿たざるなり。然あれども皆佛祖の道を行じき。是を叢林のさかんなると云き。」（隨聞記、四）

興聖禪寺の開堂は洵に道元にとつては意義深きものであつた。彼れは彼れ自らを達磨に比定して、祖師西來の意を、この東海の偏境に傳へる意氣を示してゐるのである。かくし

て開かれたる興聖寺こそ、達磨禪の我國に於ける最初の傳通と云ふ、其の出發點となつたのであつた。

寛元元年突如北越に趣くことゝなつたが、其の理由は安閑無事を願ふためだと云はれてゐる。然しいかに古佛の道をいそしむ彼れであつても、漂然としてこの愛惜の地を去ることは餘程の決心を必要としたに違ひはない。名望の都鄙に流れるに從つて來り會するものが次第に增加を來す。一個半個を接得すべき彼れの希望がとげられないので、山林に遁れることを決心したと見られないでもない。又教團の隆盛は不純なる分子の介入となつて、清淨を欲する叢林が染汚せられるからと云ふ樣に見えないでもない。然し恐らくは、眼に餘る繁榮振に對する比叡山の忌避が、彼れを北越に放逐したのであらうか。

何處に行くも彼れは雲遊萍寄する一人の旅人である。嵯峨たる山岳に迎へられることは寧ろ彼れの希望であつたらう。ことに越の地に行くことは、懷しい大宋の越の生活が想起せられる。越前の吉峰に落つき、傘松峯の麓に移り、翌年竣工した傘松山大佛寺に止住することになつた。寛元四年にはこの寺を改めて吉祥山永平寺と稱した。

「永平有る時は入理の深談、只だ諸人の田地の穩密なることを要す。有る時は門庭の施設只だ諸人の神通遊戲せんことを要す。有る時は奔逸絕塵、只だ諸人の身心脫落せんことを要す。有る時は自受用三昧に入る、只だ諸人の手に信せて拈得せんことを要す。忽ち人あり、出で來つて向上の事作麼生と道はゞ、但だ向つて道はん、曉風塵洗して昏烟淨し、陰々たる青山畫圖を展ぶ。」（永平廣錄）

この上堂の法語によつて永平寺に於ける道元の生活の悠揚迫らない趣を翔することが出來よう。更に其の山居を諷詠した偈頌に至つては人間道元の玲瓏たる心胸を傳へて餘蘊がない。

山居六首

西來の祖道我れ東に傳ふ。月に釣り雲に耕して古風を慕ふ。世俗の紅塵飛んで到らず。深山雪夜草廬の中。

夜坐更闌けて眠未だ熟せず。情に知る辨道は山林に可なることを。溪聲耳に入り月眼に到る。此の外更に何の用心をか須ひん。

久しく人間に在つて愛惜なし。文章筆硯既に拋ち來る。花を看鳥を聞くも風情少し。時人の不才を笑ふに一任す。

三秋の氣肅清涼の候。纖月叢虫萬感の中。夜靜かに更闌にして北斗を看れば、曉天將に東を指すに到らんとす。

三間の茅屋既に風涼。鼻觀先づ參ず秋菊の香。鐵眼銅睛も誰か辯別せん。越州に九度重陽を見ることを。

前樓後閣玲瓏として起る。峰頂の浮圖六七層。月冷かに風高し箇の時節。衣は傳ふ半夜坐禪の僧。

法に生きる者（一）

一

打坐の行者禪師道元が、默照の禪風を揭げるについては、たとひ教相判釋と云ふ明らかな論理が示されてゐなくとも、自ら打坐の一行のみ最上乘の一心であると云ふ充分なる根據がなければならない。少くとも他の餘宗に從はず入宋求法の誠を輸して求め得た彼れの所謂正直の法は、他の諸宗に比して勝れてゐるものでなければならない。けれども彼れは敢て事を好むものではなかつた。其れ故に强ひて自ら進んで他の諸宗を敵として衝擊を與へると云ふ態度を採らなかつた。時誼に應じて自己の正法を示すために餘他の宗門を引合に出したに過ぎなかつた。其の爲めに理路井然たる論理を教相判釋の故に用ひなかつたけれども、彼れの生涯を通じてなされた法語の中には隨時に强く其れが示されてゐるのである。

懷奘が纂輯した正法眼藏にしても、隨聞記にしても彼れの天眞獨朗なる性格を透して何者をも怖れない何者にも優れたる彼れの正直の法が露呈せられてゐる。この法こそ、彼れが眞實を求める一人の行者として漸くに求め得た法であり、彼れの解き難き矛盾を解いた唯一の正法であつたのである。彼れはこの法にかしづき、この法を自己に生かし、この法を生活したのであつた。彼れは正に法に生きるものであつた。故に彼れの生き方は彼れのこの法の在り方によつて示されてゐると云はなくてはならぬ。

一言にして云へば、矛盾の止揚であつた。矛盾の止揚によつて却つて矛盾を超へた獨自の世界を展開して行つたのである。矛盾を生かし矛盾の中に住むことは、却つて矛盾無き世界に住むことであつた。彼れが解き難き矛盾の難關に逢着して、其れを解かうとして、即ち矛盾を去らうとして諸所に師を求め、海を渡つて迄徧參の苦楚を嘗めたのであつたけれども、如何にしても矛盾を去ることが出來なかつたのである。世に存在するすべてのものは矛盾でなきものは一つとして存し得ない。相對の世界に於ては、相對すること其れが既に矛盾であることを示してゐはせないか。自己の存在すら一つの矛盾に他ならぬ。

矛盾を去らうとすることは一つの徒勞である。矛盾を殺さうとすることは自己を殺すに均しい。寧ろ矛盾を生かし其の矛盾の中に住することが眞實なる矛盾解決の道であらねばならなかつた。人が佛と對立する。かゝる處に於ては到底この問題は解き得ないのである。難透の一關は頑として開かれ難いものであつた。小乘の人々は灰身滅智によつて、この難關を超へようとする。自殺することによつて解決したのであつた。其れはこゝの問題ではない。佛教は永遠に生きる道を教へる。決して死を禮讃するのではない。

ゆゝしき學匠達は大乘の法を讃嘆する。其の學解は如何にも究盡するものであり、其の修法は佛の跡を汚すに充分であらうけれども、嚴密なる意味に於ての吾我を去り得たかどうか又去り得るかどうか。吾我を去り得ない處に於てはやはりこの矛盾を離れ得ないのである。多くの山上の修道者達が山を下つてゐる。何故の下山であらうか。彼等はこの矛盾の解決を得ないで失望の胸を撫しながら結界から轉落して行つたのであつた。

道元が求めた矛盾の解決は、それではなかつた。彼れが得た道は、身心脫落の道であつた。身心脫落する所には吾我は永遠に消えて無くなる。心のみの脫落とは云はない。心身

の脱落を云ふのである。止觀の究極に於ては心は脱落するかも知れない。三密相應の世界に於ては心は脱落するかも知れない。しかし其處にはやはり嚴然として身が殘り、吾我が其の形影の如く殘されてゐる。止觀する吾れ、三密相應する吾れが其處に殘留する。吾れある處、それは矛盾の世界である。吾れを忘るゝと云ふかも知れない。しかし吾れを忘るゝ吾れがやはり其處に殘されて行く。

道元は身心脱落の道を行くに、身心學道を強調する。彼れの身心脱落は、身心の脱落であつて、吾我の心身を棄てゝ大我の心身になり切ることである。と云つて其の爲めに矛盾の世界を去ると云ふのではない。差別を差別と見、平等を平等と見る正しき自己を開顯することである。差別を差別と行じ、平等を平等と行ずる正しき心身を開眼することである。其れを行持することである。其の故に身心學道が強調せられねばならんのである。言ひ換へれば矛盾を止揚し矛盾の中に住むのである。彼等のやうに決して矛盾を離れようとするのではない。

二

矛盾を止揚し矛盾の中に住む。又其のことによつて矛盾が放下せられる道は唯一つ打坐あるのみである。道元はこの打坐の世界にあつて、然かも其の生活を明らかにするためにいかに自餘の諸宗を眺めてゐたであらうか。辨道話には詳かに其れが示されてゐる。

「いまこの坐禪の功德高大なることをきゝをはりぬ。おろかならん人、うたがふていはん」（辨道話）

と冒頭して打坐の行者の眼に映ずる諸宗を剖判してゆくのである。

「佛法におほくの門あり、なにをもてかひとへに坐禪をすゝむるや。

しめしていはく、これ佛法の正門なるをもてなり」（辨道話）

諸佛諸祖單傳する處の、この坐禪の一法のみ佛教の眞髓であると云ふ。この正直の法のみ佛教の眞生命であると云ふ、彼れの信念を強く披瀝してゐるのである。

「とふていはく、なんぞひとり正門とする。

しめしていはく、大師釋尊、まさしく得道の妙術を正傳し、また三世の如來、ともに坐禪より得道せり。このゆゑに正門なることをあひつたへたるなり。しかのみにあらず、西天東地の諸祖、みな坐禪より得道せるなり。ゆゑにいま正門を人天にしめす」（辨道話）

人天の師釋迦は得道の法として坐禪を正傳して居り、三世の諸佛も何かの三昧に於て得道して居る。故に三昧卽ち坐禪こそ佛教の正直の法であり、根本の生命である。特に我が傳統の祖祖には正しくこの一法によつて得道せないものはない。唯この一法を傳へたのであつた。

「……しかはあれども、讀經念佛はおのづからさとりの因緣となりぬべし。たゞむなしく坐して、なすところなからん、なにゝよりてかさとりをうるたよりとならん。しめしていはく。なんぢいま諸佛の三昧、無上の大法をむなしく坐してなすところなしとおもはん、これを大乘を謗ずる人とす。まどひのいとふかき、大海のなかにゐながら水なしといはんがごとし。すでにかたじけなく諸佛自受用三昧に安坐せり、これ廣大の功德をなすにあらずや。あはれむべし、まなこいまだひらけず、こゝろなほゐひにあることを……」（辨道話）

道元に於ては佛の不可思議力の所成であり、救ひの無碍の道場である坐禪を、唯單に坐することゝ解する無智を誡めるのである。坐禪は卽ち諸佛の自受用三昧であり、坐禪することは諸佛の自受用三昧に安坐してゐるのである。身卽ち諸佛である。然るにそれをしも唯だ坐すとのみ解して其の廣大の功德を知らざるは、大海にあつて水を知らぬと均しく、盲目癡愚の徒輩である。

「おほよそ諸佛の境界は、不可思議なり。心識のおよぶべきにあらず。いはんや不信劣智のしることをえんや。たゞ正信の大機のみ、よくいることをうるなり。不信の人はたとひをしふとも、うくべきことかたし。……おほよそ心に正信おこらば、修行し參學すべしかあらずば、しばらくやむべし。むかしより法のうるほひなきことをうらみよ……」（辨道話）

こゝでは佛の世界の不可思議を强調する。それは洵に不思量である。人間の劣智に於ては到底智解し能はぬ世界である。故に唯だその法を信受し愛樂することのみが我々の行く

べき道である。たゞ正信の大機のみ、よくいることをうるなりと云ふ。深く信受し得るもののみが其の教へに隨順し得る。おほよそ心に正信おこらば修行し參學すべし。修行參學は唯だ正信の一念に於て成就し得られる。人間の劣智を振上げて佛教に對せんとす誠に法の潤ひの無きことを悲しまねばならぬ。

「又讀經念佛等のつとめに、うるところの功德を、なんぢしるやいなや。たゞしたをうごかし、こゑをあぐるを、佛事功德とおもへる、いとはかなし。佛法に擬するにうたゝとほく、いよ〳〵はるかなり。又經書をひらくことは、ほとけ頓漸修行の儀則をしへおけるをあきらめしり、教のごとく修行すればかならず證をとらしめんとなり。いたつらに思量念度をつひやして、菩提をうる功德に擬せんとにはあらぬなり。おろかに千萬誦の口業をしきりにして、佛道にいたらんとするは、なほこれながえをきたにして越にむかはんとおもはんがごとし。又圓孔に方木をいれんとせんとおなじ。文をみながら、修するみちにくらき、それ醫方をみる人の合藥をわすれん、なにの益かあらん。口聲をひまなくせる春の田のかへるの晝夜になくがごとし、つひに又益なし。いはんやふかく名

利にまどはさるゝやから、これらのことをすてがたし。それ利貪のこゝろはなはだふかき、ゑゆにむかしすでにありきいまのよになからんや、もともあはれむべし……」（辨道話）

正信を缺き唯だ佛の功德をのみ求むる唾棄すべき利貪の徒輩を呵責するのである。讀經念佛に功德がないと云ふのではない。其れが正しくなされることはやはり佛教に隨順することであり、無上の功德を享受し得やう。然し其れが正しくなされないならば唯舌を動し聲を擧ぐるのみの愚擧に過ぎない。經論を讀むことも佛教の眞實を教へてそれを明らめしめ、其れに從つて修行することによつて證悟を得しめんとする。それを明らめるために繙くことは正しい。徒らなる思量を費ひやし佛道を得る方便とせんとするためにではない。

凡そ信なき讀經念佛は、南越に行かんとするに車の轅を北に向けるごとく、すべて無益である。春の田の蛙聲に均し。利己的な心の深きこと、これを捨てることの困難なこと、昔も今も變りはない。

「たゞまさにしるべし、七佛の妙法は、得道明心の宗匠に契心證會の學人あひしたがふて正傳すれば、的旨あらはれて稟持せらるゝなり。文字習學の法師のしりおよぶべきにあらず。しかあればすなはちこの疑迷をやめて正師のをしへにより、坐禪辨道して諸佛の自受用三昧を證得すべし。」（辨道話）

過去七佛の妙法は釋迦に正傳々持せられ、其れより面授口決の得道明心の佛々祖々がそれを傳持し、資格充分な後嗣の學人が其れを嫡傳する。故に佛教の的旨（生命）は瑣の遺漏なく稟持せられてゐるのである。故に文字に捉はれ、學解に迷う法師の到底及ばぬ境界である。早く迷ひを去つて教へに從ひ坐禪功夫して打坐の一行に入れよとすゝめる。

三

「……いまわが朝につたはれるところの法華宗、華嚴教、ともに大乘の究竟なり。いはんや眞言宗のごときは、毗盧遮那如來したしく金剛薩埵につたへて、師資みだりならず、その談ずるむね、卽心是佛是心作佛といふて、多劫の修行をふることなく、一座に五佛の正覺をとなふ。佛法の極妙といふべし。しかあるに、いまいふところの修行、なにのすぐれたることあれば、かれらをさしおきて、ひとへにこれをすゝむるや」（辨道話）

こゝは法華宗卽ち天台宗、並に華嚴宗、及び特に眞言宗を批判せんとする。天台、華嚴の二宗は大乘佛教の最後のものと考へられてゐる。天台圓教と云ひ華嚴は別教一乘と云つてゐる。大乘の中の大乘である。特に眞言宗の如きは大日如來（毗盧遮那）が親しく金剛薩埵に傳へ其れより龍樹、龍智、金剛智と次第相承して支那に入り、不空、惠果と傳承せられて空海に來り我國に傳へられたのである。其教へる所は、阿字本不生の一會に、金剛界の五佛（中央は毗盧遮那、東方阿閦、南方寶勝、西方阿彌陀、北方藥師）と均しき覺りを成就すると云ふ。卽ち卽身成佛である。洵にこれは大乘の至極であり、佛教の極限である。其れかくの如きに、何故にこれを棄てゝ坐禪の一法を稱揚するかと云ふのである。

「しめしていはく、しるべし佛家には教の殊劣を對論することなく、法の淺深をえらばずたゞし修行の眞僞をしるべし。艸華山水にひかれて、佛道に流入することありき。土石砂礫をにぎりて、佛印を稟持することとあり。いはんや廣大の文字は萬象にあまりてなほ

ゆたかなり。轉大法輪また一塵にをさまれり。しかあればすなはち卽心卽佛のことば、なほこれ水中の月なり。卽坐成佛のむね、さらにまたかゞみのうちのかげなり。ことばのたくみにかゝはるべからず、いま直證菩提の修行をすゝむるに、佛祖單傳の妙道をしめして眞實の道人とならしめんとなり。又佛を傳授することは、かならず證契の人をその宗師とすべし。文字をかぞふる學者をもてその導師とするにたらず、一盲の衆盲をひかんがごとし……（辨道話）

こゝに佛家と云ふ。佛心宗とか禪宗とか云ふ意味ではない。佛教の本流であるが故に道元は、自ら自宗を佛家と云ふ。其處に彼れの大いなる自信がある。この佛家に於ては一切佛教が法であり教である。三乘十二分教と云ふ佛教の全體が自己の教であり、自己の法である。故に其れは自己の宗に於ては一乘であるとか、何等差別はない。教の優劣や法の淺深はこゝでは少しも問題になり得ない。唯道元の法に於ては修行の眞僞が唯一つ問題となり得るばかりである。

教法に差等をつけ高下淺深を計ることは寧ろ教法を侮辱することになりはせないか。華嚴は始終頓圓と差別し天台は五時八教と類別する。眞言宗は十住心を別つが、其等の判釋は當を得てゐない。人の心を以て假りに此れを忖度するに過ぎはせないか。吾々の當面するものは教法の沙汰ではない。教法はすでに示されてある。吾々の當面するものは、唯其れに依つて如何に修行すかの、修行の問題のみである。修行さへ眞ならば小乘の教法でも大乘のそれでも何等變る所はない。すべてが大乘究竟の法であり得る。故に修行が僞であることは大乘の教法を小乘以下に轉落せしむることになる。寧ろ其れは外道の域外に出づることも保し難い。

佛の教法は唯單に經論のみに示されてのみはゐない。あの廣大無邊なる教へが經論のみに限られてゐると誤認し、經論の文字のみに捉はれることは淺間しい。廣大の文字は萬象にあまりてなほゆたかなり。言外の意、無象の形象を讀む心を忘れてはいけない。無聲の聲を聞き、無字の文字を讀み得る用意が缺けてゐはせないか。帝釋天は一草を挿んで寺を建て、靈雲和尚は桃花を見て悟り、蘇東坡は山色を清淨身と見、洞山禪師は水を亘つて悟りを得てゐる。更に諸子が常に愛誦してやまない法華經の方便品には何とある。「若し曠野

の中に於て土を積み佛廟をなす、乃至童子の戯れて砂を聚めて佛塔を爲る、是の如きの諸人等皆已に佛道を成ずと示してある。土石砂礫も亦た一つの佛道に他ならん。教法の顯はれであることは間違ひはない。

活眼を展げば一大宇宙は一大經巻である。潤澤なる教法はそれにも溢れて豊かである。大は宇宙を超へ、小は微塵にも宿る。盡十方界は教法ならざるなしである。吾々は唯だこの教法に面して修行の一法あるのみである。法の高下淺深を計ることは蟷螂の龍車に向ふ一つのカリカチュァーでなくてなんであらう。卽心是佛、卽坐成佛の言葉はいかにも尊貴である。しかし、其れは唯だ一つの言語に過ぎないではないか。水中の月、鏡中の影、共に實象を具へぬものである。言語に捉はれてはいけない。實を摑むことが肝要である。

道元の道は、唯だ直證菩提の修行にある。佛を直證する修行にある。其のためには佛祖單傳の打坐の一行を示して眞實の道者を作るにある。概念の遊戯に耽るのではない。空虚なるものを抱いて力むのではない。力強い修道者の實踐的生活を勵むのである。其の爲めには修道の達人を師とすべきであつて、文字をかぞふる學人を指導者とすべきではない。

彼等は盲人である。盲人が盲人を導く、それは何と云ふ滑稽であらうか。

四

「いまこの佛祖正傳の門下にはみな得道證契の哲匠をうやまひて佛法を住持せしむ。かるがゆゑに冥陽の神道もきたり歸依し、證果の羅漢もきたり問法するに、おの〳〵心地を開明する手をさづけずといふことなし。餘門にいまだきかざるところなり。たゞ佛弟子は佛法をならふべし。」（辨道話）

我がこの法は佛祖嫡傳の法であつて、其の門下はすべて面授口訣の得道證契の指導者を尊び其の人によつて佛法を保持せしむるのである。其の人こそ姿は變れ佛祖其の人であり卽ち釋迦であり達磨である。佛であり祖である。佛祖の前には冥界の神も此世の神も證果の羅漢も來り問法する。然のみならず彼等はすべて共れ〳〵其の心地を開明し得るのである。かゝる法は他に未だ有りや無しや。

佛弟子は專ら佛法を學道すべきである。この言葉は更に強い。唯佛法は打坐の一行にあ

る。佛弟子たるべきものは唯だこの一法を行じよと云ふ。この一行以外に佛法なしと云ふ處に道元の面目の躍如たるものがある。佛教を過去のものとせず而今のものとして其の生命を謳歌する處に彼れの永遠の生命把握の端的があり、佛教把持の強い鍵關が露呈せられてゐる。

「又しるべし。われらはもとより無上菩提かけたるにあらず。とこしなへに受用すといへども、承當することをえざるゆゑに、みだりに知見をおこすことをならひとして、これを物とおふによりて、大道いたづらに蹉過す。この知見によりて空華まち〳〵なり。あるひは十二輪轉、二十五有の境界とおもひ、三乘、五乘、有佛、無佛の見つくることなし。この知見をならふて佛法修行の正道をおもふべからず。しかあるをいまはまさしく佛印によりて萬事を放下し、一向に坐禪するとき、迷悟情量のほとりをこえて、凡聖のみちにかゝはらず、すみやかに格外に逍遙し大菩提を受用するなり。かの文字の筌罫にかゝはるものかたをならぶるにおよばんや。」（辨道話）

我等は本來無上の佛性を具有してゐるのである。誰も缺けたるものはない筈である。本

然に其れは具せられてゐるに拘らず、又其を受用してゐながら其れを自己のものとして正當に用ゐることを知らない。其れ故に妄想轉倒の勝手の知見を起して次第に道を誤り、大道を歩しながら躓きつゝあるではないか。それは洵に迂愚の骨頂である。

この知見。自己の小さい計らひが、其の故に種々の空華を描く。妄想を描くことは人によつてまち〳〵である。或者はこの世を無明の世界と誤認する。

（註。十二輪轉は十二緣起を云ふ。其れは無明を根本として現はるゝ世界を云ふ。二十五有は三界を云ひ、やはり無明の故に輪廻するこの世界を云ふ。）

或者は三乘を云ひ五乘を云ふ。（三乘は聲聞・緣覺・菩薩、五乘はそれに人・天の二乘を加ふ）或者は佛ありと其の形に執着する有佛の見を說き、又は無佛の世と見る。其等の雜多な知見は凡そ一つの空華に過ぎない。かゝる空華を實在と執して、其れを佛道と思ひ修してはならぬ。すべてが忘想の所產である。

正しき佛道は坐禪にある。身心脫落することによつて萬事が放下せられ、迷悟と云ふが如き思量分別の境を超へ、凡夫と聖者、佛と衆生と云ふが如き相對の世界を超出して、直

ちに無對の世界に入ることが出來る。其處に逍遙する屈托のない生活こそ、佛性を正しく受用する道であらねばならぬ。けれどもそれは決して悟り澄ます生活を云ふのではない。正しく矛盾を止揚して矛盾に生きるのである。矛盾を生活するのである。平常心是れ道と云ふ言葉は其れを示してゐる。一切の思量分別をやめて、丸の人間に生きるのである。赤裸の自己にかへるのである。

かの文字の筌蹄にかゝはるもの〳〵、かたをならぶるにおよばんや。こゝにも強い道元の言葉が示されてゐる。文字の詮索に耽つて手段（筌蹄はビクとワナである、魚と兎を取る道具である。道具は手段で目的は魚兎にある）に迷う人々は我等の部類ではない。他國の人々である。吾々には用事はない。

「……三學のなかに定學あり、六度のなかに禪度あり、ともにこれ一切の菩薩の初心よりまなぶところ利鈍をわかず修行す。いまの坐禪もそのひとつなるべし。なにゝよりてかこのなかに如來の正法あつめたりといふや。」（辨道話）

次第に内容に進んで來る。戒、定、慧の所謂三學と云はるゝもの、又布施、持戒、忍辱精進、禪定、智慧の所謂六度は、ともに菩薩道を行ずるものには、其の初發心の時より學び修せなければならぬものと規定せられてある。勿論それは正しい。其の中の三學の定、六度の禪定は共に坐禪である。勿論其れも正しい。然らば、かゝる三學六度の中の一部に屬するものであるに拘らず、其の禪定に如來の正法の全部が集められて居るとの說明は甚しく妥當ではないでは無いか。この質問も正しい。

道元は答へる。

「しめしていはく、いまこの如來一大事の正法眼藏無上の大法を禪宗となづくるゆゑに、この問きたれり、しるべしこの禪宗の號は神丹以東におこれり。竺乾にはきかず。はじめ達磨大師嵩山の少林寺にして、九年面壁のあひだ道俗いまだ佛正法をしらず。坐禪を宗とする婆羅門となづけき。のち代々の諸祖みなつねに坐禪をもはらす。これをみるおろかなる俗家は實をしらず、ひたゝけて坐禪宗といひき。いまのよには坐のことばを簡

して、たゞ禪宗といふなり。そのこゝろ諸祖の廣語にあきらかなり。六度および三學の禪定にならつていふべきにあらず。この佛法の相傳の嫡意なること一代にかくれなし。如來むかし靈山會上にして、正法眼藏、涅槃妙心、無上の大法をもて、ひとり迦葉尊者にのみ付法せし儀式は、現在して上界にある天衆、まのあたりみしもの存せり。うたがふべきにあらず。おほよそ佛法はかの天衆とこしなへに護持するものなり。その功いまだふりず。まさにしるべし、これは佛法の全道なり。ならべていふべき物なし。」（辨道話）

この質問に對して道元は苦笑する。今この佛法、中の佛法如來の正說の眞實の大法無上の道に禪宗と云ふ相對的なる名を與へることによつてかゝる質問が投ぜられる。禪宗なる勝手の名稱は支那（神丹）以東に起つたもので印度（竺乾）には無い。彼の達磨大師が支那に來つて、嵩山の少林寺に住し、九年の長きに亘つて面壁してゐた時には、道俗ともに正法嫡傳の師なることを知らず、其の皮相を眺めて坐禪宗の婆羅門と云つてゐた。勿論達磨は決して婆羅門ではないが、恐らく其の風體より推察したに違ひない。達磨に師事した嫡々の諸祖もやはり坐禪を專行するが爲めに人はつゐに坐禪宗の名を與へてしまつた。今は坐を略して禪宗と云ふ。すべて無意義な稱呼に過ぎない。このことは諸祖が此れを述べてゐる。故に三學六度の定や禪定と同日に論ずべきではない。佛の正法を嫡傳するものであることは今更說明の必要はないであらう。

けれども更に云へば、釋迦が靈鷲山上に於てこの無上の眞法を唯一人迦葉に付屬した時の狀況は其時の天衆が此れを見てゐる。凡そ正しき佛法は此等の天衆の護持によつて今日迄強く其の生命を保ち得て居るのである。現在に强く生きる處に全佛教の生命を把握するものとしての强味がある。他のものと同日に考ふべきではない。

天衆の見しもの今も存すと云ひ、天衆は佛法を護持すると云ふ、この言葉の中には道元の崇高なる信念が示されてゐる。この道こそ天地の大道、宇宙の正法なりの信念が强く響いてゐる。

「……佛家なにゝよりてか四儀のなかに、たゞし坐にのみおほせて、禪定をすゝめて證入をいふや。」（辨道話）

更に一歩を進めて、然らば佛家（禪宗と云はず）に於ては坐禪を主として行住坐臥の四威儀の中に他を顧みないで證入を說くか。

「しめしていはく。むかしよりの諸佛あひつぎて修行し證入せるみち、きはめしりがたしゆゑをたづねば、たゞ佛家のもちゐるところをゆゑとしるべし。このほかにたづぬべからず。たゞし祖師ほめていはく、坐禪はすなはち安樂の法門なり、はかりしりぬ四儀のなかに安樂なるゆゑか。いはんや一佛二佛の修行のみちにあらず。諸佛諸祖にみなこのみちあり。」（辨道話）

古へより以來次第に修行し證を得た諸佛の道は知り難いが、其の故を檢討すればすべて坐禪の一道であつた。他に道はない筈である。但し龍樹菩薩は大智度論にも云つてゐるやうに、坐禪は安樂の法門であると云ふから、恐らく安樂なるが故であらう。佛々祖々すべてこの道を選んで居るのであるから、間違はない。坐禪こそ安樂の道であり、正しい道であらねばならぬ。

「……この坐禪の行はいまだ佛法を證會せざらんものは坐禪辨道してその證をとるべし。すでに佛正法をあきらめえん人は、坐禪なにのまつところかあらん。」（辨道話）

坐禪の本旨がまだ不明である。坐禪は單に證を開くべき手段と考へてゐるのである。其處にかゝる質問が發せられる。

「しめしていはく。癡人のまへにゆめをとかず、山子の手には舟棹をあたへがたしといへどもさらに訓をたるべし。それ修證はひとつにあらずとおもへる、すなはち外道の見なり。佛法には修證これ一等なり。いまも證上の修なるゆゑに、初心の辨道すなはち本證の全體なり。かるがゆゑに修行の用心をさづくるにも、修のほかに證をまつおもひなかれとをしふ。直指の本證なるがゆゑなるべし。すでに修の證なれば證にきはなく、證の修なれば修にはじめなし。こゝをもて釋迦如來、迦葉尊者、ともに證上の修に受用せられ、達磨大師、大鑑高祖、おなじく證上の修に引轉せらる。佛法住持のあとみなかくの

ごとし。すでに證をはなれぬ修あり。われらさいはひに一分の妙修を單傳せる初心の辨道すなはち一分の本證を無爲の地にうるなり。しるべし修をはなれぬ證を染汚せざらしめんがために佛祖しきりに修行のゆるくすべからざるとをしふ。妙修を放下すれば本證手の中にみてり。本證を出身すれば妙修通身におこなはる……」（辨道話）

この答は道元の思想の中心に觸れて來てゐる。勿論其れは正法を述べるものではあるが彼れの思想を通じて極めて明確にせられてゐるのである。佛法には修證これ一等なりと云ふ。この言葉は其の前の、それ修證はひとつにあらずとおもへる、すなはち外道の見なりと云ふ言葉を受けてゐる。修證は一つにあらずと云ふ考へは正しい考へで、修證一等なりと云ふ考へは却つて奇異に考へられる。其處に彼れの思想の深さが示されてゐる。

普通に於ては修行が因であつて證は其の果であると考へられてゐる。修行の原因があつて證悟が其の結果であると考へられてゐる。然るに修證一等なりと云ふ言葉は、因果の間に時間を見ないことを示してゐる。少くとも前後を設けないことになる。これについては因果の理法に對する彼れの考へが他の考へと相違してゐることが顯かれねばならぬ。

「……この善の因果おなじく奉行の現成公案なり。因はさき果はのちなるにあらざれども因圓滿し果圓滿す。因等法等、果等法等なり。因にまたれて果感ずといへども、前後等の道あるがゆゑにと云つてゐる。この意味は原因によつて結果は感ぜられるけれども、あらず、前後等の道あるがゆゑに。」（眼藏、諸惡莫作）

この一節には明らかに彼れの因果觀が示されてゐる。因はさき果はのちなるにあらざれども因圓滿し果圓滿す、と云ひ、又因にまたれて果感ずといへども、前後にあらず、前後等の道あるがゆゑにと云つてゐる。この意味は原因によつて結果は感ぜられるけれども、卽ち因は果を導くけれども、其の間には前後の關係は無い、時間的の前後は有り得ないと云ふ。其の理由は因等、法等、果等、法等であると云ふ。因も實相、果も實相であつて、因は其れ自身に充足し、果も其れ自身に充足する。因と果と相俟つて完全するのではない。因も完全であり、果も完全である。勿論果は因に催されるものであつて、然かも前後にあらずと云へば因果同時であり、因中に果を含むことになるが、かゝる因果の存在は果してあり得るであらうか。前後際斷する處に因果の關係が成立し得るであらうか。

この事を解明するためには彼れの時間に對する觀念に迄進まねば到底この問題はほぐし得なくなる。彼れは時をいかに考へてゐたか。

「いはゆる有時は、時すでにこれ有なり、有はみな時なり。……時なるがゆへに、時の莊嚴光明あり、いまの十二時に習學すべし。……十二時の長遠短促、いまだ度量せずといへども、これを十二時といふ。去來の方迹あきらかなるによりて、人これを疑著せず疑著せざれどもしれるにあらず。……」（眼藏、有時）

道元は時のことを有時と云ふ。但しこの有時は吾々の考へてゐる連續的なる時間を云ふのではない。いはゆる有時は、時すでにこれ有なり、有はみな時なりと說明する。有は存在である。時は存在であり、存在するものはすべて時である。空間も時なれば時間も時である。時を離れた空間もなければ空間を離れた時もない。同時に空間を離れて時もなければ時を離れて空間もない。空間は時であり、時は空間であるとも云へる。時なるが故に時の莊嚴光明あり。時は其れ自身として完全なる存在である。子丑寅卯と數へる十二時もやはり時である。立派な存在である。然し共れは連續するものではない。子は子として丑は丑として完全であり充足してゐるのである。長短を絶し伸縮を無にしたる時である。然るに其の十二時が去來することが明白であるから、人は疑はないでゐるけれども、決して其の意味を知つてゐるのではない。卽ち連續的なものではなく、唯去來するものであることは未だ知つてゐないのである。

「われを排列しをきて盡界とせり、この盡界の頭々物々を時時なりと觀見すべし。物々の相礙せざるは、時々の相礙せざるがごとし。このゆへに、同時發心あり、同心發時あり、をよび修行成道もかくのごとし。われを排列して、われこれをみるなり。自己の時なる道理、それかくのごとし。」（眼藏、有時）

こゝで云ふわれとは時を指すことは明らかである。それは最後の自己の時なる道理、それかくのごとしと云つてゐる。さてわれを排列しをきて盡界とせりと云つてゐるのは、時間的存在は同時に空間的存在である。時は物であり物は時である。故に時の排列が盡十方世界のあらゆる存在物として現前してゐると云つていゝ。この盡界の頭々物々を時々なりと觀見すべしと云ふは、其の故に盡十方世界のあらゆる事物は逆に時々の排列せられたる

ものと見ることが出來る。物として見る時は盡十方世界すべて物であり、時として見る時は同じくすべてが時である。故に物々の相礙せざるは、時々の相礙せざるがごとし。又盡十方世界の事々物々が、其れは前の理由によつて物であると同時に時であるが故に、物が時を礙へることもなければ時が物を隔てることもない。卽ち物と時とは別個の存在ではなく同一の存在であるからである。この故に釋迦が成道に際して有情、非情、同時、成道と云つたのは、釋迦が成道する時に一切の存在が成道したことを示してゐる。其の故にこの言葉を擴充して、成道のみならず、發心、修行、菩提、涅槃のすべてについても、同じことが云ひ得られる。同時に發心し、同時に修行し、同時に菩提を得、同時に涅槃したと云つていゝ。又其の一つの同時發心を捉へて見ても、心もやはり時であるが故に、同時發心は同心發時とも云へるし、行も時であるが故に同時修行は同行修時とも云ひ得られる。兎に角われを排列して、われこれをみる。時が時を排列して時を見てゐるのである。同時に盡十方界が盡十方界を排列して盡十方界を見てゐるのである。自己の時なる道理、卽ち盡十方界の事々物々の嚴然たる存在を同時に、其處に非連續的なる時の嚴然たる存在を知るべきである。

七

こゝに來つて道元の時の觀念が解し得られた。因果のあり方も自然と判然する。因が前果が後であると云ふ考へ方は間違つてゐる。因は同時に果であり、果は同時に因である。其處には因果は前後の差別もなく、因は因として完全し果は果として充足してゐる。因と果とは連續的な時間の關係でなくて、因が果を引くことは、相互親緣の關係でありと云ふよりも、寧ろ因が果となり果が因となると云う方が正しい。卽ち因中果あり、果中因ありである。

佛法には修證一等なり。修が因であり證は果であることは一應相違はないが、其れは同時であるが故に、修は同時に證であらねばならぬ。其れと同時に又た證は同時に修であらねばならぬ。いまも證上の修なるゆゑに、初心の辨道すなはち本證の全體なりと云ひ得る證上の修とは證は同時に修なるが故に、證は又た修であるのである。故に初心者の辨道卽

ち坐禪は單なる修行ではなくて、本證其者の顯はれでなくてはならぬ。

かるがゆゑに修行の用心をさづくるにも、修のほかに證をまつおもひなかれとをしふ。修は同時に證なるが故に、修することによつて來るべき證ありと思ふてはならぬ。吾々は證上の修をなしつゝあるのである。證を求める修行をなしつゝあるのではない。證はすでに久遠の昔より授けられてある。吾々は其の證を磨くのである。鏡の曇りを磨くのである。玉を磨いて玉ならしむるのである。瓦石を磨いて玉となすと誤認してはいけない。玉を磨くことによつて玉の本性を發揮せしむるのである。

直指の本證なるべし。直指は其儘と云ふ意味である。修行そのものが既に本證である、證果である。坐禪をもつて、坐禪を修することによつて證果を求めると云ふ考へ方は、恰も坐禪を方便として證果を求むるに均しいもので、修證を二として考へる處に普通の修行者の誤りがある。直指の本證を知らぬからである。この間違は恐らく普遍的の間違ではなからうか。修行するもの、常識は常にかくの如くである點からみれば、自利の道を歩む修行者の姿の淋しさが悲慘である。

すでに修の證なれば證にきはなく證の修なれば修にはじめなし。修證同時なれば證に邊際はない。局限せらるゝ何物もない。又修證同時であるが故に修の前後はない筈である。大なる證小なる證もなければ、證は唯だ證全體であり、證は證其れ自身として完備してゐる。修は修として修それ自身に充足して居る。故に修の前後はない。吾々は證の內容を考へる必要もなければ修の前後を考へる必要もない。初心だからとて多年の修行者を怖れる事もなければ、如何なる證果が開けるかと仰望する必要もない。吾々は打坐と同時に釋迦であり達磨である。釋迦の無邊際なる證果を證果とし、達磨の九年面壁を自分の修とすることが出來るのである。

こゝをもて釋迦如來、迦葉尊者ともに證上の修に受用せられ、達磨大師、大鑑高祖、おなじく證上の修に引轉せらる。佛法住持のあとみなかくのごとしと云ふ。釋迦と云ひ迦葉と云ひ、又達磨と云ひ六祖慧能卽ち大鑑と云ひ、決して別人ではない。やはりこの證上の修を修し、受用し受用せられることによつて、釋迦であり迦葉であり、達磨であり大鑑であり得たのである。恐らく今も猶ほ永遠の而今に於いて其れを受用し受用せられてゐるで

あらう。佛教は結局かくの如くして傳持せられて來たものである。佛教は卽ち證上の修を傳へるものであると云つていい。

すでに證をはなれぬ修あり。われらさいはひに一分の妙修を單傳せる初心の辨道すなはち一分の本證を無爲の地にうるなり。しるべし修をはなれぬ證を染汚せざらしめんがために佛祖しきりに修行のゆるくすべからざるとをしふ。吾等は幸に證上の修の極意を佛祖より單傳せられ、今其の初心の辨道坐禪を行ひつゝある。吾々は不知不識の間にすべに圓滿無碍なる本證を體得してゐるのである。こゝに於てか佛々祖々が修行を勵むべしと敎へた意味が讀めなければならん。證を明らかにせんとすれば修を勵むべきことであつた。修は證上の修なるが故に、修は證の鏡をより輝かしるむ磨擦であつた。其故に諸佛諸祖はこの修證の關係を染汚せざらしめんために修行を強調したのである。修證二なりと云ふが如き考へに墮することを畏れての訓誡であつたのである。

妙修を放下すれば本證手の中にみてり。本證を出身すれば妙修通身におこなはる。修證の不卽不離の關係は洵に明らかである。今かりに修を取去ることが出來るとしたら、證は

明らかに全身に脈うつて居る。又證を取去り得たら我身全體に修が充滿してゐる。修は證であり、證は修である。故に坐禪は修であると同時に證に他ならん。

八

「又まのあたり大宋國にしてみしかば諸方の禪院みな坐禪堂をかまえて、五百六百および一二千僧を安じて日夜に坐禪をすゝめき。その席主とせる傳佛心印の宗師に佛法の大意をとぶらひしかば修證の兩段にあらぬむねをきこえき。このゆゑに、門下の參學のみにあらず。求法の高流、佛法のなかに眞實をねがはん人、初心後心をえらばず、凡人聖人を論ぜず、佛祖のをしへにより、宗匠の道をおふて坐禪辨道すべしとすゝむ。きかずや祖師のいはく、修證すなはちなきにあらず、染汚することはえじ。又いはく、道をみるもの道を修すると。しるべし、得道のなかに修行すべしといふことを。」（辨道話）

今大宋國に於ては禪院にはみな坐禪堂を設けて五六百から一二年の雲衲が盛んに坐禪してゐるのを見たのであるが、共の指導者の嫡傳の師家に佛法の大要を尋ねると修證は不二

であると答へた。この故に門下に修行する雲衲のみならず、法を求めて集まつた高貴の人々、眞實の求道者は初心後心の別なく、凡人聖者を別たず佛祖の教へに從ひ師家について坐禪辨道すべきことを奬めてゐる。洵にこの事が大宋の佛教をして今日の盛況をなさしめて居るのである。南嶽の懷讓は修證すなはちなきにあらず、染汚することはえじと云つて居り、司空の本淨は、道を見て方に道を修す、見ずんば復た何をか修せんと云つてゐる。この二つの言葉は、正に證上の修をすゝめてゐることは云ふ迄もない。「すでに佛正法をあきらめえん人は、坐禪なにのまつところかあらん」とは何たる癡言であるか。今更とるに足らない。癡人のまへにゆめをとかず、山子の手には舟棹をあたへがたしと云ふ陶淵明の語には眞理がある。

「……わが朝の先代に教をひろめし諸師、ともにこれ入唐傳法せしとき、なんぞこのむねをさしおきて、たゞ教をのみつたへし」（辨道話）

この問はやはり眞に近いが、道元はあつさり答へてゐる。

「しめしていはく。むかしの人師この法をつたへざりしことは、時節のいまだいたらざりしゆゑなり」（辨道話）

入唐求法の多くの人傑は、はる〳〵海を渡つて唐に法を求めたけれども、禪の興は唐代ではなく宋代に來つてからであつた。時節が未だ至らなかつたがためである。この答に對して又問を發する。然らば

「……かの上代の師、この法を會得せりや。しめしていはく、會せば通じてん。」（辨道話）

入唐求法の人々は坐禪を會得したであらうかどうかと云ふ。其れに對して彼れは大きく會せば通ぜんと答へる。この最上無上の打坐、の一行は、彼等の耳に入らなかつたけれどももし彼等が耳を傾ける日があつたら、すべて彼等はこの法に歸するであらう。次に問ふ。

「……あるがいはく、生死をなげくことなかれ、生死を出離するに、いとすみやかなるみちあり、いはゆる心性の常住なることはりをしるなり。そのむねたらく、この身體は、すでに生あれば、かならず滅にうつされゆくことありとも、この心性はあへて滅することなし。よく生滅にうつされぬ心性、わが身にあることをしりぬれば、これを本來の性とする

がゆゑに、身はこれかりのすがたなり、死此生彼さだまりなし。心はこれ常住なり、去來現在かはるべからず。かくのごとくしるを生死をはなれたりとはいふなり。このむねをしるものは、從來の生死ながくたえて、この身をはるとき、性海にいる。性海に朝宗するとき、諸佛如來のごとく、妙德まさにそなはる。いまはたとひしるといへども、前世の忘業になされたる身體なるがゆゑに、諸聖とひとしからず。いまだこのむねをしらざるものは、ひさしく生死にめぐるべし。しかあればすなはち、たゞいそぎて心性の常住なるむねを了知すべし。いたづらに閑坐して一生をすぐさん、なにのまつところかあらん。かくのごとくいふむね、これはまことに諸佛諸祖の道にかなへりやいかん。」（辨道話）

この質問はこの時代の佛教の代表者がもつ信仰の心持を示してゐると云つてよからう。靈魂の不滅を信ずる人々にはかゝる信仰が普遍であるが如く、其の時代にかくあつたやうに、現代に於てもかゝる信仰が一般を支配してゐはせないか。靈が常に肉體以外にありとの信仰、靈が肉體以上でありとの信仰、靈主肉從の信仰こそいかにも普遍であると云つていゝ。

かゝる普遍的な信仰が、かゝる質問を提供することになる。人生の一大事である生死の問題は憂ふる必要はない。生死出離の近き方法がある。卽ち心性の常住を知ることであると云ふ。其の內容は、この肉體は生れたる以上死は當然である。けれども自己の靈性は萬代不滅である。この不易の靈性に眼醒めぬればこれが卽ち本來具有の生命を自覺したことであつて、肉體は靈の假りの住家であつて、無常定り難いけれども、心は常住の故に永遠に變易することはない。かく知ることが生死出離の近道であると云ふ。

この覺を得たるものは從來の生死流轉の根本を切つて、死と共に其の本源の世界にかへることが出來る。この世界に於ては佛の如く安穩和平なる淨土の生活が送れる。今はたとひ其の理を知つてゐても前生になした妄業の因緣によつて凡夫の生活を暮して居るけれども末は救はれ得るのである。未だこの理を知らざるものは生死流轉の苦惱を永遠に受けねばならぬ。故に吾々は直ちに靈性の永遠を知らなければならぬ。徒らに坐禪三昧の閑生活に一生を過すことは迂愚の至りであると云ふのである。

九

この質問は如來の本願力に乘托する他力の教へを奉ずる法然や親鸞や、この世に題目的世界を建立せんとする日蓮の鎌倉の新宗ならびに道元の打坐の一行を生ましめた舊宗の精神であり信仰である處のものであつたと云つていゝ。法然や親鸞や日蓮や道元は、かゝる志向に反する處に現はれた新信仰運動の闘士であつたと云つてもいゝ。故に道元は、この質問に對しては强く其の思想の非なることを指摘して、先尼外道に均しと、之れを否定して居るのである。其の故に其の非を解明するために自然と道元は自己の抱懷する中心的な思想を展開して行くことになつて行く。

「しめしていはく、いまいふところの見、またく佛法にあらず、先尼外道が見なり。いはくかの外道の見はわが身うちにひとつの靈知ありて、かの知すなはち緣にあふところに、よく好惡をわきまへ、是非をわきまふ。痛痒をしり苦樂をしる。みなかの靈知のちからなり。しかあるにかの靈性はこの身の滅するとき、もぬけてかしこにうまるゝゆゑにこゝに滅すとみゆれども、かしこの生あれば、ながく滅せずして常住なりといふなり。かの外道が見かくのごとし。しかあるを、この見をならふて佛法とせん、瓦礫をにぎりて金寶とおもはんよりもなほおろかなり。癡迷のはづべきたとふるにものなし。」（辨道話）

この先尼外道に對する道元の闘心は中々深い。其の理由は先尼外道が持つ所の心常相滅の實體論に對して、道元が採らんとする處は、其れと全く正反對の立場にあつて身心一如性相不二を高調するからである。心と云ふが如き實體を認めず、心と身の差別を認めない現象論的方法を採らんとするからである。それと同時に又、彼れの時代の佛教が、かゝる先尼外道的色彩を濃厚にもつて居り、其の大乘的精神の失なはるゝことを悲しむ餘り、彼等に對して、それとなく先尼外道に均しきことゝ警告するためであつたとも見られる。かゝる理由によつて道元は正法眼藏の至る處に其れを論じて居るのであるが、先尼外道其ものに對して詳しく述べて居るのは眼藏の卽心是佛の卷である。

「外道のたぐひとなるといふは、西天竺國に外道あり先尼となづく。かれが見處のいはくは大道はわれらがいまの身にあり、そのていたらくは、たやすくしりぬべし。いはゆる

苦樂をわきまへ、冷暖を自知し、痛癢を了知す、萬物にさへられず、諸境にかゝはれず物は去來し、境は生滅すれども、靈知はつねにありて不變なり。この靈知ひろく周遍せり、凡聖含靈の隔異なし。そのなかにしばらく妄法の空華ありといへども、一念相應の智慧あらはれぬれば、物も亡じ境も滅しぬれば、靈知本性ひとり了了として鎭常なり。たとひ身相はやぶれぬれども、靈知はやぶれずしていづるなり。たとへば人舍の失火にやくるに、舍主いでゝさるがごとし。昭々靈々としてある、これを覺者知者の性といふこれをほとけともいひ、さとりとも稱す。自他おなじく具足し、迷悟ともに通達せり。萬法諸境ともかくもあれ、靈知は境とともならず、物とおなじからず、歷劫に常住なりいま現在せる諸境も、靈知の所在によらば、眞實といひぬべし。本性より緣起せるゆゑには實法なり。たとひしかありとも靈知のごとくは常住ならず、存沒するがゆゑに、明暗にかゝはれず、靈知するがゆゑに、これを靈知といふ。また眞我と稱し、覺元といひ、本性と稱し、本體と稱す。かくのごとくの本性をさとるを、常住にかへりぬるといひ、歸眞の大士といふ。これよりのちはさらに生死に流轉せず、不生不滅の性海に證入する

なり。このほかは眞實にあらず、この性あらはさゞるほど三界六道は競起するといふなり、これすなはち先尼外道が見なり。」（眼藏、卽心是佛）

印度の婆羅門教の思想を代表するものはこの先尼外道である。佛教がかゝる思想より脫して佛教獨自の思想精神が發展したと云つていゝ。諸法皆空と云ひ諸法無我と云ふ佛教の大乘的精神は、かゝる實體的思想を拒否する處に生ずる思想でなくてはならんのである。然るに大乘の精神がつゐにかゝる先尼外道的色彩を帶ぶることは正しく佛教の墮落であり思想の消滅を意味することになる。佛教を奉ずるものにとつては洵に重大なる危機と云はなければならない。更に强く云へば道元が殊更に先尼外道を云爲することは佛教救濟の一大志願に出づるとも云つていゝであらう。

其故にわざ〳〵其の思想の內容を詳細に示して其の反省をもとめ其れを剖判することによつて正法の內抱を解明しやうとするのである。

卽心是佛の巻の説明によつて先尼外道の思想は極めて明瞭である。其れをこの辨道話に其の要を取つて説明するのである。

わが身うちにひとつの靈知あり、かの知すなはち緣にあふところに、よく好惡をわきまへ是非をわきまふ。痛痒をしり苦樂をしる。みなかの靈知のちからなり。先尼外道は身内に心と云ふものを認める。この心が外境に緣ぜらるゝ時に物の好惡を知り是非をわきまへ痛痒苦樂を分別する。

しかあるにかの靈性はこの身の滅するときもぬけてかしこにうまるゝゆゑにこゝに滅すとみゆれどもかしこの生あれば、ながく滅せずして常住なりといふなりと云ふ。この心は其の依所である肉體の死する時其の肉體を脫して他の依所をかつて其處に住する。故に此處には滅したけれども彼處に生きてゐるのであるから心は常住不滅である。卽ち心常相滅であると云ふ。

かゝる考へが佛法の如く考へらるゝならばこれこそ洵に佛教の恥辱である。瓦礫をにぎりて金寶とおもはんよりもなほおろかなりと道元は悲しむのである。この悲しみの故に

「大唐國の慧忠國師ふかくいましめたり。」（辨道話）

この南陽の慧忠が先尼外道の意見にも均しき其の時代の南方の坐禪者を誡めたことは卽心是佛の巻に

「大唐國大證國師慧忠和尙、僧に問ふ、何方より來る。僧曰く、南方より來る。師曰く、南方何の知識か有る。僧曰く、知識頗る多し。師曰く、如何が人に示す。僧曰く、彼の方の知識直下に學人に卽心是佛と示す、佛は是れ覺の義、汝今悉く見聞覺知の性を具す此の性善能揚眉瞬目し去來運用す、身中に徧し、頭捉るれば頭知り、脚捉るれば脚知る故に正徧知と名く、此れを離れて外更に別佛無し。此の身には卽ち生滅有り、心の性は無始以來未だ曾て生滅せず。……卽ち身は是れ無常にして其の性は常なり。……師曰く若し然らば彼の先尼外道と差別有ること無し。……此の如きものを審かにすれば邪正辨ずること莫し、孰か之を爲ん。吾れ遊方する比、多く此の色を見る、近ごろ尤も盛んなり。三五百の衆を聚却し目に雲漢を視て云く、是れ南方の宗旨、他の壇經を把つて改換し鄙譚を添糅し聖意を削除して後徒を惑亂す、豈に言教を成さんや、苦なるかな吾が

宗喪びん。若し見聞覺知を以て是れ佛性なりと爲さば、淨名が法は見聞覺知を離る、若し見聞覺知を行ぜば是れ則ち見聞覺知にして法を求むるに非ずと云ふべからず。」（眼藏、卽心是佛）

大證國師は道元の古佛として尊ぶ曹溪の上足の弟子である。天上人間の大善識であると彼れが尊敬する和尙であるこの慧忠が、其の當時の南方の禪を悲しむ心は、やがて道元が我が國の先尼外道的佛教を悲しむ心である。かゝる邪見は唯だそれこの正法によつて救はれねばならんのである。

法に生きる者（二）

一

「いま心常相滅の邪見を計して、諸佛の妙法にひとしめ、生死の本因をおこして生死をはなれたりとおもはん、おろかなるにあらずや、もともあはれむべし。たゞこれ外道の邪見なりとしれ、みゝにふるべからず。」（辨道話）

先尼外道の考へてゐる心常相滅の邪見を信じて、佛の正法と均しと考へ、かりにも安りがはしき生死の根本としての心なるものを認めて、其れの常住の故に生死を出離せしと考へる如きは、迂愚の至りである。悲慘である。かゝる如き考へは唯先尼外道の思想であつて耳を藉すべきではない。

「ことやむことをえず、いまなほあはれみをたれて、なんぢが邪見をすくはゞ、しるべし佛法にはもとより身心一如にして、性相不二なりと談ずる、西天東地おなじくしれると

ころあへてたがふべからず。いはんや常住を談ずる門には、萬法みな常住なり、身と心とをわくことなし。寂滅を談ずる門には、諸法みな寂滅なり、性と相とをわくことなし、しかあるをなんぞ身滅心常といはん、正理にそむかざらんや……」（辨道話）

佛法に於ては身心一如と云ひ、性相不二と云ふ。これは佛教の根本原理であつて佛教の弘通せらるゝ處誰も信ぜぬものはない。又佛教に於ては常住とも談ずることもあれば生滅即ち寂滅と云ふ場合もある。諸法常住、諸法寂滅どう云つてもいゝ。其れは諸法即ちあらゆる存在は畢竟するに自性なきものであるからである。無自性であるが故に其の無自性なることを示さんがために、常住に執着する所謂常見の者には寂滅と云ひ、寂滅に執着する者、所謂斷見の徒には常住と示すのである。故に常住と云つても寂滅と云つても無自性であるが故に共に正しい。

今假りに諸法常住と言はゞ萬法みな常住であつて身と心との差別はない、共に常住である。又假りに諸法寂滅と云はゞ、諸法みな寂滅であつて性と相との區別はない共に寂滅であらねばならん。故に身滅心常の如き先尼外道の考へは根本的に正法の理法に叛くものである。

る。

「しかのみならず、生死はすなはち涅槃なりと覺了すべし、いまだ生死のほかに涅槃を談ずることなし。いはんや心は身をはなれて常住なりと領解するをもて生死をはなれたる佛智に妄計すといふとも、この領解知覺の心は、すなはちなほ生滅して、またく常住ならず。これはかなきにあらずや。嘗觀すべし。身心一如のむねは佛法のつねの談ずるところなり。しかあるに、なんぞこの身の生滅せんとき、心ひとり身をはなれて生滅せざらん。もし一如なるときあり、一如ならぬときあらば、佛説おのづから虚妄にありぬべし。又生死はのぞくべき法ぞとおもへるは、佛法をいとふつみとなる、つゝしまざらんや。」（辨道話）

佛教に於ては身心一如、性相不二と教へると共に生死は即ち涅槃なりと覺る。生死そのまゝ佛の境界と教へる。外道の外く生死を離れて別に涅槃ありとは教へぬ。況してたとひ肉體は死すとも心は常住なりと考へて、生死を離れたる佛智の世界ありと妄想するけれどもかく考へる心はやはり生滅して常住であり得ないではない。全く理に合はないか。

身心一如は佛教の教へである。故に肉體の生滅する時は心も同時に生滅すべきであつて心のみが肉體を離れて生滅せぬ道理はない。若し強ひて外道の見に花を持たせて、かゝる心常相滅の狀態があり得るとしたら、身心一如なる時あり、ならぬ時ありと說明せなければならんことになる。若しもかく云ひ得るならば佛說は虛妄であり、嘘であると云はなければならんことになるではないか。

又彼等が生死は除くべき法であると考へてゐることが既に間違ひである。生死卽涅槃である。生死其のまゝで涅槃である。生死を除けば涅槃も無くなる。これは正しく生死卽涅槃を教へる佛教を厭ふことになりはせぬか、洵に畏るべし愼むべきである。

「しるべし佛法に心性大總相の法門といふは、一大法界をこめて性相をわかず、生滅をいふことなし。菩提涅槃におよぶまで心性にあらざるなし。一切諸法萬象森羅ともにたゞこれ一心にして、こめずかねざることなし。このもろ〳〵の法門、みな平等一心なり、あへて異違なしと談ずる、これすなはち佛家の心性をしれる樣子なり。しかあるを、この一法に身と心とを分別し生死と涅槃とをわくことあらんや。すでに佛子なり、外道の見をかたる狂人のしたのひゞきをみみにふるゝことなかれ。」（辨道話）

起信論に云ふ心性大總相の法門として佛法を示す時には、一大法界がすべて其處に該攝せらるゝ故に、其處には性と相との差別もなく生と滅との區別もない。菩提と云ひ涅槃と云ひ、發心と云ひ修行と云ふ、其等もこの一心性に收められてしまふ。一切諸法の森羅萬象もたゞこの大總相の一心に呑却せられて、すべてが含められ攝せられないものはない。こゝに來つては一切諸法みな平等の一心となつて、違なる處がないと示すことが佛教の心性其物である。其の一心の一法に於て身心を差別し、生死涅槃を區別することは間違ひである。佛教を奉ずるものは外道の見解を云ふ狂人の言葉に迷うてはならぬ。

二

こゝに殘されたる問題がある。上述の場合に示された性相及び心性並びに生死涅槃とは如何なるものであるかを道元は未だ說いて居ない。彼れは、此等の問題を如何に考へたであらうか。性を解けば相は自然に現はれ、生死を說けば涅槃が自然に示されるから、こ

ゝでは性、心性、生死が問題となつて來る。

先づ心性については、心性大總相の法門といふは、一大法界をこめて法相をわかず、生滅をいふことなし、菩提涅槃におよぶまで心性にあらざるなし。一切諸法萬象森羅ともにたゞこれ一心にして、こめずかねざることなし。このもろ〳〵の法門、みな平等一心なりあへて異違なしと談ずる、これすなはち佛家の心性をしれる樣子なり、と云つてゐる。この點より見れば心性は卽ち一心であると云ふことが解せられ一心はやがて心と解してよからう。

この心なるものは如何なるものであらうか。心は意識の根元であつて眼耳鼻舌身の五管を通じて色聲香味觸の外緣に觸れて此れを慮知念覺する種々の分別作用を起す。かゝる心は今の問題ではない。かゝる心以上に更に三界唯心と云はれ、涅槃妙心と云はれ、菩提心と云はれ自性清淨心と云はるゝ其の心である。かゝる心は最早や身に對する心ではなくて、云ひ換へれば未發菩提心の心ではなくて、唯の心では無く一切萬法の差別心を遊離した自性清淨の心であつて、無自性の心、卽ち無我そのものを現はす心である。

この不可思議なる心は、此れを道元はいかに、說くか。正法眼藏の卽心是佛の卷に「いはゆる正傳しきたれる心といふは、一心一切法、一切法一心なり。このゆゑに古人いはく、若ㇾ人識ニ得スレハ心ヲ一大地無ㇾ二寸土ニ一。しるべし心を識得するとき、蓋天撲落し、帀地裂破す。あるひは心を識得すれば、大地さらにあつさ三寸をます。古德云、作麼生是妙淨明心、山河大地、日月星辰。あきらかにしりぬ心とは山河大地なり。日月星辰なり。しかあれどもこの道取するところすゝめば不足あり。しりぞくればあまれり。山河大地心は、山河大地のみなり、さらに波浪なし風煙なし。日月星辰心は、日月星辰のみなり、さらにきりなしかすみなし。生死古來心は、生死去來のみなり、さらに迷なし悟なし。牆壁瓦礫心は、牆壁瓦礫のみなり、さらに泥なし水なし。四大五蘊心は四大五蘊のみなり、さらに竹なし木なし。かくのごとくなるゆゑに、卽心是佛、不染汚卽心是佛なり、諸佛不染汚諸佛なり。」(眼藏、卽心是佛)

いはゆる正傳しきたれる心といふは、一心一切法、一切法一心なり、と云ふ。こゝに云

ふ一心一切法は萬法、自己を轉じて山河大地に歸することであり、一切法一心は、一心、山河大地を轉じて自己に歸することを云ひ、三界唯心、心外無別法を示すと説明せられてゐる。然しかゝる心もやはり自己の心を離れて存在し得ぬ筈である。自己の如何なる心の狀態がかゝる不可思議なるものを識得し得るのであらうか。唯識思想に於ては眼、耳、鼻、舌、身の前五識以上に、第六識として意識、第七識として末那識、第八識として阿賴耶識を立てて萬法唯心の旨を教へて居る。即ち賴耶緣起論と云はるゝものである。けれども其の根元をなす阿賴耶の起源について、何等の説明を加へて居ない處に不安があり、其れを補ふために生れたるものが華嚴の眞如緣起だと考へられる。しかし何れにしても道元は其等のものゝ言葉は藉るけれども、其等と同じ思想を敷衍するものでもなければ祖述するものでもない。故に三界唯一心、心外無別法と華嚴の言葉を藉りるけれども其の思想を述べるものではない。

我々の心には外境を認識する所謂慮知念覺の心以上に自己の心をも對境として緣ずる心がある。所謂主觀と云はるべき心である。しかしこの主觀と云はるべき心以上のものが更

に道元によつて知られてゐたことを考へさせられる。其れは諸法は無自性である。心も諸法の一に過ぎない。故に心も無自性である。無自性なる心とは如何なるものであるか。心は普通に境に對するものであるが、無自性の心なるものはかゝる境に對するものではなく無自性なるが故に一方に於ては普通の心として境に對しながら、しかも境との對立を撥無したる無對境の心である。この心に於ては自然界と云ひ精神界と云ひ、即ち外界内界の差別なしに、一切に普遍するものとなる。勿論萬法唯心と云ふ様に一切のものを心が作る、一切のものの根本が心であると云ふ觀念論的な心でなく、平等に普遍に心として存在する心である。しかし其の心は如何なるものかと其の實體を求むれば心として摑むべき實體は存せない。即ち無を自性とするものである。然らば無きかと云へば一心として存在する。然かもこの心は、同時に性相不二、身心一如の故に、此の心は即ち同時に物であると云ふことが出來る。三界唯一心、心外無別法、心佛及衆生、是三無差別と云ふ言葉は、かゝる心を基礎としてはじめて一心即三界、一心即佛、一心即衆生と解し得ることになる。かゝる獨自の心が自性清淨心と云はるべきものである。

三

いはゆる正傳しきたれ心といふは、一心一切法、一切法一心なり、と云ふ言葉の意味もこゝに來つて判然して來る。萬法が自己を轉じて山河大地の自然となり、自己が萬法を轉じて山河大地の自然を自己に歸する。山河自然も自己も共に一心であつて何等差別はない。自己卽自然、自然卽自己である。

このゆゑに古人いはく、若人、心を識得すれば大地に寸土なし。しるべし心を識得するとき蓋天撲落し、帀地裂破す。と云ふことは、このことを更に說明したる言葉である。眞にこの心を知り得れば、この一心以外に何物も存せない。天も無くなり地もなくなる。卽ち天も天にして其の相を持ちながら同時に一心であり、地も地として存しながら同時に一心である。天地を天地として見れば天地であるが、一心として見ればすべて一心であつて天地は無くなる。蓋天は撲落し、帀地は裂破する。

あるひは心を識得すれば、大地さらにあつさ三寸をます。この一心を識得すれば大地さ

らに厚さ三寸を增すと云ふことは、厚さ三寸の增加を云ふのではない。たとひ增しても一心なるが故に增減はない筈であるが、其の識得の効果の偉大なるを示したに過ぎない。

古德云、作麼生是れ妙淨明心、山河大地、日月星辰。あきらかにしりぬとは山河大地なり日月星辰なり。しかあれどもこの道取するところすゝめば不足あり、しりぞくればあまれり。この意味は所謂一心、卽ち自性淸淨心、こゝでは妙淨明心と云つてゐるが、其の一心とは如何なるものであるかと云ふ問に對して仰山和尙は、山河大地、日月星辰と云つてゐる。一心は一心以外の何物でもない。然るに心と云へば何分特別なものがある樣に思惟し易い。其の心を破するために一心とは他の何物でもない山河大地であり、日月星辰であると答へる。山河大地も一心であり日月星辰も一心である。山河大地を除いて一心もなければ日月星辰を除いて一心はあり得ない。故に、あきらかにしりぬ、心とは山河大地なり、日月星辰なりと云つてゐるのである。山河大地が一心であり、日月星辰が其儘一心である。

しかあれどもこの道取するところすゝめば不足あり、しりぞくればあまれり。この意味

はこの一心には何等增減はない。心地をかくすゝめば不足すと云ひ、退くればあまれりと云つてゐるので、一つの反語である。不增不減を示して居る、嚴然と獨自に存在することを云つてゐるのである。

山河大地心は、山河大地のみなり、さらに波浪なし風煙なし。山河大地卽一心であるから、其れが獨自に存在する處に一切法一心の故に一切は一山河大地となつて、其れで究盡する。其處には河の屬性としての波浪はなく、山に常に附屬する風煙もない。盡地盡界唯一山河大地である。

日月星辰心は日月星辰のみなり、さらにきりなしかすみなしと云ふ。日月星辰卽一心なるが故に同じく一切は日月星辰となつて其れで究盡する。其處には霧も霞もない、其等は一切日月星辰である。

生死去來心は、生死去來のみなり、さらに迷なし境なし。生死去來と云ふ如きものでもこれは時に關するものではあるが、かゝるもの迄も一心であるが故に、生死去來卽一心で其れの屬性と考へられる迷も悟も其れには關せない。

牆壁瓦礫心は、牆壁瓦礫のみなり、さらに泥なし水なし。牆壁瓦礫は其まゝ一心である。其れで其まゝ究盡してゐる故に泥もなければ水もない。泥は泥として、水は水としてやはり一心で其れで究盡してゐるのである。

四大五蘊心は四大五蘊のみなり、さらに馬なし猿なし。四大は地水大風の一切の原質と考へられるもの、五蘊は色受想行識の作用をするもので、四大五蘊で肉體を指す。かゝる肉體的なるものも卽一心である。故に肉體は其まゝ一心であつて、馬なし猿なしは意馬心猿なしの意味で意もなく心もなし卽ち所謂心意識は問題外であると云ふのである肉體は肉體として究盡する。

椅子拂子心は、椅子拂子のみなり、さらに竹なし木なし。椅子拂子も一心である。故に椅子拂子は椅子拂子として其れで全體である。其の所成の物である竹も木もこゝでは問題ではない。

以上詳かに一心は一切法であり、一切法は一心である意味を解明せられて來た。總てのもの一心ならざるはない。故に

かくのごとくなるがゆゑに、卽心是佛、不染汚卽心是佛なり、諸佛不染汚諸佛なり、と云ひ得るわけである。卽心是佛も一心であるから卽心是佛卽ち卽心是佛であり、諸佛も同じく諸佛卽諸佛である。不染汚は其の中間に物を交へない卽ち卽の意である。

吾々はこゝに於て所謂心性、心、一心なるものゝ意味が把握し得られる。一切法が一心であり同時に一心が一切法である。一切の法の上に一心が作用するのではなくて、一切法は勿論一切法の個々のものもすべて一心であることを知るのである。

四

次は性の問題である。これもやはり、しるべし佛法に心性大總相の法門といふは、一大法界をこめて性相をわかず、生滅をいふことなし。菩提涅槃におよぶまで心性にあらざるなしと云ひ、又このもろもろの法門、みな平等一心なり、あへて異違なしと談ずる、これすなはち佛の心性をしれる樣子なり、とも云つてゐる。この意味からすれば性は心性であり、一心であると解し得る。一心は既に述べ了つた。しかしこゝに性の性質を更に窺うた

めには尙ほ一心、心性と云はるゝ以外に佛性と云ふ言葉が常に注意せられる。故にこの佛性とは如何なるものかを考へなければならぬ。法性と云ふ言葉もあるがこれは佛性に均しい。

佛性についてはやはり眼藏の佛性の卷に詳かである。

「釋迦牟尼佛言。一切衆生、悉有佛性、如來常住、無有變易。これわれらが大師釋尊の師子吼の轉法輪なりといへども、一切諸佛、一切祖師の、頂顙眼睛なり……世尊道の一切衆生悉有佛性は、その宗旨いかん。……あるひは衆生といひ、有情といひ、群生といひ群類といふは衆生なり。群有なり。すなはち悉有は佛性なり、悉有の一悉を衆生といふ正當恁麼時は、衆生の內外、すなはち佛性の悉有なり。」（眼藏、佛性）

この說明によつて道元は涅槃經の一切衆生悉有佛性を一切衆生、悉く佛性ありと解してゐない。一切衆生、悉く佛性有りと云へば衆生と佛性とが對立する。彼れはかゝる對立を認めない故に悉有は佛性なりと讀むのである。悉有卽佛性である。かく見ながら一切衆生の解釋も衆生、有情、群生、群類、と次第に其の意味を擴充して群有と解釋する。普通

衆生は人を云ふのであるが、彼れは其れを擴充して群有即ち一切の存在に迄擴げて行くのである。彼れは三界に對しても單に三界（欲、色、無色即ち人間世界）の意味に採らないで全宇宙と擴充してゆくのであるが、この三界に即ち全宇宙に存在するすべてのものは悉有佛性であると云ふ。宇宙間に存在するものにすべて佛性があると云ふのではない。存在するすべてが佛性なりと解するのである。所謂有佛性の考へである。

彼れによれば一切の宇宙間の存在物はすべて佛性である。故に吾等人間も佛性でなくてはならぬ。

「この法は人々の分上に、ゆたかにそなはれりといへども、いまだ修せざるにはあらはれず、證せざるにはうることなし……」（辨道記）

この辨道話の言葉はよく其の消息を示してゐる。しかしかく悉有佛性であれば、すべてのものが佛性であると、かく解することによつて其處に又た一つの誤解が生じて來る。即ち佛性なる特種なるものがありはせぬかと云ふことである。其れに對して同じく佛性の卷に「大潙山大圓禪師。あるとき衆にしめしていはく、一切衆生無佛性。……大潙の說道は、

一切衆生無佛性なり。有無の言、理はるかにことなるべし。道得の當不うたがひぬべし。しかあれども一切衆生無佛性のみ、佛道に長なり。……一切衆生なんとしてか佛性ならん、佛性あらん。もし佛性あるは、これ魔黨なるべし。魔子一枚を將來して、一切衆生にかさねんとす。佛性これ佛性なれば、衆生これ衆生なり。衆生もとより佛性を具足せるにあらず。たとひ具せんともとむとも、佛性はじめてきたるべきにあらざる宗旨なり。」（眼藏、佛性）

潙山和尙の語を引用して一切衆生無佛性を說く。そして一切衆生無佛性のみ佛道に長なりとこれを讃嘆し、一切衆生なんとしてか佛性ならん、佛性あらん。もし佛性あるは、これ魔黨なるべし。魔子一枚を將來して、一切衆生にかさねんとす、と云つてゐる。更に衆生もとより佛性を具足せるにあらず、たとひ具せんともとむとも、佛性はじめてきたるべきにあらざる宗旨なり、とも云つてゐる。かゝる言葉はそのまゝ悉有佛性を根抵から覆滅するやうに見受けられるが、これは要するに有佛性より生ずる誤を棄てしむるために、立場を異にして述べたものに過ぎない。卽ち無佛性の說である。

かゝる説に對して又た佛性は無きものでありはせぬかとの誤認を生じ易い。このために更に其の邪を拂ふために次に同じく佛性の卷に、

「六祖示二門人行昌一云。無常者、卽善惡一卽諸性分別心也。いはゆる六祖道の無常は、外道三乘等の測度にあらず。……しかあれば無常のみづから無常を說著行著、證著せんはみな無常なるべし。今以二現自身一得度者卽現二自身一而爲說レ法なり。これ佛性なり。さらに或現二長法身一或現二短法身一なるべし。常聖これ無常なり。常凡これ無常なり。常凡聖ならんは佛性なるべからず、小量の愚見なるべし。測度の管見なるべし。佛者小量身也。性者小量作也。このゆゑに六祖道取す、無常者佛性也。常者未轉なり、未轉といふはたとひ能斷と變ずとも、たとひ所斷と化すれども、かならずしも去來の蹤跡にかゝはれず、ゆゑに常なり。しかあれば草木叢林の無常なる、すなはち佛性なり。國土山河の無常なる、これ佛性なるによりてなり。阿耨多羅三藐三菩提、これ佛性なるがゆゑに無常なり。大般涅槃これ無常なるがゆゑに佛性なり。もろ〳〵の二乘の小見および經論師の三藏等はこの六祖の道を驚疑怖畏すべし。もし驚疑せんことは、魔

外の類なり。」（眼藏、佛性）

こゝに於ては六祖の無常佛性の說を示すのである。あらゆる存在はすべて無常である。刹那に生滅して停まることを知らない。刹那、生刹那滅である。故にすべては無常である。しかあれば草木叢林の無常なる、すなはち佛性なり。國土山河の無常なる、これ佛性なるによりてなりと云つてゐる。佛性は有でもない無でもない。無常的存在のすべてが其儘佛性であると云ふのである。佛性なるが故に無常であるとも云ふのである。阿耨多羅三藐三菩提、卽ち佛道も、大般涅槃もやはり無常の故に佛性なりと云ふ。これによつて山河國土草木叢林より、佛道涅槃に至るまですべてがそのまゝ佛性であると云ふ眞理を有、無、無常の三つの命題によつて理解し得るわけである。性は要するにこの場合、佛、法、心等の存在の根本を示す言葉であり、從つて相は其の表せられたるものであること が了解せられる。

五

次に生死とは如何なるものであるかの問題である。これも眼藏の生死の巻に詳しく示してゐる。

「……たゞ生死すなはち涅槃（ねはん）とこゝろえて、生死としていとふべきもなく、涅槃としてねがふべきもなし。このときはじめて生死をはなるゝ分あり。生より死にうつるとこゝろうるは、これあやまりなり。生はひとゝきのくらゐにて、すでにさきあり、のちあり。かるがゆへに佛法のなかには、生すなはち不生といふ。滅もひとゝきのくらゐにて、またさきあり、のちあり。これによりて滅すなはち不滅といふ。生といふときには、生よりほかにものなく、滅といふときには、滅のほかにものなし。かるがゆへに生きたらばたゞこれ生。滅きたらばこれ滅にむかひて、つかふべしといふことなかれ、ねがふことなかれ。この生死は、すなはち佛の御いのちなり。これをいとひすてんとすれば、すなはち佛の御いのちをうしなはんとするなり。これにとゞまりて、生死に著すれば、これも佛の御いのちをうしなふなり。佛のありさまをとゞむるなり。いとふことなく、したふことなき、このとき、はじめて佛のこゝろにいる。たゞし心をもてはかることなかれ。

ことばをもていふことなかれ。たゞわが身をも、心をも、はなちわすれて、佛のいへになげいれて、佛のかたよりおこなはれて、これにしたがひもてゆくとき、ちからをもいれず、こゝろをもつひやさずして生死をはなれ佛となる。……」（眼藏、生死）

この生死の巻は信仰的で實踐的であるが、こゝでは生死の問題の中心は生より死にうつるとこゝろうるは、これあやまりなり。生はひとゝきのくらゐにて、すでにさきありのちあり。かるがゆへに佛法のなかには生すなはち不生といふ。滅もひとゝきのくらゐにて、またさきあり、のちあり。これによりて滅すなはち不滅といふ。生といふときには、生よりほかにものなく、滅といふときには、滅のほかにものなし。かるがゆへに生きたらばたゞこれ生、滅きたらばこれ滅にむかひてつかふべしといふことなかれ、ねがふことなかれと云ふ部分である。

この部分の説明は更に現成公案（げんじやうこうあん）の巻に詳（くわ）しい。

「たきゞはいとなる、さらにかへりてたきゞとなるべきにあらず。しかあるを灰（はい）はのち薪（たきゞ）はさきと見取（けんしゅ）すべからず、しるべし薪は薪の法位（ほふゐ）に住して、さきありのちあり、前後

ありといへども、前後際斷せり。灰は灰の法位にありて、後あり、先あり、かの薪はいとなりぬるのち、さらに薪とならざるがごとく、人のしぬるのちさらに生とならず。しかあるを生の死になるといはざるは、佛法のさだまれるならひなり。このゆゑに不生といふ。死の生にならざる、法輪のさだまれる佛轉なり。このゆゑに不滅といふ。生も一時のくらゐなり、死も一時のくらゐなり、たとへば冬と春とのごとし。冬の春となるとおもはず、春の夏となるといはぬなり。」（眼藏、現成公案）

生死は因果と同じく時間の關聯に於て考へらるゝやうに思へるが、この前に因果の時にも云つたやうに、やはれ生死の問題も非連續的である。有時の卷に示されてゐるやうに、すべてのものは刹那生、刹那滅である。瞬間的に存在するものである。故に一切法は無常である。薪が灰となるのではない。春が夏となるのでもない。薪は薪の法位に住して居り灰は灰の法位に住して居り、春も夏も其の通りで、各々別個の存在である。其の如く生も死もやはり其の法位に住して別個の存在である。生が死となり、死がやがて生となることはない。生は生で究盡し死は死で究盡する。それきりである。他の何物でもない。そこに

は對立がないから、生とも云へず、滅とも云へず、即ち不生であり、不滅である。

けれども薪は薪の法位に住して、さきあありのちあり、前後ありといへども、前後際斷せりの意味が取り悪い。前後際斷せりと云ふことは、薪の刹那生滅を意味する言葉であることとは領かれる。それに對して法位に住して前後ありと云ふ意味は、吾々が物を意識する場合はすべて刹那である。過去と云ひ未來と云ふ、其等のものを意識するけれども、やはりこの刹那に於て意識するのであるが、其の意識内容に於て其の前後を知り得るのであつて、過去は記憶として、未來は期待として存し得るわけである。故に刹那生滅ではあるけれども意識の内容に於ては連續的であると云ひ得る。

次に法位に住すると云ふ意味も理解し難い。この意味は、すべてのものは刹那生滅の無常のものではあるけれども、現はれたる刹那に於ては儼然たる諸法であつて夢の如き存在ではないと云ふ意味である。

以上によつて生死もかくのごときものであることが解し得られる。生と死とは別個の存在であつて、生と死と對立するのではない。生は生のみであつて不生であり、死即ち滅は

滅のみであつて、不滅である。前後際斷してゐるものである。故に

「生はひとゝきのくらゐにて、すでにさきあり、のちあり。かるがゆへに佛のなかには生すなはち不生といふ。滅もひとゝきのくらゐにて、またさきあり、のちあり。これによりて滅すなはち不滅といふ。生といふときには、生よりほかにものなく、滅といふときには、滅のほかにものなし。かるがゆへに生きたらばたゞこれ生。滅きたらばこれ滅にむかひて、つかふべしといふことなかれ、ねがふことなかれ……」（眼藏、生死）

と云つてゐるのである。

「たゞ生死すなはち涅槃（ねはん）とこゝろえて、生死としていとふべきもなく、涅槃としてねがふべきもなし。このとき、はじめて生死をはなるゝ分あり。生より死にうつるとこゝろうるは、これあやまりなり……」（眼藏、生死）

これこそ眞理である。生死も佛性、涅槃も佛性である。ともに一心である。一を棄てゝ他を採ることは間違である。生死即涅槃である。故に

「この生死は、すなはち佛の御いのちなり。これをいとひすてんとすれば、すなはち佛の御いのちをうしなはんとするなり。これにとゞまりて、生死に著すれば、これも佛の御いのちをうしなふなり……」（眼藏、生死）

と云ふ言葉は眞である。故にいかにすればいゝかの實踐的な問題が起つて來る。

「たゞわが身をも、心をも、はなちわすれて、佛のいへになげいれて、佛のかたよりおこなはれて、これにしたがひもてゆくとき、ちからをもいれず、こゝろをもつひやさずして、生死をはなれ佛となる……」（眼藏、生死）

この絶對的信仰が得られてはじめて生死を遁れ得るのである。

六

心、性、生死については略其の心を知り得た。更に辨道話によつて彼れの獨自の世界の展開を前につゞいて見なければならん。

「……この坐禪をもはらせん人、かならず戒律（かいりつ）（ごんじやう）を嚴淨すべしや。」（辨道話）

打坐の一行を專らにするに對する質問である。佛弟子たるべきものは、佛の掟である戒

律を守らねばならんが、坐禪を專修する以外の何物をも認めないならば、戒律はいかにするかと云ふのである。

「しめしていはく。持戒梵行は、すなはち禪門の規矩なり。佛祖の家風なり。いまだ戒をうけず、又戒をやぶれるもの、その分なきにあらず。」（辨道話）

これに對する道元の答は簡單である。禪戒一致を旨とする故に、戒を持し行を淸淨（梵）にするは禪門の規則である。佛祖の宗風である、と一蹴し。若し未だ戒を受けざるものは受くべく、又戒を破れるものは懺悔して其の罪を謝すべきであるが、然し吾々の禪門に於ては打坐の中にすでに戒が具備せられてゐる。打坐は佛の自受用三昧であつて、佛となることである。佛に戒なき佛なく、行の不淨の佛はない。

「古人の行履に隨ひて祇管打坐すべきなり、坐禪の時、何れの戒か持たざる、何れの功德か來らざる」（隨聞記）

と云つてゐるやうに「其の分なきにあらず」は、其の分上に充分具足してゐることを示してゐる。たとひ未戒の者も破戒のものも、眞に打坐の生活に入れば未戒も破戒もない皆

である。

「……この坐禪をつとめん人、さらに眞言止觀の行をかね修せん、さまたげあるべからずや」（辨道話）

坐禪と同時に眞言の修法や天台の觀法を行つて妨げなきやと云ふ。それに對して

「しめしていはく、在唐のとき宗師に眞訣をきゝしちなみに、西天東地の古今に佛印を正傳せし諸祖、いづれもいまだしかのごときの行をかね修すときかずといひき。まことに一事をことゝせざれば、一智に達することなし。」（辨道話）

この答へは、道元の純粹禪への態度を明確にしたものと云つていゝ。嘗て道元が建仁寺にあつた時は、其先師榮西、明全も共に天台の止觀を行ひ密教を修し禪を行じてゐたので あつて、かゝる不純なるものは、道元の意志ではない。宋より歸朝して建仁寺には三年を過したけれども、建仁寺を中心として純粹禪の行動を起さないで、深草に去つたのも其の理由によるものであつた。

故に雲門和尙の語（不レ因二一事一不レ長二一智一）を引用して一事をことゝせざれば一智に

達することなしと云つてゐる。こゝに彼れは明確に禪家の宗風の獨自の展開を必要とする意志を示してゐる。

「……この行は在俗の男女もつとむべしや、ひとり出家人のみ修するか。」（辨道話）

この質問は生活と深く關聯する。云ひかへればこの法によつて一切が救はるゝかと云ふ意味に解していゝ。これに對して

「しめしていはく。祖師のいはく、佛法を會することは、男女貴賤をえらぶべからずときこゆ。」（辨道話）

坐禪が一つの修行として、たとひ純粹のものではなくても佛教の存する處行はれてゐたのであるが、坐禪が常に、其れがもつ特種なる意味に於て難しきものと解されて居り、たとひ修禪の人があつても、其の意味に於て智の勝れたるものか、生活に餘裕あるものかに限られてゐた。觀又は行の困難がやはり坐禪のもつ困難と考へられてゐたのである。

道元は勿論打坐の一行を自己の生命とするものである。打坐こそ佛教の中心生命と解するものであるから、打坐の生活を人生の究極と見るのであるが、古より解せられてゐたやうには坐禪を解してゐないし、坐禪こそ最も安易なる修道と考へてゐる。其の故に歸朝早々普勸坐禪儀を物し、又辨道話を物してゐるのである。しかしこの問題は後章に讓る。

「……出家人は諸緣すみやかにはなれて、坐禪辨道はさはりなし。在俗の繁務は、いかにしてか一向に修行して、無爲の佛道にかなはん。」（辨道話）

前の質問に對する答についての反問である。これも生活と關聯する實際問題である。生活の繁務と坐禪とは相反せないかと云ふ。

「しめしていはく。おほよそ佛祖あはれみのあまり、廣大の慈門をひらきおけり、これ一切衆生を證入せしめんがためなり、人天たれかいらざらんものや。こゝをもてむかしいまをたづぬるにその證これおほし。しばらく代宗順宗の帝位にして萬機いとしげかりし、坐禪辨道して佛祖の大道を會通す。李相國防相國ともに輔佐の臣位にはんべりて、一天の股肱たりし、坐禪辨道して佛祖の大道に證入す。たゞこれこゝろざしのありなしによるべし。身の在家出家にはかゝはらじ。又ふかくことの殊劣をわきまふる人、おのづから信ずることあり。いはんや世務は佛法をさゆるとおもへるものは、たゞ世中に佛法な

しとのみしりて、佛中に世法なきことをいまだしらざるなり。……」（辨道話）

この答への中心は、たゞこれこゝろざしのありなしによるべしと云ふ處と、いはんや世務は佛法をさゆるとおもへるものは、たゞ世中に佛法なしとのみしりて、佛中に世法なきことをいまだしらざるなり、と云ふ處にある。佛法と世法と別個の存在であるならば佛教は象牙の塔にかくるゝものである。かゝるものは吾々には必要ではない。象牙の塔を出でゝと云ふより、佛教は直ちに世法であり、世法は直ちに佛法であらねばならぬ。世法を離れた佛法もなければ、佛法を離れた世法もない。かゝる質問其れ自身が、佛教を世法外のものと考へてゐる處から生じて來る。志なきによるのである。

こゝに道元の佛教觀並びに世法觀が明らかにせられてゐると云ふことが出來る。其の故に打坐の一行を主張するのであり、普勸坐禪を高唱する理由がある。更に

「ちかごろ大宋に馮相公といふありき。祖道に長ぜし大官なり。のちに詩をつくりてみづからをいふにいはく、公事之餘喜二坐禪一、少三曾將レ脇到レ牀眠一、雖三然現二出宰官相一、長老之名四海傳。これは官務にひまなかりし身なれども、佛道にこゝろざしふかければ得道せるなり。他をもてわれをかへりみ、むかしをもていまをかゞみるべし……」（辨道話）

先に揭げられた例の唐代宗は徑山道欽に參禪し、順宗は佛光如滿に參禪してをり、李翺相國は藥山惟儼に、裴休相國（防は誤り）は黃蘗希運に其れ〳〵參禪してゐる。こゝに引かれる馮相公は、馮濟川で不動居士と云つて佛眼清遠に參禪した居士である。其詩、公事の餘、坐禪を喜む、曾て脇を將つて牀に到つて眠ること少なり、然も宰官相を現出すと雖、長老の名四海に傳ふ。と云ふのであるが、この詩の中には世務と佛法との融合がよく示されてゐる。公事の餘暇に坐禪を好んで、體を牀上に橫たへて眠つたことがない。唯今は宰相であるけれども、敎界の長老として名を四海に傳へたい、と希望する。かくして坐禪と生活が一致し得るのである。

「大宋國にはいまのよの國王大臣士俗男女ともに心を祖道にとゞめずといふことなし。武門文家いづれも參禪學道をこゝろざせり。こゝろざすものかならず心地を開明することおほし。これ世務の佛法をさまたげざる、おのづからしられたり。國家に眞實の佛法弘通すれば諸佛諸天ひまなく衞護するがゆゑに、王化太平なり、聖化太平なれば、佛法そ

のちからをうるものなり。又釋尊の在世には、逆人邪見みちをえき。祖師の會下には、獵者樵翁さとりをひらく、いはんやそのほかの人をや。たゞ正師の教道をたづぬべし。」（辨道話）

宋に於ては一般に坐禪が普及してゐる。武士文人に至るまでも祖道をいそしんで居る。祖道を志すものは必ず祖道を得てゐる。おほくは多いの意味ではない、決定の意味を現はす。志すもの必ず得ると云ふことがこゝの重點である。志さへあればが問題である。結局眞實を求める意志さへあれば眞實は與へられる。意志なきものは、たとへ分上豐かに佛性を具へてゐても磨かれることなければ光を見ることが出來ない。宗教は志の如何にある。世務は問題ではない。

次に國家との關係に進めて來る。嘗て榮西は興禪護國論を書いてゐるが、其れは禪は新しい教へではないと云ふことを示さんがための消極的なものであつたが、道元はかゝる消極的な考へを持つてゐない。國家に眞實の佛教が弘通すれば佛神がひまなく護衞すると云ふ。これは夢想ではない。眞實の佛教は佛をこの世に生かす。佛神をこの世に再生せしめ

る。故に佛神のある處國家は太平であり、王化遍く至れば佛教又た眞實の光を增長する。其の道義の國家は佛教との相關に於て樹立せられると云ふことが出來る。

釋迦の在世に於ては反逆者の阿闍世王も、邪見の提婆も救はれて居り、支那の祖師のもとに於ては獵者の石霜も漁者の玄沙も樵者の慧能も祖道によつて救はれてゐるのである。佛教は生活を碍へない。生活を正しくする。唯專ら正師の導によつて生活の向上をはかるべきである。

七

「……この行は、いま末代惡世にも修行せば、證をうべしや」（辨道話）

五々の五百年又は正像末の三時は、釋迦が教化の方便に設けたもので、正法五百年は教行證の三法が存し像法一千年は教行のみ存して證なき時、末法は教のみあつて行證なき時代と區分するのであるが、釋迦滅後一千五百年の正像の二時は過ぎて、今や末法の時に屬してゐる。この末世末法の時代觀は平安末期以來甚しく世人の心を暗くしてゐる。法然、

親鸞はこの末法に於てはじめて開かるべき本願一乗の他力を發見し、日蓮は末法に眼醒めて題目開顯の世界を目睹し得たのであつた。

末法の觀念は時代の魅物であつた。暗き世である。淋しき世である。五濁惡邪の蔓る時世である。かゝる時代に於ても坐禪によつて證が得られうるか。

「しめしていはく。教家に名相をことゝせるに、なほ大乘實教には正像末法をわくことなし。修すればみな得道すといふ。いはんやこの單傳の正法には、入法出身、おなじく自家の財珍を受用するなり。證の得否は修せんものおのづからしらんこと、用水の人の冷煖をみづからわきまふるがごとし。」（辨道話）

教家（天台華嚴等を指す）に於ては名相を分別（學解）を事としてゐながら、眞實大乘教の天台や華嚴に於ては正像末法の三時をわけないで、修すれば證を得と云つてゐるではないか。まして佛祖單傳の正法たる禪門に於ては、入法の最初より其の究竟（出身）に至るまで自己の所有する財寶即ち佛性を受用してゐるのであつて、證が得らるゝか否やは、自ら知り得ること恰度水を飲んで冷煖を知るやうなものである。

道元は鮮やかに時を超越する。無時に遊ぶものには時はない。無所得に遊戲するものには求むる所がない。唯だ坐禪辨道すれば、それでいゝ。何を怖れ何をか求めん。

「……あるがいはく。佛法には卽心是佛のむねを了達しぬるがごときは、くちに經典を誦せず、身に佛道を行ぜざれども、あへて佛法にかけたるところなし。たゞ佛法はもとより自己にありとしる。これを得道の全圓とす。このほかさらに他人にむかひてもとむべきにあらず。いはんや坐禪辨道をわづらはしくせんや。」（辨道話）

この質問は誰でもよく陷り易い陷穽である。われ之れ佛と證れば經典も修行も不用と云ふ。要するに佛法は自己にあると知ることが、佛教の究竟であると考へて、他に何等求むべきものがない。坐禪辨道のごとき屋上屋を架するものであると考へる。

「しめしていはく。このことばもともはかなし。もしなんぢがいふごとくならば、こゝろあらんものたれかこのむねをしへんにしることなからん。しるべし佛法は正に自他の見をやめて學するなり。もし自己卽佛としるをもて得道とせば、釋尊むかし化道にわづらはじ……」（辨道話）

かゝる愚劣な質問に對しては答へる要はないが、誰れでもかゝる考については少しく解明すれば覺るであらう。敢て二千年來の佛教の必要はない。活眼を開いて見よ。佛教を學するに必要なことは自他の見をやめるにある。自己に求めるのでもなければ、他に求めるのでもない。若しも今の如く自己は佛なりと知ることが證であるならば釋迦は決して指導に苦心はせなかつた筈である。しかるにあの八十年の生涯の苦心は何故であるか。達磨大師も云つたやうに凡聖等一、自無く他無しでなくてはならぬ。自己に求むべきでもなく他に求むべきでもない。自己に求めても、他に求めても與へられはしない。唯自他の二見を離れた處に得られるのである。

「しばらく古德の妙則をもて、これを證すべし。むかし則公監院といふ僧、法眼禪師の會中にありしに、法眼禪師とふていはく、則監寺なんぢわが會にありていくばくのときぞ。則公がいはく、われ師の會にはんべりて、すでに三年をへたり。禪師のいはく。なんぢはこれ後生なり、なんぞつねにわれに佛性をとはざる。則公がいはく、それがし和尚をあざむくべからず。かつて青峰禪師のところにありしとき、佛法において安樂のところ

を了達せり。禪師のいはく、なんぢいかなることばによりてかいることをえし。則公がいはく、それがしかつて青峰にとひき、いかなるかこれ學人の自己なる。青峰のいはく、丙丁童子來求火。法眼のいはく。よきことばなり。たゞしおそらくはなんぢ會せざらんことを。則公がいはく、丙丁は火に屬す、火をもてさらに火をもとむ、自己をもて自己をもとむるに、にたりと會せり。禪師のいはく、まことにしりぬ。なんぢ會せざりけり。……」（辨道話）

八

禪家の內、法眼宗を開創した法眼文益禪師は清涼院に止住してゐたのであるが、其の院の監院（監寺）をしてゐた玄則和尚に、ある日禪師は問うてみた。お前は俺の會下に來てから何年になる。玄則は三年になりますと答へる。しからば汝は俺の後輩なるに、何故に俺に佛法を問はないか。玄則は答へる。私は禪師を詐くわけには參りません。私はかつて青峰志國禪師の會下に居りました時、佛法の有難い旨を悟りましたのです。禪師は、然ら

ばお前はいかなる言葉によつて悟つたか。はい私は青峰禪師に問ひました。學人これ何者ぞと。禪師は申されました。丙丁童子來求火と。

法眼禪師はこれを聞いて、洵によい言葉だ。しかし恐らくお前にはほんとうに其の意味が解つてゐまい。玄則は云ふ。丙は火の兄、丁は火の弟、共に火であります。童子は神様です。その火の神様が火を求めにましましたと存じましたので、これは結局自己が自己を求めることだと悟つたのでした。禪師は云つた。それでわかつた。お前は決して悟を開いてゐなかつたのだ。

これは結局言葉の解釋であつて、心を得たのではなかつた。かゝる解釋に滯るところに佛法も悟りもあり得ない。自己が自己を求める自解佛乘は大體かくのごとき悲慘な結末に了るものである。禪師はさらに言葉をつゞける。

「佛法もしかくのごとくならば、けふまでにつたはれじ、こゝに則公懆悶して、すなはちたちぬ。中路にいたりておもひき、禪師はこれ天下の善知識、又五百人の大導師なり。わが非をいさむる、さだめて長處あらん。禪師のみもとにかへりて懺悔禮謝してとふて

いはく、いかなるかこれ學人の自己なる。禪師のいはく、丙丁童子來求火と。則公このことばの下におほきに佛法をさとりき。あきらかにしりぬ、自己卽佛の領解をもて、佛法をしれりといふにはあらずといふことを。もし自己卽佛の領解を佛法とせば、禪師さきのことばをもてみちびかし。又しかのごとくいましむべからず。たゞまさにはじめ善知識をみんより修行の儀則を諮問して一向に坐禪辨道して一知半解を心にとゞむることなかれ。佛法の妙術それむなしからじ。」（辨道話）

佛法が單に口頭禪に終るやうなものであつたなら千年の日月を傳へうる筈はない。佛法は決して單なる解釋ではない。玄則はこの言葉を聞いて懆悶して惱りを含みながら寺を後にして出ていつてしまつた。けれども玄則も考へた。中路にして氣がついた。法眼禪師は普通の禪師ではない。天下に名だたる大善知識である。五百人の雲衲の崇拜の的であり、其の大師匠である。この人が自己の非違を誡むるのであるから普通の誡めではない。確かに自己に非違があるに違ひない。玄則は又引かへして禪師の懷にかへつて來た。

禪師も玄則を憐んで江を渡つてしまへば彼れを救ふことが出來ない、誠に惜しい人間だ

がと其人物を惜んで居た時に、玄則はかへつて來て禪師の前に懺悔禮謝して其の罪をわび て再び問を發して「いかなるかこれ學人の自己なる」と同じことを訊いた。禪師は直ちに 丙丁童子來求火とやはり同じ答へを與へてゐる。玄則は同じ問ひ同じ答へによつて直ち に佛法を覺り得た。

玄則は何故にこの同問同答によつて悟り得たか。其れは玄則の人物が變つてゐたのである。禪師の下を沸然と立ち上つて寺を出た玄則はやはり自他の見に迷うてゐた玄則であつた。自己が佛である他に求むる何ものもないと鼻立々々の玄則であつた。然るに中路にしてこの非を悟つて禪師のもとに禮謝して再び法を求める處に彼れの自己卽佛の心が失なはれかけてゐる。それに對して禪師の同じ答へが其の見を根本的に摧碎してしまつたのである。

こゝで明確に知り得られる。自己卽佛の知解によつて佛法は求められない。若し自己卽佛の知解によつて佛法が得られるなら法眼禪師は玄則を導きもせなければ誡めもせない筈である。故に善知識に從へば初めより修行の方法を問ひ專ら坐禪辨道することであつて、

一知半解の塵を心にとゞめてはならぬ。そこに眞實の佛法を得ることが出來なければならん。眞實の佛法と眞實の人生は洵に其處に門を開くことになる。

九

一……乾唐の古今をきくに、あるひははたけのこゑをきゝて道をさとり、あるひははなのいろをみてこゝろをあきらむるものあり。いはんや釋迦大師は明星をみしとき道を證し、阿難尊者は刹竿のたふれしところに法をあきらめしのみならず、六代よりのち五家のあひだに一言半句のしたに心地をあきらむるものおほし。かれらかならずしもかつて坐禪辨道せるものゝみならんや」（辨道話）

この質問も愈々坐禪の核心にメスを入れやうとするが、道元によつて輕く受流されてゐる。印度支那の古今に於て、竹聲花色を見て道を得たものがある。まして釋迦は明星を見て悟を開いたと云はれ、阿難は刹竿の倒れたのを見て悟道を得たと云ふ。それのみではない。六祖より禪宗五家の中に於ては、僅か一言半句のもとに心を開明したものが多い。必

らずしも皆が坐禪辨道したと云ふわけではない。と云ふのである。

道元は

「しめしていはく。古今に見色明心し、聞聲悟道せし當人、ともに辨道に擬議量なく、直下に第二人なきことをしるべし。」（辨道話）

と云つてゐる。靈雲は桃花を見て道を得、香嚴は擊竹の音によつて心地を開いてゐる。これらの人々は坐禪辨道を疑ひもせず、分別もせず、唯專ら功夫辨道に一切を亡じて自他を忘れ他己を滅して其處に他の自己なきところに得道し得たのであることを知らなければならない。卽ち直下に第二人なきところである。全圓的自己の處に悟道し得たのである。

「……西天および神丹國は人もとより質直なり。中華のしからしむるによりて、佛法を教化するに、いとはやく會入す。我朝はむかしより人に仁智すくなくして、正種つもりがたし。番夷のしからしむるうらみざらんや。又このくにの出家人は、大國の在家人にもおとれり。擧世おろかにして心量狹少なり。ふかく有爲の功を執して事相の善をこのむ。かくのごとくのやからたとひ坐禪すといふともたちまちに佛法を證得せんや」（辨道話）

これが最後の質問である。坐禪の一行が崇高であり實證的であることが解明せられたけれども、我國人にそれが當嵌り得るかと云ふのである。印度や支那やはすでに文明國として人々も充分に陶冶せられて居り質實であり實直である。故に佛法の敎化により直ちに其の効を證し得る。然るに我國は昔より仁義禮智の聖者が生まれない。支那は中華の國であつて、かゝる立派なる道が行はれ得るが、粟散邊土の我國の如きは所謂番夷の國、夷狄の國であるから、かゝる佛敎の如き敎へは行はれ難い。たとひ我國に於て出家と云はるゝ者でも、中華の俗人よりも劣つてゐる。世を擧げて心が狹量で、求むるところはこの世の功のみで現世利益に心をやつしてゐる。かくのごときの者共に坐禪を奬めても、そんなに手早く佛法を證得し得ない。と云ふ。

道元は答へる。

「しめしていはく。いふがごとし。わがくにの人いまだ仁智あまねからず、人また迂曲なり。たとひ正直の法をしめすとも、甘露かへりて毒となりぬべし。名利にはおもむきや

すく、惑執とらけがたし。しかはあれども、佛法に證入すること、かならずしも人天の世智をもて、出世の舟航とするにはあらず。佛在世にもてまりによりて四果を證し、袈裟をかけて大道をあきらめし、ともに愚暗のやから、癡狂の畜類なり。たゞし正信のたすくるところまどひをはなるゝみちあり。また癡老の比丘默坐せしをみて、設齋の信女さとりをひらきし。これ智によらず、文によらず、ことばをまたず、かたりをまたず、たゞしこれ正信にたすけられたり。また釋教の三千界にひろまること、わづかに二千餘年の前後なり。刹土のしなじなになる。かならずしも仁智のくにゝあらず。人またかならずしも利智聰明のみあらんや。しかあれども如來の正法もとより不思議の大功德力をそなへて、ときいたればその刹土にひろまる。人まさに正信修行すれば利鈍をわかず、ひとしく得道するなり。わが朝は仁智のくにゝあらず、人に知解おろかなりとして、佛法を會すべからずとおもふことなかれ。いはんや人みな般若の正種ゆたかなり。たゞ承當することまれに、受用することいまだしきならじ。」（辨道話）

勿論我國人の劣つてゐることは此れを認める。仁智も行亘らず人心も素直でない。故に

この正直の佛教を傳へても却つて仇となることであるかも知れぬ。慾望には目は暗みやすく、其の深い迷ひは溶けがたい。然しながら佛法に入るためには人間の知惠を出世間の方便とするのではない。釋迦の在世に於ても種を弄んで阿羅漢果を得た老比丘があり、袈裟をかけて得道した蓮華色比丘尼のごときがある。これらは共に愚迷の癡人である。唯正しき信のみがかゝる證果を得しめてゐるのである。

又老比丘が或る信女に請ぜられて說法を求められたに拘はらず說くことが出來なかつたが、說法を聽くことを得なかつた信女は齋を設けたことによつて悟道を得た話がある。これの如きは智によつたのでもなく、文によつたのでもなく、言葉によらず、說法によらずたゞ正しき信によつたのである。

又佛教が世界に弘通せられてから僅かに二千餘年だ。國々の種々なる必ずしも仁智の國のみではない。人も亦必ずしも利智聰明でもない。けれども佛の正法にはもとより不可思議の力があつて、時到れば如何なる國にも弘通せられてゆく。人が正信に生き修行さへすれば利根鈍根の差別なく得道し得るものである。

故に我國は仁智の聖者の國にあらず、人は知解に愚であるから佛法には適しないと思つてはいけない。まして人々には佛の智惠が具足してゐるのである。たゞ其れに行當らず受用の方法を未だ知らないのみである。坐禪辨道によつて確かに其の正智を開明するであらう。

道元はかくのごとく答へてゆく。其處には深い信念が、この國を救ひ得べきを確信せしめてゐる。以上によつてあらゆる質疑は了つた。坐禪辨道の道は昭々乎として輝いてゐる。

十

この問答は勿論、他から尋ねられたのではない。道元其人の心と心の質疑應答である。

「さきの問答往來し、賓主相交することみだりがはし。いくばくかはななきそらにはなをなさしむる」（辨道話）

と云つてゐる。賓主相交である。主になり客になつて問答してみた。けれども其れは花なき空に花を降らしたのである。無きものを有るとして說いてみた。無用の事であつたと云ふ。かゝる問答に時を費すべきでなかつたと云ふのである。然しこの問答によつて彼れの信念は明確にせられ、彼れの獨自の法門は鮮やかになつた。敢て他を排するのではないが其穩やかなる風貌を具へてゐるにかゝはらず鋭い剖判のメスは劍の刀尖のやうにひらめいてゐる。

「しかあれども、このくに坐禪辨道におきて、いまだその宗旨のつたはれず。しらんところざさんもの、かなしむべし。このゆゑにいさゝか異域の見聞をあつめ、明師の眞訣をしるしとゞめて、參學のねがはんにきこえんとす。このほか叢林の規範および寺院の格式、いましめすにいとまあらず。又草々にすべからず。」（辨道話）

唯彼れの心は眞に坐禪辨道の人への思ひやりにぬれてゐる。敢て新法を傳へて自己の偉大を明示するのではない。參學のねがはんにきこえんとするのである。故にそのためにはこの外禪門の生活規定又は寺院の內部規定も必要であるが其れは後日を俟ちたいと云ふ。

「おほよそ我朝は龍海の以來にところして、雲煙はるかなれども、欽明用明の前後より、

秋方の佛法東漸する、これすなはち人のさいはひなり。しかるを名相事縁しげくみだれて、修行のところにわづらふ。いまは破衣綴盂を生涯として、青巖白石のほとりに茅をむすんで端坐修練するに、佛向上の事たちまちにあらはれて、一生の參學の大事、すみやかに究竟するものなり。これすなはち龍牙の誡勅なり、鷄足の遺風なり。その坐禪の儀則はすぎぬる嘉祿のころ撰集せし普勸坐禪儀に依行すべし。」（辨道話）

我國は古く欽明、用明の朝に、龍海を隔てゝねるに拘らず西方の佛教の傳來を蒙つたことは我國民の幸福である。けれども各宗派をわかち教の名目にとらはれ事相をことゝして本修行の旨を失つてゐる。私は破衣と綴盂（つぎ合せの鉢）の清貧に甘んじ、人遠き所に庵を結んで坐禪辨道するに、佛地の風光忽ちあらはれて一生參學の大事は立處に完了することを得る。釋迦、迦葉の教へはそこにあり、其の坐禪の様式は嘉祿年間に撰集した普勸坐禪儀によればいゝのである。坐禪こそ佛法の生命に他ならん。

「それ佛法を國中に弘通すること、王勅をまつべしといへども、ふたゝび靈山の遺屬をおもへば、いま百萬億刹に現出する王公相將、みなともにかたじけなく佛勅をうけて、夙生に佛法を護持する素懷をわすれず、生來せるものなり。その化をしくさかひ、いづれのところか佛國土にあらざらん。このゆゑに佛祖の道を流通せん。かならずしもところをえらび緣をまつべきにあらず。たゞけふをはじめとおもはんや。しかればすなはちこれをあつめて佛法をねがはん哲匠あはせて道をとぶらひ雲遊萍寄せん、參學の眞流にのこす。」（辨道話）

佛法が國家に流通するについては、其の國家の爲政者の力による。けれども更に釋迦の靈鷲山上の說明になる經典によれば、現今の各國家の爲政者達はすべて佛の命によつて過去世より佛法護持の本懷を忘れないでこの世に生を受けたものであつた。其れは經典に明らかである。故に佛教の弘まる處、それが卽ち佛國土である。かく考へ來れば祖道を弘めるに場所を選ばず緣を俟つべきではない。唯今初めて弘通するのではない。過去に於てすでに〳〵遠く其の遺命を蒙つて居るのである。故にこの一書を殘して眞に佛法を求ふ明哲の士、眞に參學せんとする雲衲諸士に 贐 とする。

今玆に長く引用した辨道話は正しく法に生きる道元の其の眞實を傳へるものとして洵に

千古に光あらしめる作品であつた。この作品によつて法を求むる一人の眞實の行者道元の全貌を明らかに把握し得られる。この時代の佛教のあり方と彼れの正直の法のあり方とがいかに其處に其のあり方を違へてゐるかを知るべきであつた。彼れは唯眞實を求め、法に生きる以外の何物も要求してゐない。法其者になりきる處に彼れの姿が現實の世界に一人の人間としての姿を示してゐるのである。それは人であつて人にあらず。默照の聖者として永遠に光を投げるものでなくてはならぬ。法に生きる者道元の掛げた光は永遠に其の打坐の一行として世を照らすものであることは疑はない。

法を生かす者

一

辨道話に於ける道元は自己の打坐の一行に對する主張を極めて明確に示してゐる。其處に於ては他の一切の諸宗の存在を許さぬと云ふ嚴然たる態度が看取せられるのである。けれども彼れはしかく偏狹なるものではない。諸宗が其の法の把握の仕方を誤つてゐるのである。法が惡いのではない。法は何處迄も釋迦の教へであり佛道である。其處にには何等疑ふべき忌むべき何者もない。然しながら其の法のあらしめ方が間違つてゐる。其れのみではない現實の諸宗の人々は法の眞實に生きる心を失つてゐる。法を衣食の料とし、法を權力の盾とし、法を趣味の玩弄物としてゐる。法に生きると云ふ眞實を離れて人生もなければ法もない。

この悲しべむき現實に當面して道元は悲しまざるを得なかつた。彼れがわざ〳〵入宋求

法の旅に上つたのも其の爲めであつた。其の旅は苦痛であつたが成功であつた。が歸朝して建仁寺の生活が彼れを幸福にせなかつたのもやはり久しき墮勢がいつ其の夢を破るか知れなかつたからであつた。

深草に一人の隱遁者として庵住の生活を送つた彼れに辨道話が書かれたことは、これ等の時世の悲しき現實に涙する悲痛なる彼れの默しがたき心が其の胸の叫びとしてなさしめた一つの世に對する警告であつたと見て差閊なからう。建仁寺在住中の歸朝早々物した普勸坐禪儀が彼れの打坐の生活の第一の立言であり、彼れの生活の指針であつたけれども、其の指針は辨道話の說明によつてはじめて生きて來なければならない。彼れの生活の第一原理は普勸坐禪儀であつたけれども、其れは辨道話の介添なくては道を傳へるために片手落ちであつた。この第一原理は辨道話の第二原理を俟つて敷衍せられ、解明せられ、はじめて世に生きてゆくのであり、かくてこの悲しむべき時世が救はれ、悲憤おかない法の僞善者達を郤けうるのである。

彼れの生涯の說法は正法眼藏九十五卷として遺されてゐるが、其れは普勸坐禪儀を出發

點として辨道話より次第に各種の說法を生んで行くのであつて、言はゞ坐禪儀を基礎として辨道話が生れ、其の辨道話があらゆる彼れの說法を展開せしめ、又其れが辨道話に歸納せられ、普勸坐禪儀に還へつて行くと見ることが出來る。かゝる彼れの說法は勿論禪門の要旨を說くものではあるが、一面に於ては其の禪のあり方について他を批判することは當然の仕方であつたのである。

けれども辨道話に銳い批判を示したからと云つて彼れは其の批判にのみ生きるものではない。偏狹な一人の鬪士ではない。批判は、又一方に於て諸宗のあり方の非を指摘することの銳さによつて其れを生かすことをも忘れなかつたのである。勿論死せるが如き諸宗の生命に息を與へるためには、彼れの生命の原理の息を吹きかけることは云ふ迄もない。生ける彼れが生ける彼れの生命をぶちつけることによつて諸宗をして再生せしむるのではない。諸宗の生き方に其の方向を與へるのである。彼れの第一の哲理によつて其れを照らすのである。かくして照し出されたる

諸宗は最早や今の諸宗でもなく古の諸宗でもない。其れは又道元其自身のものとなつてゆくことは仕方がなかつた。其經典に於て、其の哲理に於て其の行儀に於て皆然りである。けれどもこの事によつて所謂法なるものは新しい系列を得、新しい力を獲得することによつて、新しい時世に見え、それを育てゝ行くことになる。それは道元の願ひであり、一切に活を與へる彼れの偉大なる教を更に強めつゝ、法の力の再現となつて彼れの忠實なる法の使徒の使命を全くすることになるのである。

二

道元の向ふ所可ならざるはない。經に向へば經を拈弄し、哲理に向へば哲理を自己藥籠中のものとなし了るのである。

「觀自在菩薩の行深般若波羅蜜多時は渾身の照見五蘊皆空なり。五蘊は色受想行識なり。五枚の般若なり。照見これ般若なり」（眼藏、摩訶般若波羅蜜）

と云ひ、

「この宗旨の開演現成するにいはく、色即是空なり、空即是色なり、色是色なり、空即空なり、百艸なり、萬象なり。般若波羅蜜十二枚これ十二入なり。また十八枚の般若あり、眼耳鼻舌身意色聲香味觸法および眼耳鼻舌身意識等なり。また四枚の般若あり、苦集滅道なり。また六枚の般若あり、布施淨戒安忍精進靜慮般若なり。また一枚の般若波羅蜜而今現成せり、阿耨多羅三藐三菩提なり。また般若波羅蜜三枚あり、過去現在未來なり。また般若六枚あり、地水火風空識なり。また四枚の般若よのつねにおこなはる行住坐臥なり」（眼藏、摩訶般若波羅蜜）

と云ひ、

「……而今の一莖蒭の縶作是念は諸法を敬禮するところに、雖無生滅の般若これ敬禮なり。この正當敬禮時ちなみに施設可得の般若現成せり。いはゆる戒定慧乃至度有情類等なり。これを無といふ。無の施設かくのごとく可得なり。これ甚深微妙難測の般若波羅蜜なり」（眼藏、摩訶般若波羅蜜）

と云ひ、

「……しかあれば學般若これ虚空なり、虚空は學般若なり」（眼藏、摩訶般若波羅蜜）

と云ひ、

「……しるべし受持讀誦如理思惟すなはち守護般若なり、欲守護は受持讀誦等なり」（眼藏、摩訶般若波羅蜜）

と云ひ、

「先師古佛云。渾身似レ口掛二虚空一。不レ問二東西南北風一。一等爲レ他談二般若一。滴丁東了滴丁東。これ佛祖嫡々の談般若なり。渾身般若なり、渾他般若なり、渾自般若なり、渾東西南北般若なり」（眼藏、摩訶般若波羅蜜）

と云ひ、

「……しかあればすなはち佛薄伽梵は般若波羅蜜多なり、般若波羅蜜多は是諸法なり。この諸法は空相なり、不生不滅なり、不垢不淨不增不減なり。この般若波羅蜜多の現成せるは佛薄伽梵の現成せるなり。問取すべし參取すべし、供養禮敬する、これ佛薄伽梵に奉覲承事するなり。奉覲承事の佛薄伽梵なり」（眼藏、摩訶般若波羅蜜）

佛の智慧を說く般若經を捉へ來つて一切を般若の現成となし、山川草木等一切の存在は般若の顯現ならぬものはない。說く者も、說く法もすべてが一片の般若の光明となつて他の何者の存在をも許さない莊嚴無比なる世界を現出せしむる。あの尨大極まりなき大般若經をこの一片の光明に照らし窮むる處般若經は生命を得、其の開演は一切を光明の中に溶融し盡さしむるものである。世界は一に佛智顯現の世界となる。

「十方佛土中は法華の唯有なり、これに十方三世一切諸佛阿耨多羅三藐三菩提衆は、轉法華あり、法華轉あり。これすなはち本行菩薩道の不退不轉なり。諸佛智慧甚深無量なり、難解難入の安祥三昧なり」（眼藏、法華轉法華）

と云ひ、

「あるひはこれ文殊師利佛として、大海佛土なる、唯佛與佛の如是相あり。あるひはこれ釋迦牟尼佛として、唯我知是相、十方佛亦然なる、出現於世あり。これすなはち我及十方佛、乃能知是事と、欲令衆生開示悟入せしむる一時なり。あるひはこれ普賢として、不可思議の功德なる、法華轉を成就し深大久遠なる、阿耨多羅三藐三菩提を、閻浮提に

流布せしむるに、三卿二木、大小諸樹を能生する地なり、能潤するあめなり。法華轉を所不能知に、盡行成就なるのみなり」（眼藏、法華轉法華）

と云ひ、

「青原の佛風いまにつたはれ、南嶽の法門、よに開演する、みな如來如實知見なり。まことに唯佛與佛の究盡なり。嫡佛佛嫡の開示悟入なりと法華轉すべし。これを妙法蓮華經ともなづく……」（眼、藏法華轉法華）

と云ひ、

「開示悟入に轉ぜられて地涌し、佛之知見に轉ぜられて地涌す。この轉法華のとき、法華の心悟あるなり、心悟の法華あるなり。あるひは下方といふ、すなはち空中なり。この下この空、すなはち轉法華なり、すなはち佛壽量なり。佛壽と法華と法界と一心とは、下とも現成し、空とも現成すると轉法華すべし。かるがゆゑに下方空といふは、すなはち轉法華の現成なり」（眼藏、法華轉法華）

と云ひ、

「おほよそこのとき法華を轉じて三卿ならしむることあり。法華と轉じて二木ならしむることあり。有覺とまつべきにあらず、無覺とあやしむべきにあらず、自轉して發菩提心なるとき、すなはち南方なり、この成道もとより南方に集會する靈山なり、靈山かならず轉法華なり。虛空に集會する十方佛土なり、これ轉法華の分身なり。すでに十方佛土と轉法華す、一微塵のいるべきところなし」（眼藏、法華轉法華）

と云ひ、

「……よろこぶべし、劫より劫にいたるも法華なり、晝より夜にいたるも法華なり。法華これ從劫至劫なるがゆゑに、法華これ乃晝乃夜なるがゆゑに、たとひ自身心を强弱すとも、さらにこれ法華なり。あらゆる如是は、珍寶なり、光明なり、道場なり、廣大深遠なり、深大久遠なり、心迷法華轉なり、心悟轉法華なる、實にこれ法華轉法華なり」（眼藏、法華轉法華）

天台宗の所依の經典である法華經も、道元に來つて其の無窮を發輝し得ることになる。この法華經のみが一乘法であると云ふ偏狹なる心を開いて、其れを大宇宙の大生命と現成

せしむる處に道元の力が示される。

三

般若經と云ひ法華經と云ひ或は華嚴の總定である海印三昧についても、彼れ特有の無所得、無所住、無時の生命を拈來し來つて、此等大乘の諸經を拈弄して餘す處がない。しかし寧ろ道元の博大なる心は大乘の如き成熟せる經典に重きを置くよりも小乘教として偏せられてゐる小乘の經典を生かし、其の思想を復活せしむる處に彼れの面目があると云つていゝ。然も其處に道元其人の法に大小なし、人に大小の根機の差別ありと主張する根據があり、其故に如何に此等の小乘經典、乃至其思想を生かしゆくかゞ問題である。けれども彼れの博大なる心は其等を再生せしめて餘す處がない。洵に其れは佛教々學の偉觀と云つていゝであらう。

「古佛曰、諸惡莫作、衆善奉行、自淨其意、是諸佛教。これ七佛祖宗の通戒として、前佛より後佛に正傳す。後佛は前佛に相嗣せり。たゞ七佛のみにあらず、是諸佛教なり。この道理を功夫參究すべし。いはゆる七佛の法道、かならず七佛の法道のごとし。相傳相嗣、なほ箇裏の通消息なり。すでに是諸佛教なり、百千萬佛の教行證なり」（眼藏、諸惡莫作）

と云ひ、

「しかあるに阿耨多羅三藐三菩提を學するに、聞教し修行し證果するに、深なり、遠なり、妙なり。この無上菩提を或從知識してきゝ、或從經卷してきく。はじめは諸惡莫作ときこゆるなり。諸惡莫作ときこえざるは、佛正法にあらず、魔說なるべし。しるべし諸惡莫作ときこゆる、これ佛正法なり。この諸惡つくることなかれといふ。凡夫のはじめて造作してかくのごとくあらしむるにあらず、菩提の說となれるを聞教するに、しかのごとくきこゆるなり。しかのごとくきこゆるは、無上菩提のことばにてある道著なり。すでに菩提語なり、ゆゑに語菩提なり。無上菩提の說著となりて聞著せらるゝに轉ぜられて、諸惡莫作とねがひ、諸惡莫作とおこなひもてゆく。諸惡すでにつくられずなりゆくところに、修行力たちまちに現成す。この現成は、盡地、盡界、盡時、盡法を量とし

て、現成するなり、その量は莫作を量とせり」（眼藏、諸惡莫作）

と云ひ、

「正當恁麼時の正當恁麼人は、諸惡つくりぬべきところに住し往來し、諸惡つくりぬべき緣に對し、諸惡つくる友にまじはるにたりといへども、諸惡さらにつくられざるなり。莫作の力量現成するゆゑに、諸惡みづから諸惡と道著せず、諸惡にさだまれる調度なり」（眼藏、諸惡莫作）

と云ひ、

「……諸惡は一條にかつて莫作なりけると現成するなり。この現成に助發せられて、諸惡莫作なりと見得徹し坐得斷するなり。正當恁麼のとき、初中後諸惡莫作にて現成するに諸惡は因緣生にあらず、たゞ莫作なるのみなり。諸惡は因緣滅にあらず、たゞ莫作なるのみなり。諸惡もし等なれば、諸法も等なり。諸惡は因緣生としりて、この因緣のおのれと莫作なるをみざるはあはれむべきともがらなり」（眼藏、諸惡莫作）

と云ひ、

「衆善奉行、この衆善は、三性のなかの善性なり。善性のなかに衆善ありといへども、さきより現成して行人をまつ衆善いまだあらず。作善の正當恁麼時きたらざる衆善なし。萬善は無象なりといへども、作善のところに計會すること、磁鐵よりも速疾なり。そのちから毘嵐風よりもつよきなり。大地山河世界國土、業增上力なほ善の計會を罣礙することあたはざるなり」（眼藏、諸惡莫作）

と云ひ、

「自淨其意といふは、莫作の自なり、莫作の意なり。自の其なり、自の意なり。莫作の其なり、莫作の意なり。奉行の意なり、奉行の淨なり。奉行の淨なるがゆゑに是諸佛教といふなり……」（眼藏、諸惡莫作）

と云ひ、

「諸惡たとひいくかさなりの盡界に彌綸し、いくかさなりの盡法を呑却せりとも、これ莫作の解脫なり。衆善すでに初中後善にてあれば、奉行の性相體力等を如是せるなり」

（眼藏、諸惡莫作）

所謂小乘の七佛通誡偈も道元の心に照らさるゝ處に純一なる大乘の生命を得て、諸法實相の粉本となつて、其の光輝を自在に發輝せしむることになる。

四

又釋迦の說いたと云ふ三乘十二分教の如きもやはり彼れの眼裏に映ずる時大乘の光輝を赫奕たらしめて來るのである。

「三乘十二分教は、佛祖の法輪なり。有佛祖の時處にも轉ず。無佛祖の時處にも轉ず。祖前祖後おなじく轉ずるなり。さらに佛祖を轉ずる功德あり。祖師西來意の正當恁麼時は、この法輪を總不レ要なり。總不レ要といふは、もちゐざるにあらず、やぶるゝにあらず。この法輪、このとき總不要輪の轉ずるのみなり。三乘十二分教なしといはず、總不要の時節を覩見すべきなり。總不要なるがゆゑに、三乘十二分教なるがゆゑに三乘十二分教にあらず。このゆゑに三乘十二分教總不要と道取するなり」（眼藏、佛教）と云ひ、

「これみな佛祖の眼睛なり。佛祖の骨髓なり。佛祖の家業なり。佛祖の光明なり。佛祖の莊嚴なり。佛祖の國土なり。十二分教をみるは、佛祖をみるなり。佛祖を道取するは、十二分教を道取するなり。しかあればすなはち青原の垂一足すなはち三乘十二分教なり。南嶽の說似一物即不中、すなはち三乘十二分教なり」（眼藏、佛教）

と云ひ、

「おほよそしるべし三乘十二分教等は、佛祖の眼睛なり。これを開眼せざらんもの、いかでか佛祖の兒孫ならん。これを拈來せざらんもの、いかでか佛祖の正眼を單傳せん。正法眼藏を體達せざるは、七佛の法嗣にあらざるなり」（眼藏、佛教）

と云つてゐる。かくしてこの小乘的なるものが大乘のものとして其の生命を得るわけである。

更に彼の三十七菩提分法の如きも彼れによつてその正しき道と力とを與へられてゐる。三十七菩提分法は四念住と、四正斷と、四神足と、五根と、五力と、七等覺支と八正道である。

四念住については

「しかあれば諸佛菩薩ともにこの四念住を聖胎とせり。しるべし等覺の聖胎なり。妙覺の聖胎なり。すでに一切諸佛菩薩とあり。妙覺にあらざらん諸佛も、これを聖胎とせり。等覺よりさき、妙覺よりほかに超出せる菩薩、またこの四念住を聖胎とするなり。まことに諸佛諸祖の皮肉骨髓たゞ四念住のみなり」（眼藏、三十七菩提分法）

と云ひ、四正斷其他については此れを一々檢討してすべてを本來の面目に再生せしめ最後に來つて

「この三十七品菩提分法すなはち佛祖の眼睛鼻孔、皮肉骨髓、手足面目なり。佛祖一枚、これを三十七品菩提分法と參學しきたれり。しるべし等覺の聖胎なり。菩提分法なり。坐斷すべし。脫落すべし。しかあれども一千三百六十九品の公案現成と云つてゐる。

彼れが其の最後の說法であつた佛遺敎經中の八大人覺の說の如きも、極めて素朴なる原始的なるものではあるけれども、やはり彼れによつて生かされ、しかも彼れの最後を光あらしめてゐるのである。

「このゆゑに如來の弟子は、かならずこれを修習したてまつる。これを修習せず、しらざるものはおほく、見聞せることあるものはすくなきは、魔嬈によりてしらざるなり。また宿殖善根のすくなき、きかず、みず……いまは千比丘のなかに、一兩箇の八大人覺しれるものなし。あはれむべし。澆季の陵夷、たとふるにものなし……いそぎ習學すべきなり。緩怠なることなかれ。……いまわれら見聞したてまつり、習學したてまつる。宿殖善根のちからなり。いま習學して生々に增長し、かならず無上菩提にいたり、衆生のためにこれをとかんこと、釋迦牟尼佛にひとしくして、ことなることなからん。」

（眼藏、八大人覺）

大乘の人々によつて、殆んど棄てゝ顧みられることのない、かゝる小乘の敎へは、今道元によつて、久しき塵埃の中より拾はれ來つて、その塵を拂はれ本來の光を示すことになる。其の一々が素朴なる姿に於て其のまゝ純乎たる光明を放ち得てゐる處に道元其人の力

の宗教、活の宗教の意味を取得すべきである。

大小の經典はかくして彼れの支持によつて、其處に究極の生命を發輝し得ることが出來た。其處には未だ嘗て見ることが出來なかつた新しいものが脈々として息づいてゐることを感ぜしめられる。

五

經典がある人格を通して其處に凝結せられる重要なる教理思想の方面に於ても道元の力は其れを又た其の人格の光として無限なる生命の世界に迄止揚して行くのである。天台の諸法實相と云ひ華嚴の三界唯心と云ひ涅槃の悉有佛性と云ふ、其等の思想は其等が元來もつたものより何れも生々の力をもち清新なる相を展開して行くことになるのである。悉有佛性については前章に此れを述べたが諸法實相については、

「佛祖の現成は究盡の實相なり、實相は諸法なり、諸法は實相なり、諸法は如是相なり、如是性なり、如是身なり、如是心なり、如是世界なり、如是雲雨なり、如是行住坐臥なり、如是拈華破顏なり、如是嗣法授記なり。如是參學辨道なり、如是松操竹節なり。」（眼藏、諸法實相）

と云ひ、

「いはゆる如來道の本末究竟等は、諸法實相の自道取なり、闍黎自道取なり。一等の參學なり、參學は一等なるがゆゑに唯佛與佛は諸法實相なり、諸法實相は唯佛與佛なり、唯佛は實相なり、與佛は諸法なり、諸法の道を聞取して、一と參じ、多と參ずべからず實相の道を聞取して、虛にあらずと學し、性にあらずと學すべからず。實は唯佛なり、相は與佛なり。乃能は唯佛なり、究盡は與佛なり。諸法は唯佛なり、實相は與佛なり、諸法のまさに諸法なるを唯佛と稱す、諸法のいまし實相なるを與佛と稱す、しかあれば諸法のみづから諸法なる如是相あり、如是性あり。實相のまさしく實相なる如是相あり、如是性あり。唯佛與佛と出現於世するは、諸法實相の說取なり。行取なり、證取なり、その說取は乃能究盡なり。究盡なりといへども乃能なるべし、初中後にあらざるゆゑに如是相なり、如是性なり、このゆゑに初中後善といふ。」（眼藏、諸法實相）

と云ひ、

「乃能究盡といふは、諸法實相なり。如是相は乃能究盡如是性なり。如是性は乃能究盡如是體なり。如是體は乃能究盡如是力なり。如是力は乃能究盡如是作なり。如是作は、乃能究盡如是因なり。如是因は乃能究盡如是緣なり。如是緣は、乃能究盡如是果なり。如是果は乃能究盡如是報なり。如是報は乃能究盡本末究竟等なり本末究竟等の道取まさに現成の如是なるがゆゑに、果々の果は、因果の果にあらず、このゆゑに因果の果はすなはち果果の果なるべし、この果すなはち相性體力をあひ罣礙するがゆゑに、諸法の相性體力等いく無量無邊も實相なり、この果、すなはち相性體力を罣礙せざるがゆゑに、諸法の相性體力等ともに實相なり。この相性體力等を果報因緣等のあひ罣礙するに一任するとき八九成の道あり。この相性體力等を果報因緣等の礙せざるに一任するとき、十成の道あり。いはゆるの如是相は、一如是にあらず。無量無邊、不可道不可測の如是なり。百千の量を量とすべからず。諸法の量を量とすべし。實相の量を量とすべし。」（眼藏、諸法實相）

と云ひ、

「我もし十方佛に同異せば、いかでか乃十方佛の道取を現成せしめん。這頭に十方なきがゆゑに十方は這頭なり。こゝをもて實相の諸法に相見すといふは、春は華にいり人は春にあふ。月は月をてらし、人はおのれにあふ。あるひは人の水をみる、おなじくこれ相見底の道理なり。このゆゑに實相の實相に參學するを佛祖の佛祖に嗣法するとす。これ諸法の諸法に授記するなり。唯佛の唯佛のために傳法し、與佛の與佛のために嗣法するなり。このゆゑに生死去來あり、このゆゑに發心修行あり、菩提涅槃あり、發心修行を菩提涅槃を擧して、生死去來、眞實人體を參究し、接取するに、把定し、放行す。これを命脈として華開結果す。これを命髓として迦葉阿難あり。風雨水火の如是相、すなはち究盡なり。青黃赤白の如是性、すなはち究盡なり。この體力によりて轉凡入聖す。この果報によりて超佛越祖す。この因緣によりて握土成金あり。この果報によりて傳法付衣あり。如來道爲說實相印。いはゆるをいふべし。爲行實相印。爲聽實性印。爲體實證印。かくのごとく參究し、かくのごとく究盡すべきなり。」（眼藏、諸法實相）

と云ひ、

「まことにこの僧にあらざらん張三李四なりとも諸法實相なりとも、佛祖の命脈の正直に通ずる時處には、實相の參學かくのごとく現成するなり。靑原の會下に、これすでに現成せり。しるべし實相は嫡々相承の正脈なり。諸法は究盡參究の唯佛與佛なり。唯佛與佛は如是相好なり」（眼藏、諸法實相）

と說く。諸法實相は法華經の方便品の文であつて、唯佛與佛、乃能究盡、諸法實相、所謂諸法、如是相、如是性、如是體、如是力、如是作、如是因、如是緣、如是果、如是法、如是本末究竟等と說明せるものであつて、これによつて天台宗の諸法實相の哲學の幽遠なる展開を示すことになる。一切を其の當處に於て肯定する實相哲學は華嚴の哲理と共に大乘佛教の二大思潮である。この實相の文を捕へて縱橫無盡に參究する道元の偉大なる理智の閃きと其の信念とを看取すべきであり、同時に新生面を開いてゆく實相哲學を瀏目すべきである。

六

華嚴の三界唯心については、

「三界唯一心、心外無別法、心佛及衆生、是三無差別。一句の道著は、一代の擧力なり。一代の擧力は、盡力の全擧なり。たとひ强爲の爲なりとも、云爲の爲なるべし。このゆゑにいま如來道の三界唯心は、全如來の全現成なり。全一代は全一句なり。三界は全界なり。三界はすなはち心といふにあらず。そのゆゑは、三界は、いく玲瓏八面も、なほ三界なり。三界にあらざらんと誤錯すといふとも、總不著なり。內外中間、初中後際、みな三界なり。三界は三界の所見のごとし。三界にあらざるものゝ所見は、三界を見不正なり。三界には、三界の所見を舊窠とし、三界の所見を新條とす。舊窠也三界也、新條也三界見なり。このゆゑに釋迦大師道、不レ如三三界見二於三界一。この所見。すなはち三界なり。この三界は所見のごとくなり」（眼藏、三界唯心）

と云ひ、

「三界は本有にあらず、三界は今有にあらず、三界は新成にあらず、三界は因縁生にあらず、三界は初中後際にあらず、出離三界あり、今此三界あり、これ機關の機關と相見するなり。葛藤の葛藤を生長するなり。今此三界は、三界の所見なり。いはゆる所見は見於三界なり。見於三界は、見成三界なり、三界見成なり。見成公案なり。よく三界をして、發心修行、菩提涅槃ならしむ、これすなはち皆是我有なり。このゆゑに釋迦大師道、今此三界、皆是我有、其中衆生、悉是吾子。いまこの三界は、如來の我有なるがゆゑに、盡界みな三界なり。三界は盡界なるがゆゑに、今此は過現當來なり。過現當來の現成は、今此を罣礙せざるなり。今此の現成は過現當來を罣礙するなり。我有は、盡十方界、眞實人體なり。盡十方界、沙門一隻眼なり。衆生は、盡十方界眞實體なり。一々衆生の生衆なるゆゑに、衆生なり。悉是吾子は、子也全機現の道理なり。しかあれども吾子、かならず身體髪膚を慈父にうけて、毀破せず、虧闕せざるを、子現成とす。……」

（眼藏、三界唯心）

と云ひ、

「父子同時に生現する父子あり、父子同時現滅する父子あり、父子不同時に現生する父子あり、父子不同時に現滅する父子あり、父子を罣礙せずして、慈父現成せり。有心衆生ありあり無心衆生あり。有心吾子あり、無心吾子あり。かくのごとく吾子子吾、ことごとく釋迦慈父の令嗣なり。十方盡界にあらゆる過現當來の諸衆生は、十方盡界の過現當の諸佛なり。諸佛の吾子は衆生なり。衆生の慈父は諸佛なり。しかあればすなはち百草の華果は、諸佛の我有なり。巖石の大小は、諸佛の我有なり。安處は林野なり、林野は已離なり。しかもかくのごとくなりといふとも、如來道の宗旨は、吾子の道のみなり。其父の道いまだあらざるなりと參究すべし」

（眼藏、三界唯心）

と云ひ、

「諸佛應化法身、亦不レ出二三界一、三界外無二衆生一、佛何所レ化。是故我言、三界外、別有二一衆生界藏一者。外道大有經中說、非二七佛之所說一。あきらかに參究すべし。諸佛應化法身は、みなこれ三界なり。三界は無外なり。たとへば如來の無外なるがごとし。牆壁の

無外なるがごとし。三界の無外なるがごとく衆生無外なり。無衆生のところ、佛何所化なり。佛所化はかならず衆生なり。しるべし三界外に、一衆生界藏を有せしむるは、外道大有經なり。七佛教にあらざるなり」（眼藏、三界唯心）

と云ひ、

「唯心は一二にあらず。三界にあらず、出三界にあらず、無有錯謬なり。有慮知念覺なり、牆壁瓦礫なり、大地山河なり。心これ皮肉骨髓なり、心これ拈華破顏なり。有心あり、無心あり、有身の心あり、無身の心あり。身先の心あり、身後の心あり。身を生ずるに胎卵濕化の種品あり、心を生ずるに胎卵濕化の種品あり、青黄赤白これ心なり、長短方圓これ心なり、生死去來これ心なり、年月日時これ心なり、夢幻空華これ心なり、水沫泡焰これ心なり、春華秋月これ心なり、造次顚沛これ心なり。しかあれども毀破すべからず。かるがゆゑに諸法實相心なり、唯佛與佛心なり」（眼藏、三界唯心）

道元はかくのごとく華嚴の三界唯心を説明して餘す處がない。三界は欲、色、無色の三界ではなくなった。全宇宙間の存在全體が三界であり一心である。故に一心も單なる人の心のみではない。存在の個々物々、物質も精神もすべてが一心となる。其處に心佛衆生是三無差別の正當恁麼の説明が盡されてゐることになる。華嚴の哲學はこゝに於て廣大無邊なる新生面を得ることになつた。

七

道元は佛教の大小諸經典、並に其の思想に生命を與へるのみではない。禪宗それ自身がもつ所謂古佛の公案に對しても彼れ獨自の立場に於て此れを眺め、此れに生彩あらしめてゐるのである。禪其れ自身がこゝに於ても彼れの人格の光りに更に一入の力を增すことになる。

彼の玄沙師備禪師の一顆明珠の公案を捉へ來つて、

「つひにみちをえてのち人にしめすにいはく、盡十方世界是一箇明珠。……いま道取する盡十方世界是一顆明珠、はじめて玄沙にあり。その宗旨は、盡十方世界は、廣大にあらず、微少にあらず、方圓にあらず、中正にあらず。活鱍々にあらず、露迥々にあらず、

さらに生死去來にあらざるゆゑに生死去來なり。恁麼のゆゑに、昔日曾此去にして、而今從此來なり。究辨するにたれか片々なりと見徹するあらん。たれか兀兀なりと檢擧するあらんや」（眼藏、一顆明珠）

と云ひ、

「玄沙曰、知汝向二黑山鬼窟裏一作二活計一。しるべし日面月面は、往古よりいまだ不換なり。日面はともに共出するゆゑに、若六月道二正是時一、不レ可レ道二我性熱一也なり。しかあればすなはち、この明珠の有始無始は、無端なり。盡十方世界一顆明珠なり、兩顆三顆といはず。全身これ一隻の正法眼なり、全身これ眞實體なり、全身これ一句なり、全身これ光明なり、全身これ全身なり、全身のときに、いまの見色聞聲の觀音彌勒あり。現身說法の古佛新佛あり」（眼藏、一顆明珠）

と云ひ、

「正當恁麼時、あるひは虛空にかゝり、衣裏にかゝる。あるひは額下にをさめ、髻中にをさむる、みな盡十方世界一顆明珠なり。ころものうらにかゝるを様子とせり、おもてにかけんと道取することなかれ。髻中領下にかゝるを様子とせり、髻表額表に弄せんと擬することなかれ。醉酒の時節にたまをあたふる親友あり、親友にはかならずたまをあたふべし。たまをかけらるゝ時節、かならず醉酒するなり。既是恁麼は、盡十方界にてある一顆明珠なり。しかあればすなはち轉不轉のおもてをかへゆくにたれども、すなはち明珠なり。まさにたまはかくありけるとしる、すなはちこれ明珠なり。明珠はかくのごとくきこゆる聲色あり。既得恁麼なるには、われは明珠にはあらじとたどらるゝは、たまにはあらじとうたがはざるべきなり。たどりうたがひ取舍する作無作も、たゞしばらく小量の見なり。さらに小量に相似ならしむるのみ」（眼藏、一顆明珠）

と云ひ、

「愛せざらんや、明珠かくのごとくの彩光きはまりなきなり。彩々光々の片々條々は、盡十方界の功德なり。たれかこれを攙奪せん、行市に甄をなぐる人あらず。六道の因果に不落有落をわづらふことなかれ。不昧本來の頭正尾正なる、明珠は面目なり、明珠は眼

晴なり。しかあれども、われもなんぢもいかなるかこれ明珠、いかなるかこれ明珠にあらざるとしらざる。百思百不思は、明々の艸料をむすびきたれども、玄沙の法道により て、明珠なりける身心の様子をもきゝしりあきらめつれば、心これわたくしにあらず。起滅をたれとしてか、明珠なり明珠にあらざると取舎にわづらはん、たとひたどりわづらふも明珠にあらぬにあらず。明珠にあらぬがありておこさせける行にも念にもにては あらざれば、たゞまさに黒山鬼窟の進歩退歩これ一顆明珠なるのみ」（眼蔵、一顆明珠）と云ふ。

全世界を擧げて一箇の明珠と道取する處にこの公案に更に其の生命を新しくすることになる。

八

又趙州従諗禪師の柏樹子の公案を捉へ來つて、

「大師因有レ僧問。如何是祖師西來意。師云。庭前柏樹子。この一則公案は、趙州より起首せりといへども、必竟して諸佛の渾身に作家しきたれるところなり。たれかこれ主人公なり。いましるべき道理は、庭前柏樹子、これ境にあらざる宗旨なり。柏樹子これ自己にあらざる宗旨なり。和尚莫三以レ境示レ人なるがゆゑに。いづれの和尚か和尚にさへられん。さへられずば吾なるべし。いづれの吾か吾にさへられん。たとひさへらるとも人なるべし。いづれの境か西來意に罣礙せられざらん。境はかならず西來意なるべきがゆゑに。しかあれども西來意の、境をもちて相待せるにあらず。祖師西來意、かならずしも正法眼藏、涅槃妙心にあらざるなり。不是心なり、不是佛なり、不是物なり。いま如何是祖師西來意と道取せるは、問取のみにあらず、兩人同得見のみにあらざるなり。正當恁麼問時は、一人也未可相見なり。自己也能得幾なり。さらに道取するに渠、無レ不レ是なり。このゆゑに錯々なり。錯々なるがゆゑに、將錯就錯なり。承虚接響にあらざらんや。豁達靈根無向背なるがゆゑに、庭前柏樹子なり。境にあらざれば柏樹子にあるべからず。たとひ境なりとも、吾不以境

云。吾不三以レ境示レ人。僧曰。如何是祖師西來意。師云。庭前柏樹子。この一則公案は、趙州より起首せりといへども、必竟して諸佛の渾身に作家しきたれるところなり。たれかこれ主人公なり。いましるべき道理は、庭前柏樹子、これ境にあらざる宗旨なり。柏樹子これ自己にあらざる宗旨なり。和尚莫三以レ境示レ人なるがゆゑに。いづれの和尚か和尚にさへられん。さへられずば吾なるべし。いづれの吾か吾にさへられん。たとひさへらるとも人なるべし。いづれの境か西來意に罣礙せられざらん。境はかならず西來意なるべきがゆゑに。しかあれども西來意の、境をもちて相待せるにあらず。祖師西來意、かならずしも正法眼藏、涅槃妙心にあらざるなり。不是心なり、不是佛なり、不是物なり。いま如何是祖師西來意と道取せるは、問取のみにあらず、兩人同得見のみにあらざるなり。正當恁麼問時は、一人也未可相見なり。自己也能得幾なり。さらに道取するに渠、無レ不レ是なり。このゆゑに錯々なり。錯々なるがゆゑに、將錯就錯なり。承虚接響にあらざらんや。豁達靈根無向背なるがゆゑに、庭前柏樹子なり。境にあらざれば柏樹子にあるべからず。たとひ境なりとも、吾不以境

示人なり。和尚莫以境示人なり。古祠にあらず。すでに古祠にあらざれば、埋沒しもてゆくなり。すでに埋沒しもてゆくことあれば、還吾功夫來なり。還吾功夫來なるがゆゑに、吾不以境示人なり。さらになにをもてか示人する。吾亦如是なるべし」（眼藏、柏樹子）

と云ひ、

「大師有レ僧問。柏樹還有二佛性一也無。大師云。有。僧曰。柏樹幾時成佛。大師云。待二虛空落レ地。僧曰、虛空幾時落レ地。大師云。待二柏樹子成佛一。いま大師の道取を聽取し、這僧の問取をすてざるべし。大師道の虛空落地時、および柏樹成佛時は、互相の相對なる道得にあらざるなり。柏樹を問取し、佛性を問取す。成佛を問取し、時節を問取す。虛空を問取し、落地を問取するなり。いま大師の向僧道するに、有と道取するは、柏樹佛性有なり。この道を通達して、佛祖の命脈を通暢すべきなり。いはゆる柏樹に佛性ありといふこと、尋常に道不得なり。未曾道なり。すでに有佛性なり。その爲體あきらむべし。有佛性なり柏樹いまその次位の高低いかん。壽命身量の長短たづぬべし。種姓類族きくべし。さらに百千の柏樹、みな同種姓なるか、別種胤なるか。成佛する柏樹あり、

修行する柏樹あり、發心する柏樹あるべきか。柏樹は成佛あれども、修行發心等を具足せざるか。柏樹と虛空と、有甚麼因緣なるぞ。柏樹の成佛さだめて待落儞地時なるは、柏樹の樹功かならず虛空なるか、柏樹の地位は、虛空それ初地か、果位か。審細に切夫參究すべし」（眼藏、柏樹子）

と云ひ、

「我還問汝趙州老、儞亦一根枯柏樹なれば、恁麼の活計を消息せるか。おほよそ柏樹有佛性は、外道二乘等の境界にあらず、經師論師等の見聞にあらざるなり。いはんや枯木死灰の言葉に開演せられんや。たゞ趙州の種類のみ參學參究するなり。いま趙州道の柏樹有佛性は、柏樹被柏樹礙也無なり。佛性被佛性礙也無なり。この道取、いまだ一佛二佛の究盡するところにあらず、佛面あるもの、かならずしもこの道得を究盡することうべからず。たとひ諸佛のなかにも、道得する諸佛あるべし。いはゆる待虛空落地は、あるべからざることをいふにあらず、柏樹子の成佛する每度に虛空落地するなり。その落地響かくれざること、百千の雷よりもすぎたり。柏樹成佛の時

は、しばらく十二時中なれども、さらに十二時中なり。その落地の虚空は、凡聖所見の虚空のみにはあらず、このほかに一片の虚空あり。餘人所不見なり。趙州一箇見なり。虚空のおつるところの地、また凡聖所領の地にあらず、さらに一片の地あり。陰陽所不到なり。趙州一箇到なり。虚空落地の時節、たとひ日月山河なりとも待なるべし。たれか道取する、佛性かならず成佛すべしと。佛性は成佛以後の荘厳なり。さらに成佛と同生同参する佛性もあるべし。しかあればすなはち柏樹と佛性と、異音同調にあらず、爲道すらくは、何必なり。作麼生と参究すべし」（眼藏、柏樹子）

この趙州の有名なる公案も道元の眼裏にはかく映じて來るのである。一切のものを捕へ來つて一々に其れを檢討するに何等澁滯する處はない。主語と客語が主客の相對におかれず、主客未到の世界に於て其れを取得する處に彼れの面目があり、彼れの生命の把握があり、其の生命の移入がある。かくして一切のものが生かされ莊嚴せられてゆくのである。

この外古鏡八則に亘る心鏡揩磨の古鏡の公案、雲居の四恁麼による恁麼の公案、西天東土佛祖の纏綿を說く葛藤の公案、不昧因果不落因果脫落野狐身を說く大修行の公案等すべて道元の身心に銘じて說破せられざるものはない。すべてが彼れの生活底に依存する哲學的宗教の叫びでないものはなく、其の力、其光を共受せないものはない。

九

道元は辨道話に於て

「宗門の正傳にいはく、この單傳正直の佛法は、最上のなかに、最上なり、參見知識のはじめより、さらに燒香、禮拜、念佛、修懺、看經をもちゐず。たゞし打坐して身心脫落することをえよ」（眼藏、辨道話）

この言葉によると彼れに於ては打坐の一行以外に燒香、禮拜、念佛、修懺、看經等の一切の佛教の作法を認めないことを示してゐるやうである。しかし道元はかゝるものも其の正直の法に於ては別として、はやり其の精神を生かすことを忘れるものではない。

「釋迦牟尼佛のいはく、無上菩提を演說する師にあはんには、種姓を觀ずることなかれ、容顏をみることなかれ、非をきらふことなかれ、行をかんがふることなかれ。たゞ般若

を尊重するがゆゑに、日々に百千兩の金を食せしむべし、天食をおくりて供養すべし、天華を散じて供養すべし。日々三時に禮拜し恭敬して、さらに患惱の心を生ぜしむることなかれ。かくのごとくすれば菩提の道かならずところあり。われ發心よりこのかたかくのごとく修行して、今日は阿耨多羅三藐三菩提をえたるなり」（眼藏、禮拜得髓）

の大般若經の文を引いて、

「しかあれば若樹若石もとかましとねがひ、若田若里もとかましともとむべし。露柱に問取し、牆壁をしても參究すべし。むかし野干を師として禮拜問法する天帝釋あり」

（眼藏、禮拜得髓）

と云ひ、唐朝の趙州禪師の例を引いて、

「……得道得法の比丘尼出世せるとき、求法參學の比丘僧、その會に投じて、禮拜問法するは參學勝躅なり……」（眼藏、禮拜得髓）

と云ひ、志閑禪師の例を引いて

「……志閑禪師の末山尼了然を禮拜求法する志尤の勝躅なり……」（眼藏、禮拜得髓）

と云ひ、また宋朝の例を引いて、

「雲衲霞袂あつまりて禮拜請益すること、出家の宗匠におなじ。佛法を修行し、佛法を道取せんは、たとひ七歳の女性なりとも、すなはち四衆の導師なり、衆生の慈父なり。たとへば龍女成佛のごとし、供養恭敬せんこと、諸佛如來にひとしかるべし。これすなはち佛道の古儀なり、しらず單傳せざらんはあはれむべし」（眼藏、禮拜得髓）

と云つて、禮拜供養の眞味を認めて之れを奬めてゐるのである。

「阿耨多羅三藐三菩提の修證、あるひは知識をもちゐ、あるひは經卷をもちゐる。知識といふは、全自己の佛祖なり、經卷といふは、全自己の經卷なり。全佛祖の自己、全經卷の自己なるがゆゑに、かくのごとくなり。自己と稱すといへども我儞の拘牽にあらずこれ活眼睛なり。活拳頭なり。しかあれども念經、看經、誦經、書經、受經、持經あり。ともに佛祖の修證なり。しかあるに佛經にあふことたやすきにあらず。於二無量國中一乃至名字不レ可レ得レ聞なり。於二佛祖中一、乃至名字、不レ可レ得レ聞。於二命脈中一、乃至名字不レ可レ得レ聞なり。佛祖にあらざれば、經卷を見聞讀誦解義せず。佛祖參學より、かつかつ

經卷を參學するなり。このとき耳處、眼處、舌處、鼻處、身心塵處、到處、聞處、話處の聞持、受、說經等の現成あり。爲レ求二名聞一故、說二外道論議一の輩、佛經を修行すべからず。そのゆゑは、經卷は、若樹若石の傳持あり、若田若里の流布あり。塵刹の演出あり、虛空の開講あり」（眼藏、看經）

と云ひ、

「おほよそ看經は、盡佛祖を把拈しあつめて、眼睛として看經するなり。正當恁麼時、たちまちに佛祖作佛し、說法し、說佛し、佛作するなり。この看經の時節にあらざれば、佛祖の頂顙面目いまだあらざるなり。現在佛祖の會に、看經の儀則、それ多般あり、いはゆる施主入山、請大衆看經、あるひは常轉請僧看經、あるひは僧衆自發心看經等なり。このほか大衆爲亡僧看經あり」（眼藏、看經）

と云ひ、

「佛祖の屋裏に、承當あり、不承當ありといへども、看經請益は、家常の調度なり」（眼藏、看經）

と云つてゐる。看經の精神を生かし、看經の請益を認めてゐる。しかも家常の調度と云ふ。

十

戒を認め懺悔をも認めてゐることは隨聞記によつても明白である。弟子の懷奘との對話の中に、

「問て云く、四十八輕戒の中に未受戒の所犯を犯と名くと見ゆ。如何ん。

答て云く、然らず。彼は未受戒の者、今ま受戒せんとする時所造のつみを懺悔するに、今の戒にのぞめて、前に十戒等を授かりて犯し、後ち亦輕戒を犯ずるをも犯戒と云なり。以前所造の罪を犯戒と云にはあらず、

問て云く、今受戒せんとする時、まへに造りし所の罪を懺悔せんが爲に、未受戒の者に十重四十八輕戒を教へて讀誦せしむべしと見えたり。亦下の文に、未受戒の前にして說戒すべからずと。此の二處の相違如何。

答て云く、受戒と誦戒とは別なり。懺悔のために戒經を誦ずるは猶是念經なり。故に未

受者戒經を誦ぜんとす。彼が爲に戒經を說かんこと咎あるべからず。下の文に、利養の爲のゆゑに未受戒の前にして是を說ことを制するなり。今受戒の者に懺悔せしめん爲には最も是を教ゆべし。

問て云く、受戒の時は七逆の受戒を許さず。先の戒の中には逆罪も懺悔すべしと見ゆ。如何。

答て云く、實に懺悔すべし。受戒の時許さゞることは、且く抑止門とて抑ゆる義なり。亦上の文は、破戒なりとも還得受せば清淨なるべし。懺悔すれば清淨なり。未受に同からず。問て云く、七逆すでに懺悔を許さば、亦受戒すべきか。如何。

答て云く、然あり。故僧正自ら所立の義なり。既に懺悔を許す、亦是受戒すべし。逆罪なりとも、くひて受戒せば授くべし。況や菩薩はたとひ自身は破戒の罪を受とも、他の爲には受戒せしむべきなり」（隨聞記一）

と云つてゐる。戒は禪戒一味であつて、戒なき禪はなく坐禪には一切の戒を具有してゐることは前章にも述べたが、懺悔もやはり共れは認められてゐる。かくのごとく辨道話に

於ては此等のものが排撃せられてゐるやうであるが、傳統的な佛教の作法は一々此れを認めて排斥してはゐない。其等を今のあり方に於て排するのではない。

道元はかくして法に生くるものであつて、同時に法を生かすものであつた。其の內容に於ても其の外形に於ても、それを正しく生かすことを忘れなかつた。佛法の一切のものは、この人の力と光とによつて新しく力づけられ、光あらしめられてゐることは忘るゝことが出來ない。又世法もかくのごとくしてこの人の力と生命を俟つて生かさるべきであつた。

生活を法の深さに掘下げる

一

道元が出家して比叡山に於て修行中に突當つた矛盾は、一切のものにはすでに佛性があると云ふのに、何故に修行せなければならんのであるかと云ふことであつた。佛性があれば我はすでに佛である。佛であるものが何故に佛になるために修行するのであるか、其れは甚しい矛盾でなければならない。この矛盾を解決するためには長い修行が必要であつた。道元は、其の解決のために大死一番して打坐の一行にすべてを解決し盡したのであつた。

しかし、この道元が突當つた矛盾は又次の如くに解し得られる。我々はすでに佛に救はれてゐるのであるが、現實の我々は何故に甚しく佛と遠い苦しい生活を營まねばならんのであるか。最も佛らしくない生活を苦しみながら一生を了らねばならんのであるかと。この矛盾はいかにして解決し得られるであらうか。こゝに道元が世法と佛法とをいかに其對

立から解放するかゞ問題とならねばならぬ。

この問題を解決するためには天福元年秋に鎭西の俗弟子楊光秀に與へたと云ふ現成公案が其の要を說いて餘りがない。

「諸法の佛法なる時節、すなはち迷悟あり、修行あり、生あり死あり、諸佛あり衆生あり」

こゝに云ふ諸法は世法の世界と解していゝ。この諸法の佛法なる時節と云ふは、世法は佛法と相待するものではなくて、世法卽佛法である。この見地より見れば迷悟があり修行があり生死があり、諸佛があり衆生があると云ふ相對の世界がたゞちに佛界でなくてはならぬ。諸法が歷然として妙有して居る佛界に他ならぬ。それは最早かく相對してゐるけれども、それは相對のまゝ相對ではない。迷と悟と佛と衆生と修行と成佛と、いかにも相對してゐるやうではあるが、衆生は衆生、佛は佛、迷は迷、悟は悟として獨自に存在する。相對してゐるものではない。それが相對と見えるのは、猶ほ差別の見地に立つて眺めてゐるからである。

「萬法ともにわれにあらざる時節、まどひなく、さとりなく、諸佛なく、衆生なく、生な